

常磐自動車道遺跡調査報告 69

南狼沢遺跡

南狼沢A遺跡（1次調査）

南狼沢B遺跡

2014年

福島県教育委員会
財団 法人 福島県文化振興財団
東日本高速道路株式会社

常磐自動車道遺跡調査報告69

みなみおいざわ
南狼沢遺跡

みなみおいざわ
南狼沢A遺跡（1次調査）

みなみおいざわ
南狼沢B遺跡

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通しました。残念なことに平成23年3月11日に起きました東日本大震災とそれに伴う原子力災害により現在も一部が不通になっておりますが、平成24年には南相馬～相馬間が部分開通し、現在も新地～宮城県山元間において急ピッチで建設が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しております。周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成24年度に行った新地町の南狼沢遺跡、南狼沢A遺跡(1次調査)及び南狼沢B遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料となり、さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に御活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、新地町教育委員会、財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成26年3月

福島県教育委員会

教育長 杉 昭 重

あいさつ

財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大规模な開発に伴う埋蔵文化財の調査を実施しています。

当財団では、常磐自動車道建設にかかる埋蔵文化財については、平成6年度からいわき市に所在する遺跡の調査を開始しました。それから18年の星霜を経た平成24年度には、福島県でも最北端の新地町に所在する遺跡の調査を実施しました。

本報告書は、平成24年度に発掘調査を行った南狼沢遺跡、南狼沢A遺跡、南狼沢B遺跡の調査成果をまとめたものです。

南狼沢遺跡では、縄文時代早期末葉から前期前葉頃を中心とする集落跡の一部を確認しました。南狼沢B遺跡では、縄文時代中期末葉の集落跡と平安時代の木炭窯跡を確認し、旧石器時代の石器も出土しています。

南狼沢A遺跡では、平安時代の鉄や木炭などの生産に密接に関わる掘立柱建物跡を確認しました。鉄や木炭は、古代における東北地方の政治的な経営を支える重要な資源のひとつで、本県浜通り地域が一大生産拠点となっていました。南狼沢A遺跡で確認された掘立柱建物跡は、隣接する南狼沢B遺跡などで行なわれていた鉄や木炭の生産に関連する遺構群である可能性が高く、鉄の生産に係る原材料や生産物などの「モノ」の管理だけでなく、生産に従事する「ヒト」の管理を担う遺跡であったと考えられます。

当財団が実施しました発掘調査が地域文化の理解を広め、郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。さらには、常磐自動車道建設が復興の足掛かりとなるように祈念いたします。

終わりに、この調査に御協力いただきました新地町並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月

財団法人 福島県文化振興財団

理事長 遠藤俊博

緒 言

1. 本書は、平成24年度に実施した常磐自動車道(相馬工区)遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

| | | |
|--------|-------------------|------------------|
| 南狼沢遺跡 | 福島県相馬郡新地町谷地小屋字南狼沢 | 埋蔵文化財番号：56100116 |
| 南狼沢A遺跡 | 福島県相馬郡新地町谷地小屋字南狼沢 | 埋蔵文化財番号：56100154 |
| 南狼沢B遺跡 | 福島県相馬郡新地町谷地小屋字南狼沢 | 埋蔵文化財番号：56100159 |
3. 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
4. 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団(平成24年10月1日より福島県文化振興財團に改称)に委託して実施した。
5. 財団法人福島県文化振興事業団(当時)では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

| | | |
|-------------|-------------|-------------|
| 主 幹 吉田 秀享 | 文化財主査 佐藤 悅夫 | 文化財主査 五十嵐敏裕 |
| 文化財主査 萩野 美香 | 文化財主査 佐藤 啓 | 文化財主査 福田 秀生 |
| 嘱 託 由井 文菜 | | |

さらに、調査期間中は臨時に下記の職員を配置した。

| |
|-------------|
| 文化財主査 阿部 知己 |
|-------------|
6. 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
7. 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託した。

| | |
|-----------------------|---------------|
| 南狼沢A遺跡の樹種同定 | 古代の森研究舎 |
| 南狼沢B遺跡の樹種同定・放射性炭素年代測定 | 株式会社 加速器分析研究所 |
| 石器石質鑑定 | 株式会社 バレオ・ラボ |
8. 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
9. 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から協力・助言を頂いた。

| | |
|----------|------------------------|
| 新地町教育委員会 | 東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所 |
|----------|------------------------|

用 例

1. 本書における遺構実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 方 位 遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。表記がない遺構図はすべて図の真上を真北とした。
- (2) 標 高 挿図中に示した標高は、海拔高度を示す。
- (3) 縮 尺 各挿図中に縮尺を示した。
- (4) 土 層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。
- (5) ケ バ 遺構内の傾斜部は「↑↑」の記号で表現し、相対的に緩傾斜の部分には「↓」の記号を使用した。また、後世の搅乱部や人為的な削土部は「〒」の記号で表現した。
- (6) 網 点 挿図中の網点は以下に示す。これ以外の網点は同挿図中に用例を示した。
 被熱範囲
- (7) 遺構番号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。
- (8) 土 色 土層注記に使用した土色は『新版標準土色帖』に基づいている。

2. 本書における遺物実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 縮 尺 各挿図中に縮尺を示した。
- (2) 遺物番号 挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。
- (3) 注 記 出土層位などは遺物番号の右脇に示した。
- (4) 土器断面 粘土紐の積上げ痕は、断面に一点鎖線を入れて表示し、胎土中に纖維が混和されたものには▲を付した。また、須恵器は黒塗り、陶器はグレー塗りとした。
- (5) 計測値 () 内の数値は推定値、〔 〕内の数値は遺存値を示す。
- (6) 網 点 网点は同挿図中に用例を示した。

3. 本文中および遺物整理に使用した略記号は次の通りである。

新地町…S T 南狼沢遺跡…MO 南狼沢A遺跡…MO・A 南狼沢B遺跡…MO・B
竪穴住居跡…S I 挖立柱建物跡…S B 木炭窯跡…S C 土 坑…S K
採掘坑…S X 柱穴・小穴…P グリッド…G
遺構外堆積土…L 遺構内堆積土…ℓ

4. 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、本文末にまとめて掲載した。

目 次

序 章

| | |
|-----------------|----|
| 第1節 事業経緯 | 1 |
| 第2節 遺跡の環境と周辺の遺跡 | 6 |
| 第3節 調査の方法 | 10 |

第 1 編 南狼沢遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過

| | |
|-----------|----|
| 第1節 遺跡の位置 | 13 |
| 第2節 調査経過 | 15 |

第2章 調査成果

| | |
|----------------|----|
| 第1節 遺構の分布と基本土層 | 16 |
| 第2節 土 坑 | 18 |
| 第3節 遺構外出土遺物 | 19 |
| 第3章 総 括 | 21 |

第 2 編 南狼沢A遺跡（1次調査）

第1章 遺跡の位置と調査経過

| | |
|-----------|----|
| 第1節 遺跡の位置 | 25 |
| 第2節 調査経過 | 27 |

第2章 調査成果

| | |
|----------------|----|
| 第1節 遺構の分布と基本土層 | 28 |
| 第2節 積穴住居跡 | 31 |
| 第3節 掘立柱建物跡 | 38 |
| 第4節 土 坑 | 46 |
| 第5節 遺構外出土遺物 | 52 |
| 第3章 総 括 | 53 |

第 3 編 南狼沢B遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過

| | |
|-----------|----|
| 第1節 遺跡の位置 | 59 |
| 第2節 調査経過 | 59 |

第2章 調査成果

| | |
|----------------|----|
| 第1節 遺構の分布と基本土層 | 62 |
| 第2節 堅穴住居跡 | 66 |
| 第3節 木炭窯跡 | 70 |
| 第4節 土 坑 | 75 |
| 第5節 その他の遺構 | 88 |
| 第6節 遺構外出土遺物 | 91 |
| 第3章 総 括 | 95 |

第4編 自然科学分析

第1章 南狼沢A遺跡の自然科学分析

| | |
|--------------|-----|
| 第1節 炭化材の樹種同定 | 101 |
|--------------|-----|

第2章 南狼沢B遺跡の自然科学分析

| | |
|--------------|-----|
| 第1節 炭化物の樹種同定 | 103 |
|--------------|-----|

| | |
|-------------------|-----|
| 第2節 炭化物の放射性炭素年代測定 | 109 |
|-------------------|-----|

挿図・表・写真目次

序 章

[挿 図]

| | | | |
|-------------------|---|---------------------|---|
| 図1 常磐自動車道位置図..... | 1 | 図3 新地町の主要遺跡位置図..... | 8 |
| 図2 表層地質図..... | 7 | | |

[表]

| | | | |
|------------------------|---|----------------|---|
| 表1 平成24年度の調査遺跡一覧 | 5 | 表2 周辺遺跡一覧..... | 9 |
|------------------------|---|----------------|---|

第1編 南狼沢遺跡

[挿 図]

| | | | |
|-----------------|----|-----------------|----|
| 図1 調査区位置図..... | 14 | 図4 1号土坑..... | 19 |
| 図2 遺構配置図..... | 17 | 図5 遺構外出土遺物..... | 20 |
| 図3 基本土層柱状図..... | 18 | | |

[写真図版]

| | | | |
|--------------|-----|--------------------|-----|
| 1 遺跡遠景..... | 115 | 7 北区全景..... | 118 |
| 2 遺跡遠景..... | 115 | 8 基本土層..... | 118 |
| 3 遺跡遠景..... | 116 | 9 南区全景..... | 119 |
| 4 遺跡遠景..... | 116 | 10 北区全景..... | 119 |
| 5 調査区全景..... | 117 | 11 遺構外出土遺物(1)..... | 120 |
| 6 南区全景..... | 117 | 12 遺構外出土遺物(2)..... | 120 |

第2編 南狼沢A遺跡（1次調査）

[挿 図]

| | | | |
|---------------------|----|-------------------------|----|
| 図1 調査区位置図..... | 26 | 図10 3号掘立柱建物跡..... | 42 |
| 図2 遺構配置図..... | 29 | 図11 4号掘立柱建物跡..... | 43 |
| 図3 1号竪穴住居跡..... | 32 | 図12 5号掘立柱建物跡..... | 44 |
| 図4 1号竪穴住居跡出土遺物..... | 33 | 図13 6号掘立柱建物跡..... | 45 |
| 図5 2号竪穴住居跡(1)..... | 34 | 図14 1号土坑、出土遺物..... | 47 |
| 図6 2号竪穴住居跡(2)..... | 35 | 図15 2号土坑、出土遺物..... | 49 |
| 図7 2号竪穴住居跡出土遺物..... | 37 | 図16 4・5号土坑、出土遺物..... | 51 |
| 図8 1号掘立柱建物跡..... | 39 | 図17 遺構外出土遺物..... | 52 |
| 図9 2号掘立柱建物跡..... | 40 | 図18 製鉄遺跡関連の掘立柱建物跡群..... | 56 |

[写真図版]

| | | | |
|--------------|-----|--------------|-----|
| 1 調査区遠景..... | 123 | 4 調査区遠景..... | 124 |
| 2 調査区遠景..... | 123 | 5 調査区全景..... | 125 |
| 3 調査区遠景..... | 124 | 6 調査区全景..... | 125 |

| | | | | | |
|-----------|---------------|-----|-----------|------------------|-----|
| 7 | 1号竪穴住居跡全景 | 126 | 21 | 3号掘立柱建物跡細部 | 133 |
| 8 | 1号竪穴住居跡細部(1) | 126 | 22 | 4号掘立柱建物跡全景 | 134 |
| 9 | 1号竪穴住居跡細部(2) | 127 | 23 | 4号掘立柱建物跡細部 | 134 |
| 10 | 1号竪穴住居跡細部(3) | 127 | 24 | 4・5号掘立柱建物跡検出 | 135 |
| 11 | 2号竪穴住居跡全景 | 128 | 25 | 5号掘立柱建物跡全景 | 135 |
| 12 | 2号竪穴住居跡細部(1) | 128 | 26 | 6号掘立柱建物跡全景 | 136 |
| 13 | 2号竪穴住居跡細部(2) | 129 | 27 | 6号掘立柱建物跡全景 | 136 |
| 14 | 1号掘立柱建物跡全景 | 130 | 28 | 1・2号土坑 | 137 |
| 15 | 1号掘立柱建物跡細部 | 130 | 29 | 4・5号土坑 | 137 |
| 16 | 2号掘立柱建物跡検出 | 131 | 30 | 1・2号竪穴住居跡出土遺物(1) | 138 |
| 17 | 2・3号掘立柱建物跡全景 | 131 | 31 | 1・2号竪穴住居跡出土遺物(2) | 138 |
| 18 | 2号掘立柱建物跡細部(1) | 132 | 32 | 土坑出土遺物(1) | 139 |
| 19 | 2号掘立柱建物跡細部(2) | 132 | 33 | 土坑出土遺物(2) | 140 |
| 20 | 3号掘立柱建物跡全景 | 133 | 34 | 遺構外出土遺物 | 140 |

第3編 南狼沢B遺跡

[挿図]

| | | | | | |
|-----------|-----------|----|------------|---------------|----|
| 図1 | 調査区位置図 | 60 | 図10 | 1～4号土坑 | 77 |
| 図2 | 遺構配置図 | 64 | 図11 | 5・6号土坑 | 78 |
| 図3 | 基本土層図 | 65 | 図12 | 7・8・10号土坑 | 83 |
| 図4 | 1号住居跡 | 67 | 図13 | 9・11・12・16号土坑 | 84 |
| 図5 | 1号住居跡炉 | 68 | 図14 | 13・14号土坑 | 85 |
| 図6 | 1号住居跡出土遺物 | 69 | 図15 | 15号土坑 | 86 |
| 図7 | 1・2号木炭窯跡 | 71 | 図16 | 土坑出土遺物 | 87 |
| 図8 | 1号木炭窯跡 | 72 | 図17 | 1号採掘坑、1号焼土遺構 | 90 |
| 図9 | 2号木炭窯跡 | 74 | 図18 | 遺構外出土遺物(1) | 92 |
| | | | 図19 | 遺構外出土遺物(2) | 93 |

[写真図版]

| | | | | | |
|----------|-------------|-----|-----------|--------------|-----|
| 1 | 遺跡の位置 | 143 | 10 | 1号木炭窯跡(2) | 148 |
| 2 | 遺跡遠景(1) | 143 | 11 | 2号木炭窯跡 | 149 |
| 3 | 遺跡遠景(2) | 144 | 12 | 土坑(1) | 150 |
| 4 | 遺跡全景 | 144 | 13 | 土坑(2) | 151 |
| 5 | 北区全景 | 145 | 14 | 土坑(3) | 152 |
| 6 | 基本土層 | 145 | 15 | 1号採掘坑・1号焼土遺構 | 153 |
| 7 | 1号住居跡(1) | 146 | 16 | 出土遺物(1) | 154 |
| 8 | 1号住居跡(2) | 147 | 17 | 出土遺物(2) | 155 |
| 9 | 1号木炭窯跡(1)全景 | 147 | 18 | 出土遺物(3) | 156 |

第4編 自然科学分析

[挿 図]

| | | | |
|------------------------------|-----|----------------------|-----|
| 図1 南狼沢A遺跡から出土した 炭化材の顕微鏡写真 | 102 | 図3 南狼沢B遺跡炭化材の木材組織(2) | 108 |
| 図2 南狼沢B遺跡炭化材の木材組織(1) | 107 | 図4 历年較正年代グラフ(参考) | 112 |

[表]

| | | | |
|-------------------|-----|--|-----|
| 表1 南狼沢A遺跡出土炭化材の樹種 | 101 | 表3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值) | 111 |
| 表2 南狼沢B遺跡樹種同定結果 | 104 | 表4 历年較正年代 | 111 |

序 章

第1節 事業経緯

1. 概 要

常磐自動車道は、埼玉県三郷市の三郷インターチェンジ(以下 I Cと略す)を起点とし、千葉県から茨城県、そして福島県の浜通り地方を通って、宮城県亘理郡亘理町の亘理 I Cを終点とする高速自動車道である。この内、三郷 I C～いわき市のいわき中央 I Cまでは昭和63年3月に供用が開始され、平成11年3月にはいわき中央 I C～いわき四倉 I Cまで、平成14年3月にはいわき四倉 I C～広野 I Cまで、平成16年4月には広野 I C～富岡 I Cまでの供用が開始された。さらに、平成21年9月には、宮城県側の亘理 I C～山元 I Cまでの11.5kmが開通し、残りは富岡 I C～山元 I Cまでの47.0kmの区間となった。しかし、平成23年3月11日に発生した東日本大震災以降、東京電力福島第1原子力発電所関連事故により広野 I C～富岡 I C間は通行止めになっている。ただ、平成24年4月8日には、南相馬 I C～相馬 I C間の14.4kmが開通し、残りは相馬 I C～山元 I Cまでの23.3kmとなった。現在では、浪江 I Cと南相馬 I C間の18kmほどの区間も復旧工事や舗装工事が始まり、相馬 I C～山元 I Cまでの区間も含め、平成26年度中の開通が予定されている。

常磐自動車道の建設に関わる埋蔵文化財については、昭和59年度から発掘調査が実施されている。調査にあたっては、いわき市内の一帯は、福島県教育委員会といわき市教育委員会が調査主体となり、それぞれ財團法人福島県文化センター（現 財團法人福島県文化振興財團）と財團法人いわき市教育文化事業団に委託し発掘調査を実施した。ただ、いわき市四倉 I C以北は、福島県教育

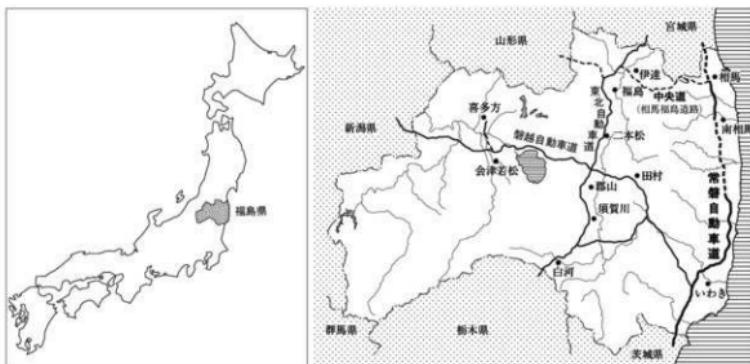


図1 常磐自動車道位置図

委員会が調査主体となり、財団法人福島県文化センター（現 財団法人福島県文化振興財団）に委託し発掘調査を実施した。平成24年までに、複数年度に亘る調査で重複する遺跡を含めると188遺跡（地点）、調査面積804,427m²に及ぶ発掘調査が実施されている。

2. 平成24年度の調査経過

平成24年度の常磐自動車道（浪江～山元）建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部の職員10名、派遣教職員5名の計15名を配置し実施した。年度当初での常磐自動車道工区内の要保存面積は計54,900m²であり、9遺跡の調査が予定された。

前年度より本事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、1日でも早い常磐自動車道の開通が望まれたことから、東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所（以下、相馬工事事務所と略す）と福島県教育庁文化財課、財団法人福島県文化振興事業団（現 財団法人福島県文化振興財団）遺跡調査部との3者協議や、福島県土木部高道路室を交えた打ち合わせが繰り返され、前年度中にできうる限りの先行調査が要求された。具体的には、調査面積の広大さや、調査遺跡の内容から難航が予想される遺跡については、前年度末までに、調査予定箇所全域あるいは優先する工事用道路部分の表土剥ぎを行うこととなった。また、作業員の休憩所や駐車場等のヤードの確保、廃土置き場についても、事前に相馬工事事務所側と現場打ち合わせを行い、双方に支障をきたさない対処方法が模索された。

このような状況の下で、年度明け早々の4月上旬から赤柴遺跡・大清水B遺跡・沢入B遺跡・朴木原遺跡・新田遺跡の計5ヶ所の調査が同時に開始された。各遺跡では工事工程から先行引き渡し箇所があり、特に工事用道路部分については、新地工事区側から仙台工事区側への土砂運搬を7月から開始することから切迫した状況となった。対象となった遺跡は沢入B遺跡と朴木原遺跡・新田遺跡であり、この他、高架橋建築に伴う工事用道路と作業空間確保のために大清水B遺跡の南区や、新地IC予定地内の赤柴遺跡でも引き渡し時期が決定され、これに沿った調査が開始された。

4月下旬には、早くも新田遺跡と朴木原遺跡で工事用道路部分の引き渡し時期が検討され、朴木原遺跡が1ヶ月ほど前倒し、新田遺跡が1ヶ月ほど遅れる状況が予測された。このため、連休明けに現地にて再度先行引き渡し箇所の確認を行うこととなり、併せて沢入B遺跡も先行引き渡し範囲を明示することとなった。また、復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の迅速化に向けた弾力的運用に關し、盛り土工法の場合は調査を行わない方針が県文化財課から提示され、赤柴遺跡の表土剥ぎが中断となり、替わりに赤柴前遺跡の表土剥ぎが4月中旬より開始された。

GW明けの8日には、GW中の降雨により大清水B遺跡北区中央部分の工事用道路が崩壊したため、工事用道路の拡幅が要請された。このため、大清水B遺跡ではこの拡幅部分の調査を5月末までに終了することとなった。また、赤柴遺跡でも、北区南端部で側道工事が行われることとなり、この範囲の調査を5月末までに終了して欲しいとの要請があった。要請を受けた遺跡では、予定通

りの時期の終了に向けて調査が急ピッチで行われた。ただ、大清水B遺跡ではこの範囲から木炭窯の作業場が確認されたため、調査は困難を極めた。5月中旬には、作業員の駐車場を確保できない沢入B遺跡や新田遺跡では、作業員のバス送迎が開始された。

5月末には、先行して引き渡しをする箇所での調査が終了する見込みとなり、新田遺跡の南区(1,000m²)や沢入B遺跡の南区東側(970m²)、大清水B遺跡北区西側(500m²)や赤柴遺跡の北区南端部(1,200m²)などのほか、朴木原遺跡では全域(2,800m²)の調査が終了することとなった。

また、復興関連調査の基準適用について、相馬工事事務所側より赤柴遺跡が提示され、文化財側から掘削範囲と盛土範囲の境界については、10m以内の許容範囲を設けることが提案された。

この他、各遺跡の今後の調査終了時期が示され、赤柴遺跡では北区東側の工事用道路部分が6月末、同西側が7月上旬、南区が6月上旬となり、大清水B遺跡では南区全域を8月末まで、新田遺跡では中央区東側部分が6月上旬の終了を目処とすることとなった。

6月上旬には、赤柴前遺跡では新たに調整池掘削範囲6,600m²が追加された。この他、作業の進捗を促すため、作業員の募集範囲を相馬市域にまで広げ、作業員の増員を行った。新田遺跡では6月8日に南区(1,000m²)の引き渡しが行われ、朴木原遺跡も同日に引き渡しを行った。これを受け、土砂運搬用の工事用道路の造成が行われ、当初の計画通り7月2日より土砂運搬が開始されることとなった。

また、新田遺跡の北区西側では大型住居跡が数棟確認され、縄文時代前期前葉の土偶も出土したため、現地説明会の開催が計画された。沢入B遺跡では、北区で木炭窯、南区で製鉄炉の調査が行われ、大清水B遺跡でも南区から木炭窯が検出され、調査に追われた。さらに、鈴山遺跡や南狼沢A遺跡、南狼沢遺跡でも表土剥ぎが開始された。

7月に入ると、赤柴前遺跡では調整池範囲の北側部分の調査が先行され、赤柴遺跡では掘削を伴う工事用道路と排水路部分の調査に追われた。沢入B遺跡では北区の木炭窯の調査が終盤を迎える、南区の製鉄炉に調査主体を移行した。7月中旬には赤柴遺跡の調査がほぼ終了し、南狼沢遺跡の表土剥ぎが終了した。7月下旬には作業員を新田遺跡から南狼沢A遺跡に移動させ、南狼沢A遺跡の本格的調査を開始した。

また、工事工程の前倒しにより、作業員の駐車場兼バス発着場として使用していた鈴山遺跡南側範囲が急遽使用不可となり、赤柴前遺跡の東側へ移転することとなった。8月3日に行われた現地打ち合わせの結果、現在使用している作業員駐車場は9月末をもって使用不可となるため、新たに赤柴前遺跡東側に移設することとなった。これを受け、バスルートの変更が余儀なくされた。

各遺跡の終了時期については、調査の進捗状況からほぼ達成可能な見通しとなり、沢入B遺跡や南狼沢遺跡では終了時期の前倒しも可能であり、南狼沢B遺跡では要保存範囲全域での表土剥ぎも可能との判断がついた。なお、8月1日には赤柴遺跡(2,200m²)の引き渡しを行い、赤柴遺跡の全調査が終了したほか、赤柴前遺跡の調整池北側の600m²の引き渡しを行った。

益明けの8月下旬には、沢入B遺跡や大清水B遺跡南区の調査がほぼ終了し、鈴山遺跡北区や南

序 章

狼沢遺跡、赤柴前遺跡でも9月中には調査が終了する見込みとなった。さらに、新田遺跡では西側の調査が終了したため、土砂運搬用の工事用道路の付け替え作業が9月中旬に実施されることとなった。なお、8月26日(日)には、午後1時30分から新田遺跡の現地説明会が開催され、総計130名の参加者を得た。

9月に入ると、調査区全域の表土剥ぎを行った南狼沢B遺跡では、年度内の調査終了の目処が付き、調査面積が6,200m²から9,400m²となった。このため、今年度の常磐自動車道の総調査面積は計58,100m²となった。9月6日に調査区西側を引き渡した新田遺跡では、19日より東側調査区の表土剥ぎを開始し、11月中旬には調査を終了することとなった。大清水B遺跡では、同日に南区2,500m²を引き渡したほか、北区南端部斜面の300m²ほどの範囲も9月中には調査が終了することとなった。

9月中旬には赤柴前遺跡の調整池南側部分(4,200m²)や南狼沢遺跡の調査が終了し、9月末には南狼沢A遺跡でも調査が終了することとなったため、作業員を南狼沢B遺跡や大清水B遺跡に移動させた。この他、北区と中区が調査中であった鈴山遺跡では、北区から中近世の製鉄炉1基が確認されたものの、9月中に調査が終了する運びとなった。

10月3日には南狼沢遺跡(2,300m²)・南狼沢A遺跡(3,200m²)・大清水B遺跡(300m²)の引き渡しを行ったほか、同18日には鈴山遺跡の北区・中区の3,400m²の引き渡しが行われた。この時点で調査終了した範囲は38,800m²で、残りは19,300m²となった。残る調査は、鈴山遺跡の南区2,800m²と、南狼沢B遺跡9,400m²、大清水B遺跡4,600m²、新田遺跡2,500m²であった。このうち、新田遺跡の終了時期が11月上旬、大清水B遺跡北区西側が同下旬との予測は立ったものの、残りの遺跡ではその目処が立たなかった。特に、大清水B遺跡では、製鉄炉や木炭窯、粘土採掘坑が複雑に重複しているため、調査が長引くことが予測され、南狼沢B遺跡でも木炭窯や、旧石器時代の資料が出土したため、調査が難航することが推測された。鈴山遺跡では廐溝場から大量の鉄滓が出土し、この処理に連日追われた。

それでも11月には新田遺跡東側部分(2,500m²)と大清水B遺跡北区西側(1,700m²)の調査終了の目処が立ち、11月末には引き渡しが可能となった。残りは鈴山遺跡南区2,800m²と、大清水B遺跡の北区東側2,900m²、南狼沢B遺跡9,400m²となった。新田遺跡の引き渡しは11月28日であり、これをもって新田遺跡の調査がすべて終了した。

残った遺跡では、大清水B遺跡で製鉄炉と木炭窯がそれぞれ2基以上あり、さらに複数基の粘土採掘坑が重複しているため、調査は難航が予測された。また、鈴山遺跡でも縄文時代の住居跡や遺物包含層が確認され、南狼沢B遺跡でも縄文時代中期の住居跡が確認されたりした。

12月上旬には鈴山遺跡南区の調査がほぼ終了し、南狼沢B遺跡でも木炭窯の調査が終了し、調査の主体を南側の遺物包含層に移行した。年内の調査は12月20日までとし、年末の27日には調査が終了した鈴山遺跡の引き渡し(2,050m²)を行った。鈴山遺跡の調査はこれをもって終了したが、出土した鉄滓類の水洗・分類作業を年明けも継続して行うこととなった。この他、次年度調査予定

箇所の南狼沢A遺跡の南側範囲が、年明けの2月ごろには試掘調査可能となることが判明したため、1月下旬までにその調査の可否及び調査工程について検討することとなった。

また、平成21年に工区境界で調査した鴻ノ巣遺跡の1号木炭窯跡の東側斜面部分が東日本大震災の影響で崩落したため、遺存している木炭窯の簡易測量を実施することになった。遺構の遺存箇所が急崖であり、2次崩落の危険性があることから、トータルステーションを用いての記録作成のみとし、年明けに実施することとなった。

年が明けた1月は、8日から作業を開始した。南狼沢B遺跡では南側の斜面から落し穴が複数基確認され、大清水B遺跡では、木炭窯と崩落させた木炭窯の焼成室を利用した粘土探掘坑が重複し、さらにこの崖地に製鉄操業の廃棄物を投棄した状況が確認された。

1月下旬には今年度の調査の収束が具体的に検討され、南狼沢B遺跡が2月中旬、鈴山遺跡での鉄滓分類作業が2月下旬、大清水B遺跡が2月末までとなった。また、次年度予定の南狼沢A遺跡については、1月30日に現地打ち合わせを行い、2月12日から試掘調査を開始した。試掘調査の結果、要保存範囲は3,100m²で、先行して次年度調査箇所1,900m²の表土剥ぎを行うこととなった。

1月後半から2月上旬までは、浜通り地方といえども降雪・積雪により現場作業は遅々として進展しなかったが、2月15日をもって南狼沢B遺跡の調査が終了し、同20日には鈴山遺跡での鉄滓分類作業も終了した。このため、2月26日、南狼沢B遺跡(9,400m²)の引き渡しを行い、併せて鈴山遺跡の鉄滓作業も終了した。そして、最後に残った大清水B遺跡の調査も、2月28日ですべての作業が終了した。また、南狼沢A遺跡の先行表土剥ぎ作業も2月26日に終了した。大清水B遺跡の引き渡しは3月7日に実施し、今年度の常磐自動車道に係るすべての現場作業を終了した。

最終的な平成24年度の常磐自動車道(相馬工区)遺跡発掘調査事業は、調査遺跡数10遺跡、総調査面積58,100m²、次年度の先行表土剥ぎ面積は1,900m²であった。

この他、調査が終了した遺跡から、報告書作成に向けた基礎作業を開始し、遺物の水洗作業やネーミング作業のほか、撮影写真の整理作業などを行った。

(吉 田)

表1 平成24年度の調査遺跡一覧

| 遺跡名 | 調査区分 | 調査面積 | 調査期間 | 遺 墓 | 遺 物 | 調査報告書 |
|--------|------|------------------------|--------------|----------------------|-------------------------|-----------------|
| 新田遺跡 | 発掘 | 9,000m ² | 4月9日～11月16日 | 墳穴住居跡・土坑・掘立柱建物跡 | 縄文土器・石器 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 朴木塙遺跡 | 発掘 | 2,800m ² | 4月9日～6月1日 | 墳穴住居跡・土坑 | 縄文土器・石器 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 沢入B遺跡 | 発掘 | 3,900m ² | 4月9日～8月24日 | 製鉄跡跡・木炭窯跡・土坑 | 縄文土器・土器類・鉄滓・通風管 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 大清水B遺跡 | 発掘 | 8,100m ² | 4月4日～2月26日 | 墳穴住居跡・製鉄跡跡・木炭窯跡・土坑 | 縄文土器・土器類・鉄製品・鉄滓・計11件 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 南狼沢A遺跡 | 試掘 | 1次 3,900m ² | 4月16日～4月24日 | 墳穴住居跡・土坑 | 土器器 | 「県内遺跡分布調査報告書」 |
| | | 2次 1,200m ² | 2月12日～2月15日 | 土坑 | 縄文土器・土器類 | 「県内遺跡分布調査報告書」 |
| 南狼沢A遺跡 | 発掘 | 1次 3,200m ² | 6月11日～10月3日 | 墳穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑 | 縄文土器・土器類・埴造器・鉄製品 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| | | 2次 3,100m ² | 2月18日～2月26日 | 土器施設 | | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 南狼沢B遺跡 | 発掘 | 9,400m ² | 8月20日～2月15日 | 墳穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・木炭窯跡 | 旧石器・縄文土器・石器・土器器 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 南狼沢B遺跡 | 発掘 | 2,300m ² | 7月5日～10月3日 | 土坑 | 縄文土器 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 鈴山遺跡 | 発掘 | 6,200m ² | 6月4日～2月26日 | 墳穴住居跡・製鉄跡跡・土坑 | 縄文土器・土器類・鉄製品・古銭・鉄滓・計11件 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 赤堀川遺跡 | 試掘 | 900m ² | 4月17日 | なし | なし | 「県内遺跡分布調査報告書」 |
| | | 4,100m ² | 4月11日～2月26日 | 土坑・溝跡 | 旧石器・縄文土器 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 赤堀川遺跡 | 試掘 | 12,700m ² | 5月7日～6月13日 | 土坑 | 石器・土器類 | 「県内遺跡分布調査報告書」 |
| | | 3,100m ² | 10月29日～11月1日 | なし | なし | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 川遺跡 | 発掘 | 9,100m ² | 4月4日～9月14日 | 土坑・溝跡 | 縄文土器 | 「常磐自働半道遺跡調査報告書」 |
| 川遺跡 | 試掘 | 300m ² | 11月2日 | なし | なし | 「県内遺跡分布調査報告書」 |

第2節 遺跡の環境と周辺の遺跡

1. 地理的環境

位置 東北地方の南部に位置する福島県は、地形・気候・交通・歴史などの面から、3地域に分けられる。阿武隈高地や奥羽山脈、越後山脈に隔てられた会津地方、中通り地方、浜通り地方である。本書に掲載した3遺跡は、浜通り地方北端部の相馬郡新地町に所在する。

新地町はおよそ東西7.2km、南北6.5kmの台形状を呈している。総面積は46.35km²であり、福島県総面積の0.3%にあたる。北は宮城県亘理郡山元町、西は宮城県伊具郡丸森町、南は相馬市に接し、東は太平洋に面する。本書に所収する3遺跡は、町中央部に東西に長く伸びる谷地小屋地区に位置している。南狼沢は谷地小屋地区の中でも、西部に位置している。

気候 新地町は、太平洋沿岸特有の海洋性の気候である。夏季は海からの風で気温があまり上がりず、梅雨の時期に寒流の影響を受けた「やませ」と呼ばれる季節風が吹き込むと、より日照時間は減り、低温となる。冬季は福島県においては比較的温暖である。降水量は梅雨と秋をピークとし、冬季の降雪は少ない。

地形 福島県の浜通り地方北部は、阿武隈高地東麓から東に向かって標高が次第に低下し、太平洋沿岸部に至って、細長い帯状の低平地が広がる地形である。新地町もこの例外ではなく、阿武隈高地東縁には、鹿狼山(429m)・五社壇(383m)・地蔵森(348m)などが南北に連なり。双葉断層を境に東には、標高30~100mの丘陵地が海岸に向かって伸びている。丘陵の周囲には河成段丘が形成され、山麓部において中位段丘が発達している。特に町域中・南部においては、中位段丘が東に長く伸びるようすが確認できる。これらの丘陵・段丘の間には、西方の山地を水源とする三滝川、砂子田川、立田川などの河川が流れ、河川沿いに低位段丘および沖積平野が海岸から入り込んでいる。これらの河川の支流にあたる小河川や沢による開析も著しく、深く細長い谷が、各丘陵および段丘に刻み込まれている。また、海浜部には浜堤が認められる。

谷地小屋地区は、町域中部の谷地田川、砂子田川沿いの河成段丘上に広がる区域であり、東方は海浜部まで至り、砂子田川沿いには自然堤防も認められる。西方には山地から山麓丘陵が伸びてきている。西方の丘陵および段丘は、山林・果樹等の畑地の間に宅地が点在し、東方の段丘・自然堤防上には市街地、低地部には水田が広がる。南狼沢・南狼沢B遺跡は西部の丘陵地、南狼沢A遺跡は第3段丘面と呼ばれる幅広の中位段丘面西部に立地する遺跡である。南狼沢・南狼沢B遺跡は山林、南狼沢A遺跡は山林・果樹畑・宅地として利用されている。各遺跡は南北に隣接するが、細く深い谷によって、地形的に区切られている。

地質 浜通り地域は、双葉断層を境にして2つに区分される。双葉断層西側の阿武隈高地地域は、中新世以前の花崗岩類をはじめとする深成岩、変成岩、火山堆積物、固結堆積物が広く分布し、



図2 表層地質図

その東には先新第三紀の層が不整合に覆う。新地町西方の鹿狼山、五社壇、地蔵森などの山地は、鹿狼山層と呼ばれる先ジュラ紀と想定される堆積岩によって形成され、この上部を新生代の地層が覆っている。新生代の地層は新第三紀における下部層として初野層(赤柴層)があり、鮮新世の久保間層とその上位の山下層が覆っている。初野層は山地を構成する鹿狼山層と不整合または断層で接している。久保間層は初野層と不整合に接し、山下層は久保間層と整合している。

南狼沢・南狼沢B遺跡がある丘陵地は、鮮新世の未固結の砂岩、シルト岩からなる山下層を基盤としている。南狼沢A遺跡は中位段丘に比定される砂・泥を基盤としている。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

新地町には、現在159か所の遺跡が登録されている。これらは、学術調査のみならず、相馬地域総合開発、国道113号バイパス、国道6号相馬バイパス、県営かんがい排水事業や常磐自動車道など各種の開発事業に伴って、遺跡数・調査数とともに増加してきたものである。また、東日本大震災による高台移転や防潮堤建設などにより開発が進み、今後も増加する可能性がある。

当地域の最も古い遺跡は、三貴地貝塚(28)の周辺部にあたる三貴地遺跡原口地区から出土した旧石器である。10,000点を超す石器集中部が検出され、各種のナイフ形石器、神山型彫器を含む石器群が出土している。石器群の石材には流紋岩が多用されている。石器の形態および単設打面の石刃技法が多用されていることから、後期旧石器時代後半期に位置づけられている。また、赤柴遺跡(20)において有縁尖頭器を伴う疊群が調査されている。

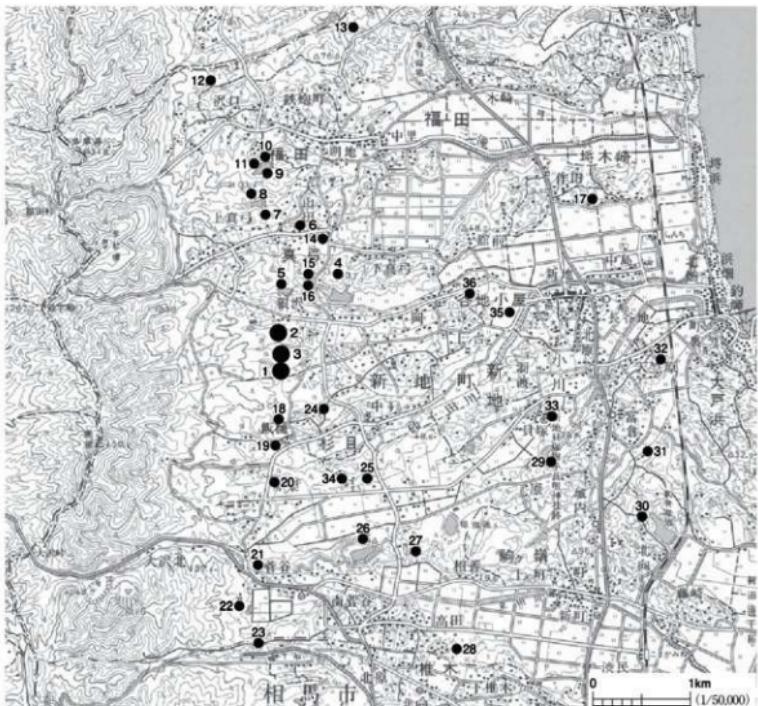


図3 新地町の主要遺跡位置図

縄文時代の遺跡としては、縄文後・晩期の新地貝塚(33)、三貫地貝塚(28)が代表的な遺跡として挙げられる。新地貝塚は、江戸時代の文献にも紹介され、内容的にも貴重な遺物を包含した日本を代表する貝塚の一つである。同貝塚内に所在する巨人伝説に関連した手長明神社とともに国史跡に指定され今日に至っている。三貫地貝塚はこれまで100体以上の人骨が発掘され、東日本では最多の人骨出土例となっている。縄文時代の早・前期の遺跡は、西部の丘陵地および東部の丘陵上においてよく見つかっており、西部では新田遺跡(12)や鈴山遺跡(18)など本事業による調査、東部では洞山G遺跡(31)や山中B遺跡などで調査が行われている。

弥生時代の遺跡は、中・東部に位置する、海岸からの低地上に張り出した丘陵上に、集落跡、土器植墓などが認められる。武井地区の向田E、武井D遺跡で中期の住居跡、隣接する向田G、武井D遺跡で土器植墓が見つかっている。古墳時代では、前時代と同様、中・東部の丘陵地に古墳、横穴墓が良く認められている。また、低地および段丘上に、砂子田遺跡(35)や原遺跡(36)のような集落跡が検出されている。

表2 周辺遺跡一覧

| 番号 | 遺跡名 | 遺跡番号 | 種別 | 時代 | 参考・文献 | 番号 | 遺跡名 | 遺跡番号 | 種別 | 時代 | 参考・文献 |
|----|-----------|----------|--------|-----------|-------|----|---------------|----------|-------|------------|----------|
| 1 | 南須賀遺跡 | 56100116 | 集落 | 縄文時代 | 本書第1編 | 19 | 大 須 賀 遺 跡 | 56100118 | 集落 | 縄文時代 | 常磐道67 |
| 2 | 南須賀A遺跡 | 56100154 | 集落・製鉄 | 平安時代 | 本書第2編 | 20 | 赤 垂 遺 跡 | 56100123 | 集落 | 石器・平安時代 | 常磐道68 |
| 3 | 南須賀B遺跡 | 56100159 | 集落・製鉄 | 前古器・縄文・平安 | 本書第3編 | 21 | 湯 ノ 岩 遺 跡 | 56100155 | 集落・製鉄 | 縄文・平安時代 | 常磐道66 |
| 4 | 青の沢二遺跡 | 56100161 | 製鉄 | 平安時代 | | 22 | 白 子 下 A 遺 跡 | 56100098 | 製鉄 | 平安時代 | |
| 5 | 大清水B遺跡 | 56100152 | 製鉄 | 平安時代 | 常磐道71 | 23 | 白 子 下 C 遺 跡 | 56100100 | 集落 | 平安時代 | 常磐道66 |
| 6 | 別 所 遺 跡 | 56100096 | 集落 | 平安時代 | 相馬第二目 | 24 | 五 郎 四 郎 B 遺 跡 | 56100093 | 製鉄 | 平安時代 | |
| 7 | 沢 入 遺 跡 | 56100085 | 製鉄 | 平安時代 | | 25 | 日 向 遺 跡 | 56100211 | 製鉄 | 平安時代 | |
| 8 | 沢 入 B 遺 跡 | 56100160 | 製鉄 | 平安時代 | 常磐道71 | 26 | 鹿 猪 B 遺 跡 | 56100125 | 製鉄 | 平安時代 | |
| 9 | 小山田遺跡 | 56100084 | 製鉄 | 平安時代 | | 27 | 大 作 遺 跡 | 56100108 | 製鉄 | 平安時代 | |
| 10 | 山居 A 遺 跡 | 56100082 | 製鉄 | 平安時代 | | 28 | 三 西 地 且 稲 | 56100071 | 且坂・集落 | 縄文時代 | 指定史跡 新地町 |
| 11 | 山居 B 遺 跡 | 56100083 | 製鉄 | 平安時代 | | 29 | 原 製 鉄 遺 跡 | 56100011 | 集落・製鉄 | 平安時代 | 新地町 |
| 12 | 新 田 遺 跡 | 56100002 | 集落 | 鎌倉時代 | 常磐道70 | 30 | 武井地(西)製鉄遺跡群 | — | 製鉄 | 平安時代 | 相馬開発Ⅰ・Ⅱ |
| 13 | 北原製鉄遺跡 | 56100157 | 製鉄 | 平安時代 | | 31 | 洞 山 G 遺 跡 | 56100144 | 製鉄 | 平安時代 | 相馬開発Ⅰ |
| 14 | 木 拝 遺 跡 | 56100087 | 散布地・製鉄 | 古墳・平安時代 | | 32 | 底 沢 遺 跡 | 56100132 | 製鉄 | 平安時代 | |
| 15 | 川原 A 遺 跡 | 56100088 | 製鉄 | 平安時代 | | 33 | 新 地 且 稲 | 56100026 | 且坂・集落 | 縄文時代 | 指定史跡 新地町 |
| 16 | 川原 B 遺 跡 | 65500089 | 製鉄 | 平安時代 | | 34 | 御 藤 遺 跡 | 56100122 | 製鉄 | 平安時代 | |
| 17 | 作 田 B 遺 跡 | 56100105 | 製鉄 | 平安時代 | | 35 | 神 手 田 遺 跡 | 56100111 | 集落 | 古墳・奈良・平安時代 | |
| 18 | 嶺 山 遺 跡 | 56100117 | 集落・製鉄 | 縄文・云母 | 常磐道71 | 36 | 原 遺 跡 | 56100397 | 集落 | 古墳・奈良・平安時代 | |

備考・文献
常磐道71 ●「青野白井田遺跡調査報告書」(財)福島県文化振興事業団
相馬第一目 ●「相馬からい頃は季業 相馬第一地区遺跡発掘調査報告書」(財)福島県教育委員会 (財)福島県文化振興事業団
相馬開発Ⅰ ●「相馬開発Ⅰ地区遺跡調査報告書」(財)福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
新地町 ●「相馬開発Ⅱ地区遺跡調査報告書」(財)福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
新地町 ●「相馬開発Ⅲ地区遺跡調査報告書」(財)福島県教育委員会 (財)福島県文化センター

飛鳥・奈良・平安時代は、浮田国造の支配下、大化の改新以降は宇多(太)郡に属していたと考えられている。武井地区製鉄遺跡群(30)は、福島県における古代製鉄遺跡調査の礪矢となった遺跡群である。7世紀後半から9世紀前半を中心とする遺跡群であり、製鉄炉、鍛冶炉、鑄造構造、木炭窯、木炭焼成土坑等の数多くの遺構が確認され、製錬から精鍊、鑄造・鍛造までの鉄生産の様相およびその変遷を窺うことができる。また、同遺跡群内の武井E遺跡では、葬送に関連すると見られる掘立柱建物跡を伴う須恵器短頸壺を骨蔵器とした火葬墓が確認されており、これらの製鉄に有力者層が関わっていたことを強く窺わせている。町内にはこれ以外にも、北原製鉄遺跡(13)、山居A・B遺跡(10・11)、沢入B遺跡(8)、大清水B遺跡(5)、五郎四郎B遺跡(24)、原製鉄遺跡(29)、鹿狼B遺跡(26)、大作遺跡(27)、白子下A遺跡(22)など多数の製鉄遺跡とその周辺の木炭窯跡を有する遺跡が知られており、浜の砂鉄と丘陵からの木炭という地の利を生かした産業が隆盛していたことが分かる。集落遺跡では、砂子田遺跡(35)、原遺跡(36)で集落が9世紀まで継続されている。三貫地遺跡原口地区では7世紀後半に一時的な集落が形成され、一旦断絶した後の8世紀後半より堅穴住居跡と掘立柱建物跡が計画的に配置された集落が確認されている。白子下C遺跡(23)では、9世紀中葉の鍛冶集落が見つかっている。また、別所遺跡(6)では9世紀の集落端部が調査され、綠釉陶器の出土が注目される。

中世には、相馬氏、伊達氏、黒木氏の係争の地となった当地域には、黒木氏による福田古館、相馬氏による新地城跡、駒ヶ嶺城跡などの城館が築かれている。近世に入ると町域はほぼ伊達氏の仙台藩領となり、現在の相馬市・新地町境界に藩境土墨が築かれている。また、谷地小屋要害や駒ヶ嶺城跡など、相馬氏によって中世に築城され、近世に入って仙台藩によって代官が置かれ、戊辰戦争時には仙台藩側の拠点となったような城館跡も残されている。

(佐藤啓・荻野)

第3節 調査の方法

南狼沢遺跡・南狼沢A遺跡・南狼沢B遺跡の調査にあたっては、各遺跡とも木根が多い山林であることから、調査区内の表土や木根はバックホーを用いて除去し、クローラーダンプに積み込み搬出した。さらに調査区が深い開析谷に挟まれた地点であるため、作業用通路や土砂の流出防止など谷部の造成作業も実施した。

表土層より下層の堆積土については、原則的に人力で遺構や遺物の確認面まで掘り下げた。堆積土の層位ごとに遺物の出土状態に留意しながら基盤土まで掘り下げている。なお、南狼沢B遺跡では旧石器時代の石器が出土したことから、基盤土を掘り下げて旧石器時代の確認調査を実施した。

遺構の調査にあたっては、遺構の特性や遺存状態に応じて、土層観察用の畦を設け、遺構の埋没過程や遺物の出土状況を確認しながら精査した。一方、南狼沢B遺跡の木炭窯跡は、遺構確認面からの深さが3mを超していたため、崩落の危険がある基盤土を大きく掘削するなど、充分な安全対策を講じた。なお、堆積土の観察には、『新版標準土色帖(2000年判)』を参考にした。

遺構の図化記録は、調査区内に設置した測量基準点を基に図化した。遺構の位置表示は、計測の基準となる点の座標値をそのまま用いた。遺跡内の標高は近接する三角点から移動し、計測の基準とした。南狼沢B遺跡は調査範囲が広く、広範囲に遺物が出土することから、国土座標を用いた10m方眼のグリッドを設定した。グリッドの原点はX:208,120, Y:92,270である。グリッドの名称はX座標の原点から南に向かって1・2・3…、Y座標の原点から東に向かってA・B・C…とし、それらを組み合わせて表記した。遺構の平面図や断面図については、掘立柱建物跡など大きな遺構の平面図は縮尺1/40、竪穴住居跡や土坑など小さい遺構の平面図は縮尺1/20で記録した。遺物の出土状況など詳細な記録を要するものは縮尺1/10で記録している。その他に遺構の断面図はすべて縮尺1/20で作成した。調査区全体の地形図は縮尺1/200で作成した。報告書に掲載した遺物の図化は、原則的に原寸で実測および採拓した。

写真記録は調査の過程に応じて隨時撮影している。35mm判モノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し、两者同一カットで撮影している。また必要に応じて6×4.5判カメラを用いて撮影した。さらにラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影も実施した。

報告書の作成にあたっては、遺構や遺物の図版は実測図や拓本を高解像のスキャナーで読み取り、トレースソフトを用いて製図している。また遺物の大きさに応じて、土器は1/3~1/2、石器は1/2~2/3の縮尺で掲載した。遺物はデジタルカメラを用いて撮影した。写真図版は編集ソフトを用いて編集している。

発掘調査で得られた各種記録や出土遺物は、財團法人福島県文化振興財团遺跡調査部において整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳類を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館(愛称まほろん)に収蔵・保管する予定である。

(福田)

第1編 南狼沢遺跡

遺跡記号 S T - MO
所在地 相馬郡新地町谷地小屋字南狼沢
時代・種類 繩文時代の集落跡
調査期間 平成24年7月5日～10月3日
調査員 福田秀生・由井文菜

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置

南狼沢遺跡は、相馬郡新地町谷地小屋字南狼沢に所在している。調査区の中心地点は、北緯37度52分6秒、東經140度52分57秒である。南狼沢遺跡は、新地町の西半部を南北に連なる阿武隈高地の東麓に位置する。丘陵地に深い谷が幾重にも入り組み、東に向かって細長く延びる狭い尾根の頂部平坦地に立地する。南狼沢遺跡は南北250m、東西490mの範囲にわたり、その面積は91,200m²である。遺跡の標高は62～86mである。

今回の調査原因となった常磐自動車道は、遺跡の中央部を南北に貫くように建設される。平成23年度に実施した試掘調査によって、遺構と遺物を確認した遺跡の北端部、東に向かって延びる尾根の先端部の2,300m²が保存対象となった。調査区の地形は、中央部に幅の狭い谷が開析して、尾根の先端部が分岐する。調査範囲を南北に隔てる谷を境に、北区と南区と呼称する。北区は丘陵の先端部で、南北の開析谷に面しており、全体的に東に向かって標高を減じる。尾根の幅は最大で42mと狭い。その標高は67.50～73.50mを測る。南区は調査区中央の開析谷に面し、丘陵頂部の平坦面から北向き斜面となる。その標高は69.80～73.50mである。調査区の南側は比較的広い平坦地であるが、試掘調査の結果によれば、近年の耕作等によって削平されて遺構や遺物は確認していない。

南狼沢遺跡に近接する遺跡として、北側の丘陵地に南狼沢B遺跡と南狼沢A遺跡、南側の丘陵地に鈴山遺跡が位置する。南狼沢B遺跡は、南狼沢遺跡と同様に尾根の平坦面に立地する遺跡である。本書第3編に所収した調査成果から、旧石器時代の石器が採集された他に、縄文時代中期末葉の堅穴住居跡が確認された。さらに平安時代と考えられる木炭窯跡、調査区外であるが製鉄遺構群も確認されている。南狼沢A遺跡は南狼沢B遺跡の北側に隣接する遺跡である。標高が低く、段丘上の平坦面に立地する。本書第2編に所収した調査成果によれば、平安時代の堅穴住居跡と掘立柱建物跡を確認した。南狼沢B遺跡の製鉄・製炭遺構群に関する倉庫や管理棟などの機能が推定される。南側の開析谷を隔てた丘陵地には鈴山遺跡が位置する。鈴山遺跡では縄文時代早期末葉の堅穴住居跡や平安時代の製鉄遺構、中世から近世の製鉄遺構が確認されている。縄文時代早期の堅穴住居跡は1軒のみであり小規模集落と推定される。鈴山遺跡の詳細な調査成果については、平成25年度に刊行が予定される『常磐自動車道遺跡調査報告71』に所収する予定である。

近年の常磐自動車道建設などを原因として、福島県浜通り地域でも阿武隈高地に近い場所の発掘調査が増加している。『常磐自動車道遺跡調査報告70』に所収する新田遺跡の調査成果から、丘陵地に形成された縄文時代前期前葉の集落跡の具体的な姿が確認された。南狼沢遺跡の調査では遺構や遺物ともに希薄であったが、調査区西側に縄文時代前期の集落跡がある可能性が高い。新田遺跡と同様に、阿武隈高地東麓の縄文時代集落のあり方を示す遺跡の一つとなるであろう。

第1図 南狼沢遺跡

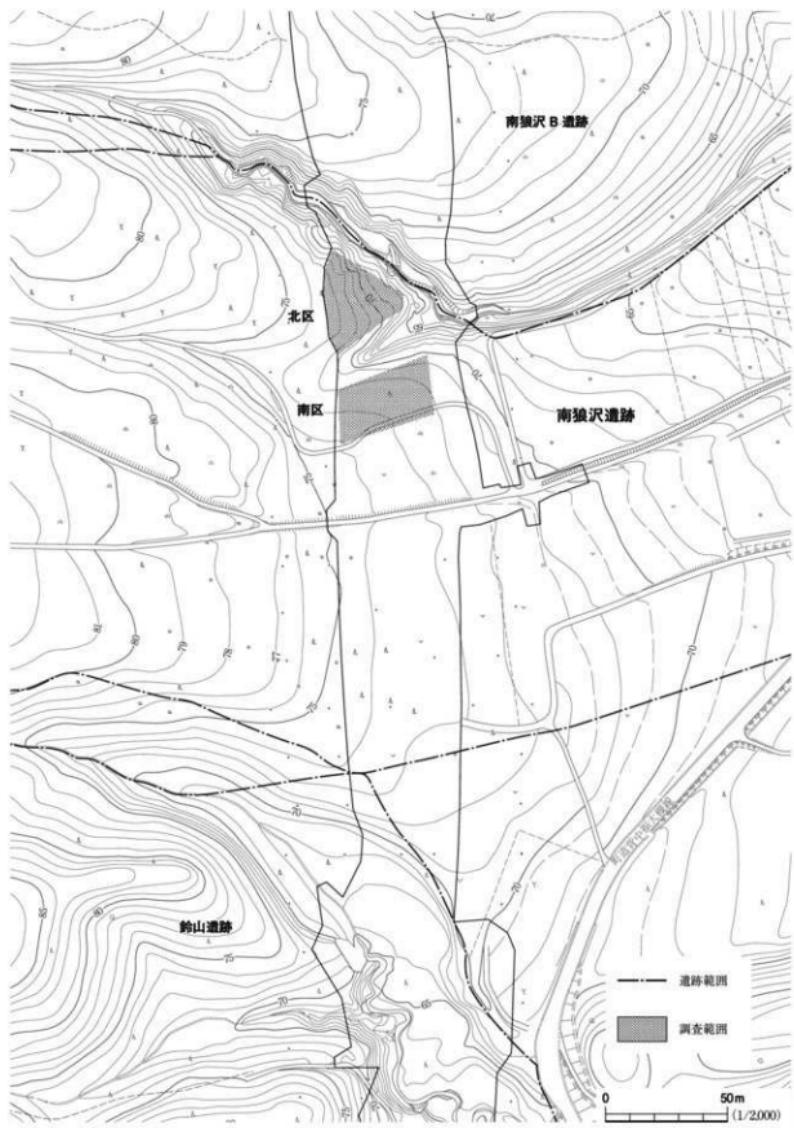


図1 調査区位置図

第2節 調査経過

平成24年度の常磐自動車道に係る遺跡の発掘調査にあたっては、年度当初から福島県教育委員会、東日本高速道路株式会社(ネクスコ)、財団法人福島県文化振興事業団(現福島県文化振興財団)の3者による協議を重ね、工事の優先度が高い遺跡から着手することが取り決められた。南狼沢遺跡については、比較的工事工程に余裕があることから、7月から着手することになった。

南狼沢遺跡の調査に先立って、6月には関係機関との現地協議を設け、南狼沢遺跡の伐木処理と表土除去を7月上旬から着手することを確認した。また発掘調査に関わる表土や排土について、遺跡南側の工事区域内に排出することを取り決めた。さらに南狼沢遺跡の表土除去が終了した後は、引き続き南狼沢B遺跡の伐木処理と表土除去にも着手し、南狼沢遺跡の調査終了後、調査区域を調査連絡所や作業員休憩所、排土置き場にすることも併せて確認した。

福島県文化振興財団遺跡調査部は、現地協議を受けて、6月には発掘調査にかかる諸手続きを進めた。7月5日から調査員1名を配置し、調査区内の伐木と木根の除去を開始した。伐木と木根は放射線等の問題があるため、工事区内に仮置きし、その後の搬出と処理は、ネクスコが対応した。7月8日から表土除去に着手した。試掘調査において遺物包含層が確認されていることから、その範囲を確認しながら表土の除去にすすめ、7月13日までに作業は終了した。その後、お盆前までは南狼沢B遺跡の調査準備として、遺跡北側の谷に排水管を埋設するなど、重機、作業員等の進入路の設置作業を進めた。

8月20日から調査員2名で調査にあたった。作業員10名を投入し、遺構検出や遺物包含層の確認作業を開始した。さらに9月1日からは作業員を25名に増員し、本格的な調査を進めた。南狼沢遺跡には調査連絡所や作業員駐車場などの用地を確保できないことから、小型の器材庫1棟と仮設トイレ1基を設置した。発掘作業員はバス1台を運行させ、鈴山遺跡駐車場から南狼沢遺跡まで送迎した。さらに熱中症が懸念される夏場の作業でもあるため、大型テント1基を設置して調査にあたった。8月下旬から9月上旬は天候に恵まれ、調査が順調に進んだ。遺構や遺物は極めて希薄で、北区で土坑1基を確認しただけである。また、遺物も北区と南区の一部分で確認でき、その出土量も少ないことが判明した。調査区が平坦面が少ない斜面部に立地する。そのため縄文時代の堅穴住居跡や土器捨て場から外れたのであろう。9月後半は、倒木痕の掘り込みなど確認調査に着手したが、遺物の出土量は極めて少なかった。9月20日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。調査区の地形測量図を作成し、9月27日には調査をすべて終了した。

10月3日に関係機関3者で、調査成果と発掘調査の終了を確認した。この時、南狼沢B遺跡の調査にかかる調査連絡所および排土置き場を確保することが必要となるため、直ちに南狼沢遺跡を造成することが決められ、南区を調査連絡所の用地、北区を排土置き場として造成を開始した。調査員と作業員は南狼沢B遺跡に合流し、引き続き発掘調査を進めた。

(福田)

第2章 調査成績

第1節 遺構の分布と基本土層

1. 遺構の分布（図2）

南狼沢遺跡は東西方向に延びる細い尾根上に立地し、その尾根の南北は深い谷が開析する。今回の調査範囲は遺跡の北端部にあたり、中央に位置する小さい開析谷を挟んだ南北に分岐する尾根の先端部である。便宜的に北側の尾根から、北区・南区とした。南狼沢遺跡で確認できた遺構は、土坑1基だけである。遺物は、縄文土器が約30点出土した。縄文土器の年代は、ほとんどが前期前葉頃の所産であるが、わずかに縄文時代早期末葉頃や晚期後半頃の土器片が確認できた。

北区は、東西方向に延びるやや幅広い尾根の東端部で、その標高は67.50m～73.20mである。地形は尾根頂部から東に向かって低く傾斜する。北区からは、明確な遺構を確認することができないが、尾根頂部から斜面部にかけて黒色土が混入する倒木痕が顕著に分布している。また北向き斜面部では、L IIとした黒褐色土から遺物が少量ながら出土した。縄文時代前期頃の土器片が大半を占める。

南区は尾根頂部から北向き斜面にかけての範囲で、北東方向に向かって低く傾斜する地形となる。標高は70.00m～73.20mである。確認できた土坑は、南区の北西端に位置し、南北を画する開析谷に面した斜面部に立地する。土坑からの出土遺物がなく詳細な年代は不明であるが、周囲から出土する縄文土器と土坑内の堆積土の状態から、縄文時代前期頃の所産と考えている。また北区と同様に調査区全域に倒木痕が密に確認できる。南区の出土遺物は、北区に比べて極めて少ない。L IIとした黒褐色土が遺存する西半部から約10点出土した。これに加えて、南東隅の倒木痕から縄文時代晩期後半の土器片が出土している。

今回の調査範囲は尾根の端部であり、平坦部が少なく、急傾斜となる地形であるため、遺構・遺物が極めて希薄であった。一方、調査範囲外となる西側部分は、幅が広い尾根で、比較的傾斜が緩やかな平坦地が認められる。さらに縄文時代早期末葉から前期前葉にかけての遺物が濃密に採取できた。縄文時代の集落跡がこの部分に存在する可能性が高い。今回の調査区は、集落の外縁部にあたり、堅穴住居跡や土器捨て場などが希薄な場所であったのであろう。

2. 基本土層（図3、写真8）

南狼沢遺跡は中央に開析する谷を挟み、南北2箇所の調査区を設定した。北区の現況は山林である。南区は東半部が宅地として利用されていたため、南区は近年の宅地造成による削平や建物撤去時の搅乱などが顕著に確認できた。そのため南北の調査区では、堆積土の基本層序に違いがある。

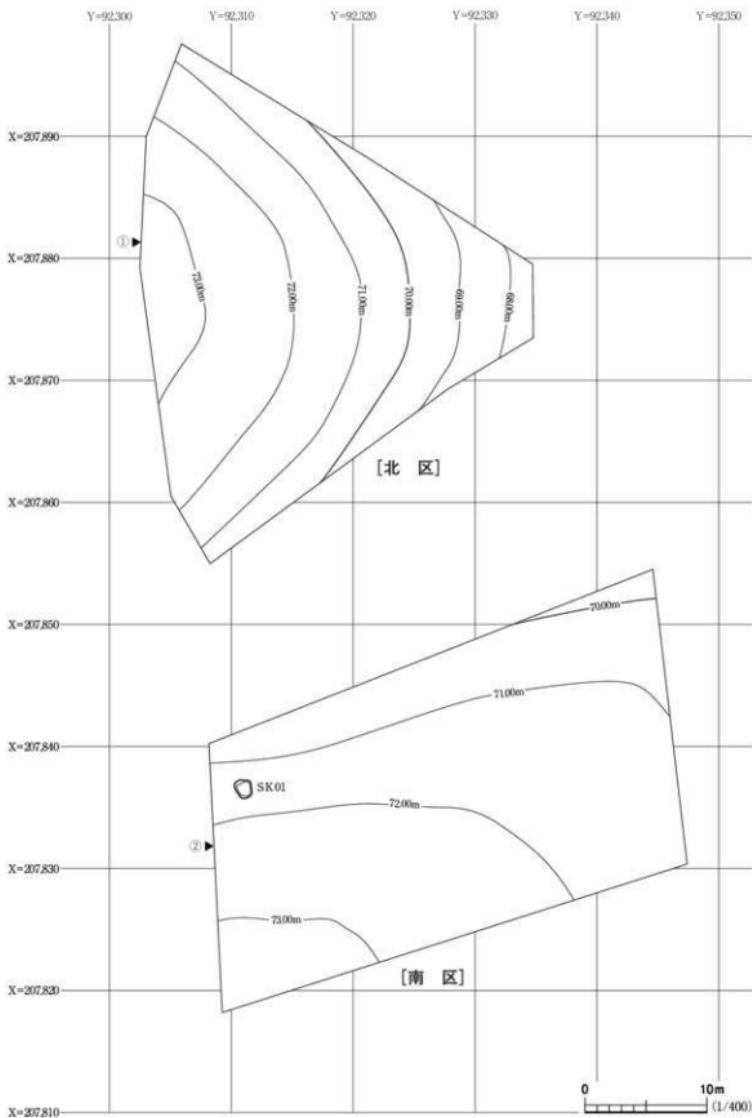


図2 遺構配置図

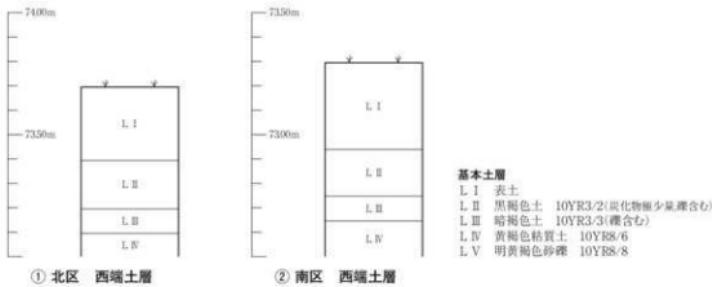


図3 基本土層柱状図

南狼沢遺跡の基本土層は、西側の調査区際で観察し、以下のように区分した。また、基本土層の表記はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせて、L I・L IIとした。

L I：調査区全体を覆う表土層である。層厚は30～40cmである。北区はスギなど針葉樹が植林され、木根とともに下草が繁茂する山林である。南区の西半部が宅地・畑地であり、耕作土や現在までのゴミ・碎石を含む腐植土層である。

L II：黒褐色土である。層中にわずかに炭化物粒を含み、直径5～10cm程の礫を含む。北区の全域と南区の西半部に確認できる。層厚は20cm前後で、斜面下位がやや厚く認められる。また遺物はL IIに含まれる。

L III：直径1～10cmほどの礫を含む暗褐色土である。遺跡の基盤となるL IVへの漸移層で、その分布域はL IIと同じ範囲である。層厚は10cm前後と薄い。L IIIに遺物は混入しない。

L IV：黄褐色粘質土である。遺跡の基盤となる土層である。1号土坑や倒木痕などはL IVの上面で確認できる。風倒木痕の堆積土は、L IIを巻き込んでL IVまで達している。

L V：明黄褐色砂礫層である。南区の北東側斜面は表土直下でL Vが露頭する。丘陵地の形成に関わる2次堆積物である。南狼沢遺跡の南側において、常磐道建設工事における掘削法面を観察すると、約数mに渡って砂礫層と粘土層が互層をなして堆積する状況が確認できる。

第2節 土 坑

今回の調査範囲は、尾根の東端部にあたり、縄文時代の集落域からやや外れた位置であったため、確認できた遺構は1号土坑だけと極めて希薄である。1号土坑の性格や年代は不明であるが、周辺に縄文時代前期前葉頃の土器が出土することから、これらに関連する可能性がある。

1号土坑(図4)

1号土坑は南区の北西側に位置する。北向き斜面の中腹に立地する。標高は71.5m付近である。遺構検出面はLⅣとした黄褐色粘質土の上面である。周囲には倒木痕が多数確認できる。

1号土坑の周囲からは、縄文時代前期前葉頃の遺物がわずかに出土した。

1号土坑の平面形はやや歪んだ隅丸方形である。規模は長軸が1.56m、短軸が1.40mを測る。検出面から底面までの深さは、斜面上位側で0.3m、斜面下位側で0.1mである。周壁は急峻になり、東壁が垂直気味に立ち上がる。底面は凹凸が顕著で、南東側がやや高くなる。底面の標高は71.1mである。

遺構内堆積土は小礫を多量に含む黒褐色土の単層である。堆積土が均質となることから自然堆積と判断した。

1号土坑からは遺物が出土していないため、詳細な年代や性格は不明である。周辺から出土する縄文土器の特徴から、縄文時代前期前葉頃の所産である可能性が高い。

Y=92.310
X=207.838 +
Y=92.312
X=207.838 +

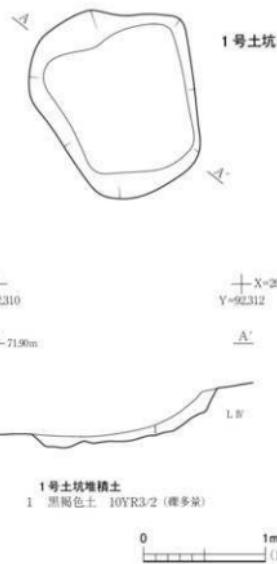


図4 1号土坑

第3節 遺構外出土遺物(図5、写真11・12)

南狼沢遺跡からは縄文土器約30点、石器剝片が2点出土した。遺物は、遺跡の基盤を覆うLⅡとした黒褐色土層から出土した。その出土位置については、北区では、北側から東側にあたる斜面部の裾部付近からである。南区では、比較的削平が少ない西側、北向き斜面の上半部から出土した。

出土遺物のうち、文様等が判別できるものを図5に示した。縄文土器は、縄文時代早期末葉～前期前葉頃のものが多い。その他に、縄文時代晚期後半頃と考えられる土器片も数点出土したが、摩滅した小破片が多い。石器は極めて小さい剝片のため、図示していない。

1は深鉢の体部破片である。器面の摩滅が著しいが、内外面ともに条痕が施されている。胎土中に纖維混和痕が観察できる。文様などの特徴から、縄文時代早期末葉から前期初頭頃の所産と判断した。2は深鉢の口縁部破片である。地文には縄文が施される。口唇部の直下には、彫りの浅い

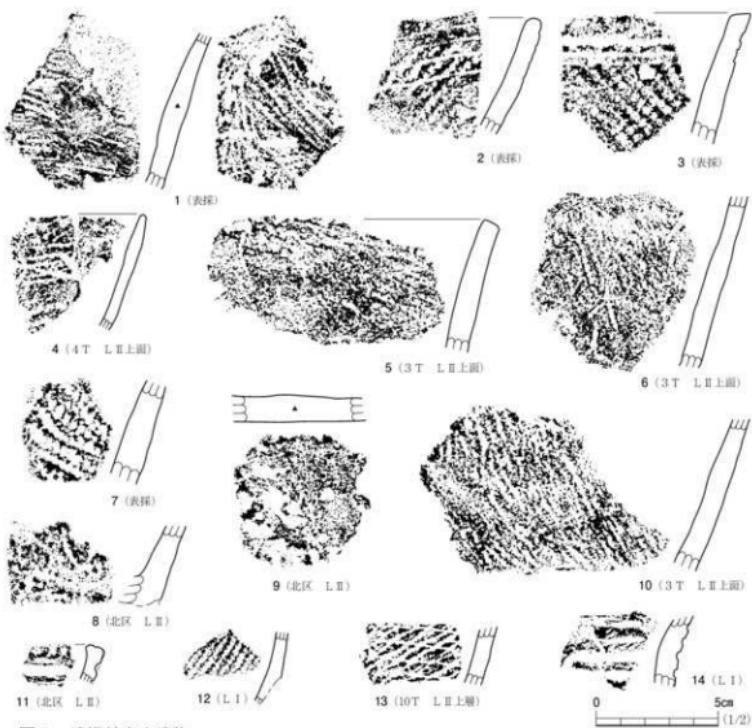


図5 遺構外出土遺物

平行沈線が2段に描かれる。3は深鉢の口縁部破片である。口唇部が面取りされて平坦になる。口唇部の直下には、半裁竹管状施文具を用いた横線が描かれる。4は小型深鉢の口縁部破片である。外面には撲糸文が観察できる。5は深鉢の口縁部破片である。口唇部が面取りされて平坦になる。外面には撲糸文が施される。内面は横向方向の指ナデによって器面が平滑に整えられる。6・7・10は深鉢の体部破片で、地文として撲糸文が施される。8は深鉢の体部下端である。粘土紐の積み上げ時の指頭圧痕が観察できる。9は底部破片である。底部外面には、土器製作時に付着した種子であろうか、長さが5mm、幅が3mmを測る楕円形の圧痕が2~3ヶ所認められる。胎土には繊維混和痕が観察できる。2~10は文様等の特徴から、縄文時代前期前葉頃の所産と判断した。

11は深鉢の口縁部破片である。肥大した口唇部に浅いキザミが施される。口唇部の直下には太い沈線が廻る。13は深鉢の体部破片で、網目状撲糸文が施される。14は深鉢の頸部付近の破片である。外面には地文に縄文を施し、その後に楕円形をなす沈線文を2段に描いている。11~14は、文様などの特徴から縄文時代晩期中葉頃の所産と判断した。

(福田)

第3章 総括

南狼沢遺跡の発掘調査では、土坑1基、縄文土器片約30点を確認しただけである。調査区が尾根の先端部であり、竪穴住居跡などを嘗むには平坦地が狭い地点である。そのため集落を構成する施設が希薄で、土器捨て場などが形成された場所からも外れていたのであろう。一方、調査区の西側の尾根は、比較的幅が広く、その頂部は平坦な地形となる。この場所では縄文時代早期末葉から前期頃の土器が濃密に採集できることから、縄文時代集落跡の主要施設が営まれた場所となる可能性が高いことが指摘できる。本章では、新地町に所在する遺跡のうち、平成24年度に発掘調査を実施した朴木原遺跡・新田遺跡の調査成果(『常磐自動車道遺跡調査報告70』)を中心に、縄文時代前期頃の集落跡のあり方についてまとめる。

新地町に所在する縄文時代の遺跡は、おおよそ60ヶ所である。縄文時代の各時期ともに、山間部から海岸部付近の平野部まで広く点在している。そのうち発掘調査などによって、性格や年代が判明している遺跡を概観する。縄文時代早期から前期に属する遺跡は、平野部や海岸に近い川窪遺跡や師山遺跡などが点在するが、南狼沢遺跡や新田遺跡など阿武隈高地よりの山間部に多く分布する傾向が看取できる。縄文時代中期の遺跡は少なく、山海道遺跡や山中B遺跡など平野部から海岸部にかけて延びる丘陵地に立地する。山間部に位置する大規模遺跡では複式炉を伴う竪穴住居跡が確認されたが、集落の規模は極めて小さい。縄文時代後期から晩期の遺跡は、現在の国道6号線付近の平野部に面した低い丘陵地に多く所在する。国指定史跡として著名な新地貝塚や、県指定史跡の三貫地貝塚などが立地している。山間部に位置する南狼沢B遺跡では、縄文時代中期末葉頃の石開炉を持つ竪穴住居跡が確認されたが、生活痕跡が乏しく集落も小規模と推定される。縄文時代の各期においても、山間部や平野部を問わず分布が確認されているが、その分布の密度を勘案すれば、その中心拠点の場所はそれぞれ異なる様相が認められる。これには先学が指摘するように、居住区域の移動(縄文時代の非定住性)や気候変動(いわゆる縄文海進)なども影響しているのであろう。

近年の常磐自動車道や阿武隈東道路の建設に伴い阿武隈高地の調査例が増加したことによって、縄文時代の山間部における集落の構造や当時の生活スタイルを検討できる類例が蓄積している。南狼沢遺跡と同じく山間部に位置する遺跡の立地について比較する。

朴木原遺跡は、東西方向に延びる細長い丘陵上に位置し、その標高は76.0~81.0mである。遺跡西側の丘陵の中ほどの地点で縄文時代前期前葉の集落、遺跡東側にあたる丘陵の先端部付近で縄文時代後期初頭の集落を確認した。大木1式に比定される縄文時代前期前葉の竪穴住居跡を1軒確認した。竪穴住居跡の平面形は楕円形で、規模は長軸の長さが4.6m、短軸の長さが4.2mを測る。床面の中央付近に地床炉が1ヶ所設けられる。集落の全体像を把握できないが、丘陵平坦面の縁辺部に竪穴住居を配する集落である。なお、縄文時代後期については、表探資料であるため、具体的な

集落のあり方は不明である。

新田遺跡は開析谷を挟んで朴木原遺跡の北側に隣接する。朴木原遺跡と同様に、東西方向に延びる細長い丘陵上に立地する。遺跡の標高は785～890m付近で、朴木原遺跡や南狼沢遺跡とはほぼ同じである。新田遺跡は大木2a～2b式期を中心とした縄文時代前期前葉頃の集落である。遺跡の東側にあたる丘陵の先端部付近の調査を実施した。集落は丘陵頂部の比較的傾斜が緩い平坦面に立地する。堅穴住居跡を8軒、貯蔵穴と墓坑と考えられる土坑を約30基確認した。堅穴住居跡は長方形を基調とする平面形である。長軸の長さが13m、短軸の長さが4mとなる大型堅穴住居跡を含んでいる。大型堅穴住居跡の床面には中軸線上に沿って2～3ヶ所の地床炉が設けられている。集落の構造は、丘陵頂部の平坦面に広場を設け、その広場を取り囲むように丘陵縁辺部に堅穴住居や土坑群を配する。集落の規模は、おおよそ南北50m、東西80mほどの範囲と推定される。さらに堅穴住居跡の下位にあたる北側斜面部には濃密な土器捨て場が形成されている。丘陵の地形と堅穴住居跡の向きを見ると、集落南側から東側では、周囲の等高線と堅穴住居跡の長辺を平行するよう配される。一方、北側は5軒が重複するため同時期ではないが、周囲の等高線と堅穴住居跡の長辺が平行するもの、直行するものが混在している。新田遺跡の事例では広場を中心に、堅穴住居跡や土坑が同心円状に整然とは並ぶ配置は確認できないが、丘陵の縁辺部に堅穴住居跡を配する集落のあり方に共通点が見出すことができる。

相馬市山上地区に所在する荻平遺跡は、現在の海岸線から約10km内陸に位置し、宇多川上流域の山間部に位置する。縄文時代早期末葉～前期中葉頃、晚期後葉頃の集落跡である。縄文時代前期でも花積下層式期の集落は宇多川に面した段丘平坦面に分布する。大木1式～大木3式期は丘陵の頂部付近、大木4式～大木5式期は丘陵頂部からやや下った緩斜面に堅穴住居跡が作られる。また荻平遺跡は各時期ともに堅穴住居跡がまとまって分布する傾向が看取できるが、新田遺跡に見られるような堅穴住居跡が規則的に並ぶような状況は確認できない。これには新田遺跡に比べて、山深く急峻な地形に立地する点や花崗岩が露頭する地質などが影響するのであろうか、阿武隈高地に所在する遺跡でも、集落構造に違いがあることも確認できる。

南狼沢遺跡の調査範囲は、東西方向に延びる丘陵の先端部にあたり、平坦地が狭く、遺構や遺物が極めて希薄な地点である。一方調査区の西側は、丘陵平坦面が広く、縄文時代前期頃の土器片が多量に採集できた。遺跡の立地する地形だけを見れば、上記した通り、朴木原遺跡や新田遺跡と同じ丘陵地であり、その標高も大差ない。新田遺跡の集落構造を評価すれば、南狼沢遺跡の西側部分に縄文時代前期の集落が形成されている可能性が高い。一方荻平遺跡の調査例からも山間部でも集落の構造が異なるものも知られてきた。今後の阿武隈高地に所在する縄文時代前期の集落構造について、調査事例の増加を待ち、改めて検討することとする。

(福田)

第2編 南狼沢A遺跡（1次調査）

遺跡記号 S T - MO · A
所 在 地 相馬郡新地町谷地小屋字南狼沢
時代・種類 繩文時代・平安時代の集落跡
調査期間 平成24年6月11日～10月3日
調査員 福田秀生・五十嵐敏裕

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置

南狼沢A遺跡は、相馬郡新地町谷地小屋字南狼沢に所在している。調査区の中心は、北緯37度52分20秒、東経140度52分56秒である。南狼沢A遺跡は、新地町の西半部を南北に連なる阿武隈高地の東麓に位置する。遺跡は、砂子田川支流の小河川および沢によって南北を区切られた、南東に向かって細長く延びる段丘に立地する。南狼沢B遺跡などが立地する周辺の丘陵に比べて標高が低く、60～72mの平坦面が広がる。遺跡は南北130m、東西280mの範囲で、面積は91,500m²である。遺跡の標高は54～98mである。

今回の発掘調査の原因である常磐自動車道は遺跡の中央部を南北に貫くように建設される。1次調査は、平成24年5月に実施した試掘調査によって遺構と遺物が確認された遺跡の北半部、3,200m²が保存対象となった。1次調査区は段丘平坦面の北半部にあたる。地形は東に向かって低く傾斜するものの、比較的平坦で、その標高は66.0～68.5mを測る。調査区の北半部は宅地と果樹畠であり削平が顕著であるが、南半部は山林で比較的遺跡の遺存状態は良い。

南狼沢A遺跡に接する遺跡として、北側の開析谷を隔てて北狼沢A遺跡、南側の丘陵地には南狼沢B遺跡が位置する。北狼沢A遺跡は平成22年度に1次調査、平成23年度に2次調査が実施され、縄文時代と近世の遺構と遺物が確認されている。南狼沢B遺跡の詳細な調査成果は本書第3編に所収した。旧石器時代の石器が採集された他に、縄文時代中期末葉の堅穴住居跡が確認された。本遺跡に接する北側斜面には平安時代と考えられる木炭窯跡が2基確認されている。南狼沢遺跡の南側の丘陵地には鈴山遺跡が位置する。鈴山遺跡では縄文時代早中期葉の堅穴住居跡や平安時代の製鉄遺構、中世～近世の製鉄遺構が確認されている。縄文時代早期の堅穴住居跡は1軒だけであり、小規模集落と推定される。

南狼沢A遺跡の南半部については、平成25年2月に試掘調査を実施した。1次調査に続く掘立柱建物跡の他に、南狼沢B遺跡に接する沢地において製鉄炉が確認できた(福島県教育委員会2013)。この範囲については、平成25年度に発掘調査が実施される予定である。なお、沢地からは鉄滓や炉壁・木炭の他に、切断痕など加工痕を残す木質遺物が多量に出土している。チョウナ状の工具を用いた加工痕が顕著に観察できる削材が多いことから、木炭窯に供する山林の伐採だけでなく、木材の加工や木製品の生産も行なっている可能性が高い。さらに製鉄炉や掘立柱建物跡などで用いられた木製道具や木簡・墨書き器など文字資料の出土も期待されることから、1次調査で確認された掘立柱建物跡の具体的な性格や機能を把握することだけでなく、鉄や木炭の生産に関わる一連の工程、工人の手配やその動き、原材料の調達から生産物の管理・流通までを復元することも可能であろう。

第2編 南猿沢A遺跡（1次調査）

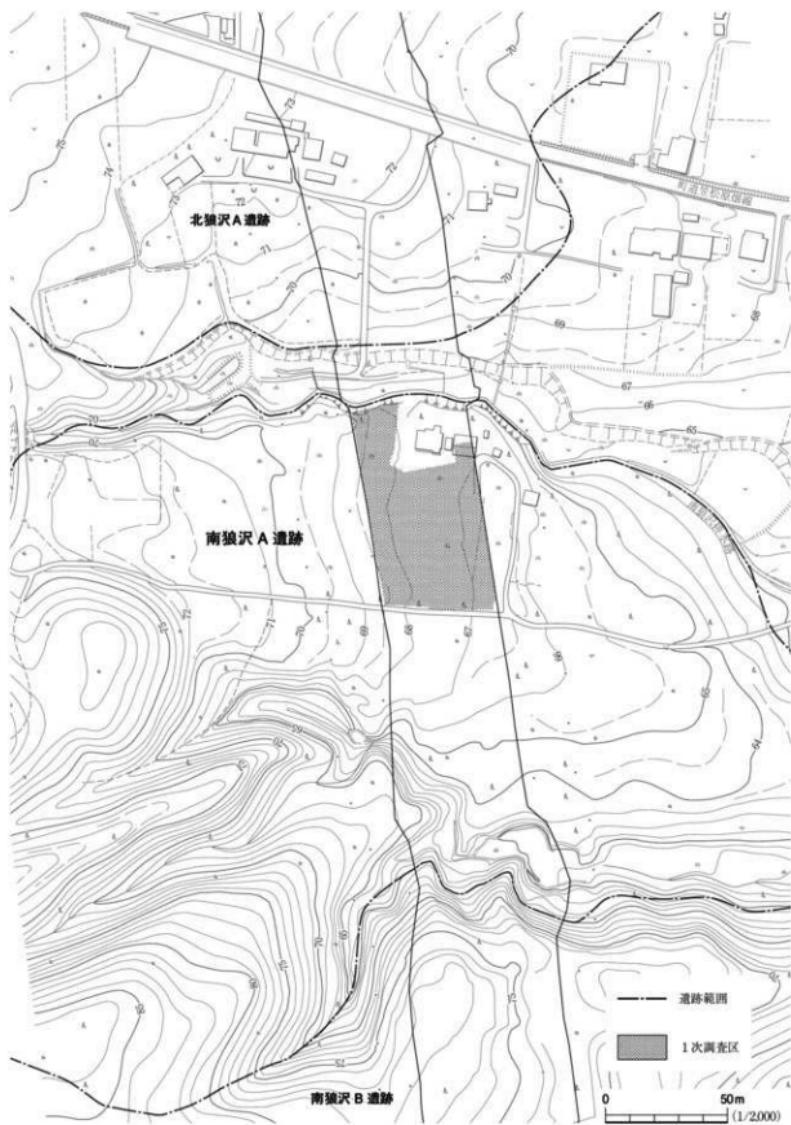


図1 調査区位置図

第2節 調査経過

平成24年度の常磐自動車道に係る遺跡の発掘調査にあたっては、年度当初から福島県教育委員会、東日本高速道路株式会社、福島県文化振興事業団(現・福島県文化振興財団)の3者による協議を重ね、工事の優先度が高い遺跡から調査に着手することが取り決められた。南狼沢A遺跡については、工事の工程や用地買収の諸事情から北半部を先行して試掘調査を実施することが決められた。5月に実施した第1次試掘調査では、平安時代の遺構と遺物が確認され、保存範囲3,200m²が確定した(福島県教育委員会2013)。この調査結果を受け、6月上旬に現地協議を実施し、南狼沢A遺跡の発掘調査対象範囲を現地確認するとともに、6月11日から発掘調査に着手することが取り決められた。

福島県文化振興財団遺跡調査部は、調査員1名を配置し、6月11日から伐木処理と表土除去に着手した。排土は遺跡北側の工事区域内に排出し、調査連絡所や作業員駐車場等の用地を整備した。7月上旬には表土除去、調査連絡所・作業員駐車場の整備が終了した。7月17日からは作業員10名を雇用し、遺構検出作業など本格的な調査に取り掛かった。

8月からは調査員1名と作業員15名を追加し、遺構検出作業などを重点的に実施した。8月中旬は気温や湿度が高い酷暑であった。熱中症などの事故を回避しただけでなく、台風の影響も少なく天候に恵まれ、作業は順調に進んだ。調査の結果、平安時代に属する竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出された。さらに南狼沢A遺跡の掘立柱建物跡について、2号掘立柱建物跡は東西棟の大型建物跡で、3~5号掘立柱建物跡が2間×2間の小型建物であることが分かった。また2号土坑からは、東海地方産の灰釉陶器が出土した。

9月1日からは調査準備が整った南狼沢A遺跡に作業員15名を移動した。竪穴住居跡の精査や遺構の確認調査を実施した。1号竪穴住居跡は削平されて遺存状態は悪いが、カマド脇の貯蔵穴内から炭化した木製品が出土した。この炭化した木製品は薬品を塗布して強化保護して取り上げた。また樹種同定分析も合わせて実施した。9月下旬は雨天続きであったが、天候の回復を待ちラジコンヘリコプターによる空中写真の撮影も実施した。9月末までには調査区の地形測量を作成して現地の作業を終了した。

10月3日に関係機関3者で、1次発掘調査の終了を確認した。この時、南狼沢A遺跡の南半部の試掘調査については、用地買収等が解決する平成25年2月に立木伐採した後に着手することが決められた。さらに平成25年度の調査準備として器材倉庫を駐車場用地内に設置することも確認された。

なお、平成25年2月12~15日に2次試掘調査が実施された。遺跡の南端部の沢地から製鉄炉を検出した。その他に加工痕を残す木質遺物が多量に出土した。南狼沢A遺跡の2次調査として、3,100m²が保存された(福島県教育委員会2013)。続く2月18~26日は2次調査範囲の表土除去に着手し、4月上旬から本格的な発掘調査を開始できるように準備作業を実施した。 (福田)

第2章 調査成績

第1節 遺構の分布と基本土層

1. 遺構の分布（図2、写真5・6）

南狼沢A遺跡は東に向かって延びる段丘上の平坦面に立地する。今回の1次調査は、平坦面の北半分ほどを調査対象とした。調査の結果、平安時代に属する堅穴住居跡を2軒、掘立柱建物跡6棟、土坑4基を確認した。遺物は縄文時代前期と後期に属する土器や石器、古墳時代後期、平安時代前半の土器が出土した。出土遺物の大半は平安時代の土師器や須恵器であり、縄文土器と古墳時代の土器はいずれも数点程度と極めて少量である。

遺構の分布は、調査区の北側と南端部に集中する傾向にあるが、全体的には希薄である。平安時代の掘立柱建物跡は、一部に建て替えの痕跡があるものの、それぞれ重複が少ないとから、その存続期間は比較的短期間と推察できる。

調査区の北半部では、2号堅穴住居跡、1・6号掘立柱建物跡、1・4・5号土坑を確認した。1号土坑は平坦面の北西部に位置し、性格はいわゆる廃棄坑と推察している。1号土坑の西側、調査区外となる場所に掘立柱建物跡が存在する可能性が高い。1号掘立柱建物跡は調査区の西端に分布する。建物の規模は不明であるが、東西棟になる可能性が高い。2号堅穴住居跡は調査区の北東部に位置する。一辺の長さが3.5～4.0mと、小規模な堅穴住居跡である。さらにカマドや貯蔵穴などの施設を持つが、遺物は極めて少ない特徴がある。6号掘立柱建物跡は南北棟の側柱建物跡である。他の掘立柱建物跡とは建物の向きを同じくするものの、離れた位置に分布する。南西側には6号掘立柱建物跡に伴う廃棄坑と考えられる4号土坑が分布する。年代を把握できる遺物が少ないが、建物の向きなどから2号堅穴住居跡とセットで機能していた可能性が高い。5号土坑は6号掘立柱建物跡と重複するが、その前後関係は不明瞭である。性格を特定するだけの所見は得られていないが、墓坑の可能性がある。

調査区の南端部では1号堅穴住居跡、2～5号掘立柱建物跡、2号土坑を確認した。いずれも調査区間に分布することから、これら遺構群は南側に展開する。1号堅穴住居跡は一辺の長さが2.4～3.3mと小規模である。カマドや貯蔵穴を持つものの、遺物が極めて少ないなど、生活痕跡に乏しい特徴がある。また3号掘立柱建物跡と重複し、建物跡に先行して機能していたと推察している。掘立柱建物跡は全体の規模が把握できたものは少ないが、それぞれ建物の向きを揃えるなど、建物の配置に規格性が看取できる。2号掘立柱建物跡は東西4間と最も規模が大きい側柱建物跡である。3～5号掘立柱建物跡は2×2間の側柱建物跡である。これらの建物跡の性格については、本遺跡の南側に位置する南狼沢B遺跡において木炭窯や製鉄炉が検出されていることから、鉄や木

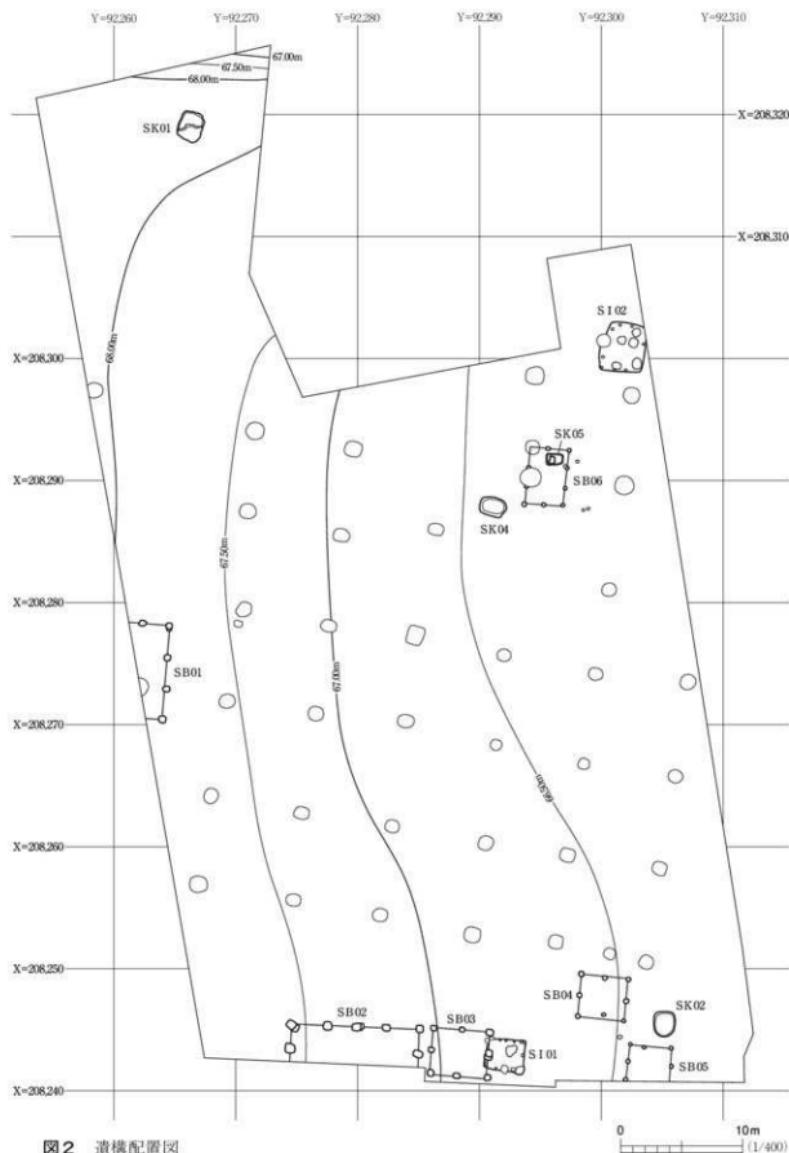


図2 遺構配置図

炭の生産に関連する建物群と推察される。さらに2号土坑は建物跡に伴う廃棄坑であり、出土遺物の中に灰釉陶器が1点確認できた。建物跡の性格を窺う資料となる可能性が高い。

2. 基本土層

南狼沢A遺跡は、南北を谷に隔てられ東に向かって延びる段丘上に立地している。標高は660～680mである。今回の1次調査は、南狼沢A遺跡の北端部にあたり段丘平坦面の北半部に相当する。調査区の現況は、北端部が宅地、その他は果樹畠である。そのため地形の改変が広範囲に及び、削平の規模も大きい。竪穴住居跡や掘立柱建物跡の柱穴が深さ20cm程であることからも、近年の地形改変や削平の規模を窺うことができる。

南狼沢A遺跡の基本土層は、調査区の北東部に位置する2号竪穴住居跡、調査区南端に位置する2号掘立柱建物跡の周辺部で観察し、以下のように区分した。

L I：調査区全体を覆う現表土で、その厚さは30～40cmである。調査区の北東部は宅地であるため、盛土やコンクリートと砂利を多量に含んでいる。調査区の中央部は果樹畠で、現表土と盛土が認められた。図2に示す遺構配置図に見られるとおり、果樹の苗木を植える際に掘った穴が約8m間隔で整然と並ぶ。4号掘立柱建物跡から調査区南端にかけての範囲は、農道に面する雑木林である。この範囲は木根が多く、腐植土と小動物による搅乱で、L Iが厚く堆積する。

L II：L Iの下位に認められ、調査区全体を覆う黒褐色土である。層厚は10～15cmである。2号竪穴住居跡の土層観察では、完全に埋没した住居跡を覆うように堆積する。住居跡の削平後に表土化した比較的新しい堆積物と判断した。調査時には、L IIを残して表土を除去した。遺物の出土状態を確認しながら人力で掘り進めたが、小破片となった土器が少量、果樹畠で搅乱された状態で出土し、平安時代の遺構群に伴うような出土状況は認められない。

L III：褐色砂質土で、直径5cmの小礫を含む。調査区の中央部から北半部にのみ確認でき、L II直下で検出した。L IIIは大きく北側に向かって傾斜するように堆積する。段丘上にある浅い埋没谷の堆積物である。L IIIには遺物は含まれていない。調査区北半部に分布する遺構は、L IIIの上面で確認できる。

L IV：黒褐色粘質土で、L IIIの下位で確認できる。L IIIと同様に、調査区の中央部から北半部にかけての範囲で確認できる。L Vを覆うように北側に向かって傾斜するように堆積するところから、埋没谷の堆積物と判断した。L IVには遺物は含まれていない。

L V：遺跡の基盤土となる黄褐色土である。L III・L IVの下層で確認できる。調査区南端に分布する遺構はL Vの上面で検出した。調査区の南端部はL II直下でL Vとなる。L Vの厚さは約50cmで、その下位は褐色砂礫層である。L Vは本書第1編に収録する南狼沢遺跡のLVに相当し、黄褐色土層と褐色砂礫層が互層をなして堆積する状況が確認できる。

第2節 堅穴住居跡

1次調査では、平安時代の堅穴住居跡を2軒確認した。いずれも堅穴住居跡の一辺が24~40mと規模が小さく、出土遺物が少なく生活痕跡が乏しい。さらに周間に分布する掘立柱建物跡については、鉄および木炭の生産に関わる管理施設の可能性がある。堅穴住居跡の機能についても、掘立柱建物跡との関連を精査するとともに、2次調査の成果を待って改めて検討する必要がある。

1号堅穴住居跡

遺構 (図3、写真7~10)

1号堅穴住居跡は調査区の南端部、段丘平坦面のはば中央部に位置する。周囲は東に向かってわずかに低く傾斜する。その標高は66.8mである。遺構検出面はLVとした黄褐色土の上面である。本遺構と3号掘立柱建物跡が重複する。1号堅穴住居跡は削平著しく、3号掘立柱建物跡の柱穴が重複する部分の堆積土がわずかであるため、新旧関係は不明である。遺構検出作業時の印象から、本遺構が3号掘立柱建物跡よりも古いと判断した。また本遺構の西側には2号掘立柱建物跡、東側には4・5号掘立柱建物跡・2号土坑が分布している。

1号堅穴住居跡の平面形は長方形を基調とするが、西壁側がわずかに狭くやや台形となる。東壁を基準とする建物の向きは、N5°Eである。周間に分布する掘立柱建物跡の向きと一致する特徴が認められる。本遺構の規模は、長辺となる北壁の長さが3.3mである。西壁の長さが2.4m、東壁の長さが2.8mを測る。検出面から床面までの深さは5~10cmと浅く、その標高は66.8mである。また床面の南東隅では、部分的な貼床が確認できた。黒色土と黄褐色土が混ざった土で床面を平坦に整えていることが確認できた。

1号堅穴住居跡の施設として、カマドや床面を掘りこむ穴(P1・2)、上屋を支える柱穴(P3~P11)を確認した。カマドは東壁の中央からやや南寄りの部分に位置している。堆積土中に直径1~3cmの焼土塊が散っている程度である。そのため明瞭な焼面や袖の痕跡などは認められず、カマドの具体的な構造を窺う所見は得られていない。

P1は床面の南東隅に位置する。出土遺物やP1の堆積土の観察から、住居跡の廃絶まで開口した状態で機能していたことから、いわゆる住居内の貯蔵穴と判断した。平面形は隅丸長方形で、床面上での規模は、長辺の流さが70cm、短辺の長さが62cmで、床面から底面までの深さが25cmを測る。P1の堆積土中からは炭化した木製品が出土している。P1の埋没過程において、周間に散在していた炭化木製品が混入したものと推察している。P2は床面中央からやや北東寄りに位置する。堆積土の観察から、住居跡の廃絶時まで開口状態で機能していたものと判断している。P2からは遺物が出土していないため、その機能は不明である。

P3~P11はいずれも壁際に位置する小穴で、上屋を支えるための柱穴と判断した。北壁に5

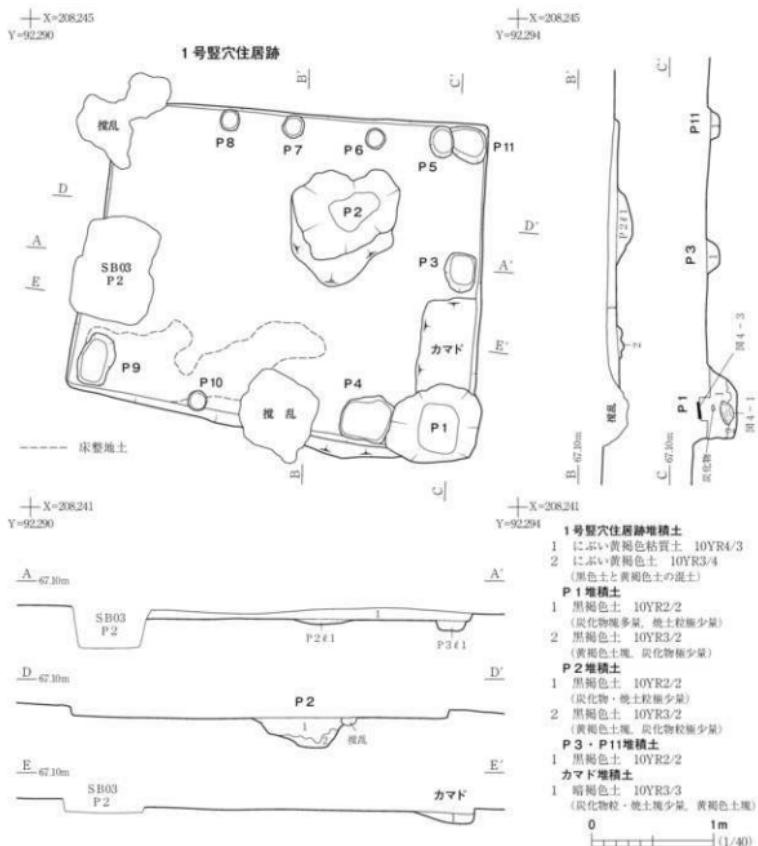


図3 1号竪穴住居跡

基、南壁に3基、東壁の中央に1基が配される。柱穴の平面形は円形で、その直径は18cmと小さい。南西隅とP1西側に配されるP4・9の平面形は楕円形で、その長径が45cm、短径35cmと大きい。一方、床面から柱穴底面までの深さは、いずれも10cm前後と浅く、竪穴住居跡の柱穴としては、やや貧弱である。壁際に柱を据え、壁材とともに屋根を支える構造となるのであろう。

遺物 (図4, 写真30・31)

1号竪穴住居跡からは土師器片と須恵器片が少量出土した。その他に炭化した木製品もわずかに出土した。その内形状を把握できたものを図4に示した。本遺構は削平が顕著で、床面を覆う堆積土がわずかである。そのため床面から出土した遺物は少なく、P1の堆積土中から出土したもののが

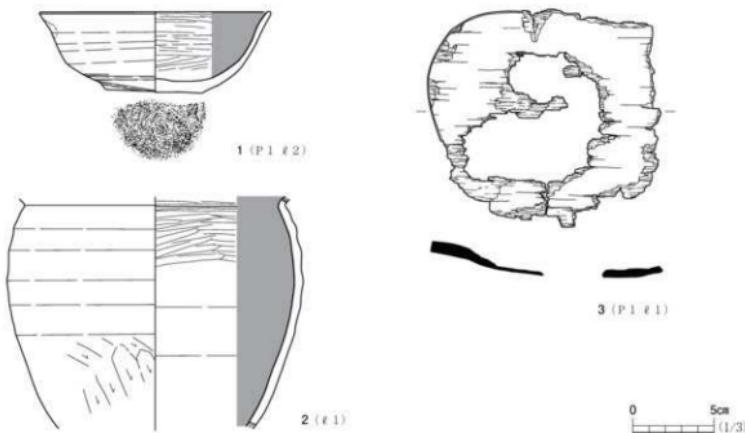


図4 1号竪穴住居跡出土遺物

大半を占める。炭化した木製品は、すべてP1の堆積土中から出土した。

1は土師器の杯で、P1の底面付近から出土した。やや丸みを帯びた体部で、口縁部が小さく外反する。底部はロクロの回転を利用した糸切りで切り離され、その際に体部下端に糸があたった痕跡が認められる。内面はミガキが施された後に、黒色処理が施される。2は土師器の甕で、P1付近の床面上から出土した。口縁部を欠損するが、頸部が「く」の字に括れる。体部の器形は、上半部に最大径を持ち、底部に向かって細くすぼまる。外面の整形痕は、上半部はロクロナデで、下半部は縦方向のケズリが観察できる。内面の整形痕は、上半部に横方向のミガキが密に施されるが、下半部はミガキがなくロクロナデを残す。内面は黒色処理が施される。

3は炭化した木製品である。柵末に所取した樹種同定分析によれば、樹種はケヤキである。薄い板材で、側辺が丸く整えられることから、皿または鉢であろうか。その他に図示していないが、柵の小破片も数点認められる。樹種同定分析の結果、これらもケヤキおよび散孔材である。

まとめ

1号竪穴住居跡は、長辺が3.3m、短辺が2.4mと規模が小さく、出土遺物もわずかである。生活痕跡に乏しい感があり、機能的にも居住を目的とした施設ではない可能性も考えられる。3号掘立柱建物跡と重複し、やや不明瞭ではあるが、1号竪穴住居跡が先行するものと考えている。一方、本遺構の出土遺物と掘立柱建物跡に伴う2号土坑の出土遺物に、それほどの年代差が認められない。両者が継続的に造られたことを示している。本遺跡の掘立柱建物群の性格について、鉄や木炭などの生産に関連することを積極的に評価すれば、木炭窯や製鉄炉の構築、木の伐採や粘土の採掘など、実際の木炭や鉄の生産作業に先行する作業に従事する人々が居住していた施設と指摘できる。本遺構の年代は、出土遺物の特徴から9世紀後半代を中心とする。

2号堅穴住居跡

遺構（図5・6、写真11～13）

2号堅穴住居跡は調査区の北西端に位置する。周囲は段丘平坦面の北端にあたり、東に向かってわずかに低く傾斜する。その標高は66.4mである。遺構検出面はL Vとした黄褐色土の上面である。本遺構と重複する遺構はないが、南西側7mには6号掘立柱建物跡と5号土坑が分布する。なお、1号堅穴住居跡とは約55mの距離がある。

2号堅穴住居跡の北西隅が調査区外へと続くが、その平面形は長方形を基調とする。その規模は長辺となる西壁の長さが4.0m、短边となる南壁の長さが3.5mである。西壁を基準とする主軸の向きは、N 10° Eである。検出面から床面までの深さは、最大でも20cmである。周壁は垂直気味に立



図5 2号堅穴住居跡（1）

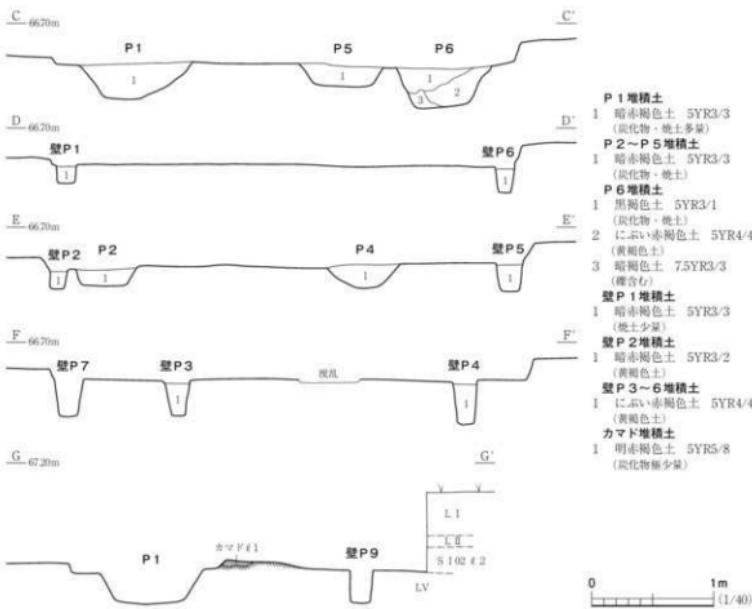


図6 2号竪穴住居跡(2)

ち上がる。床面は平坦で、その標高は66.35mである。遺構内の堆積土は2層に分けた。1層は赤みがかった暗褐色土で、床面全体を覆う自然流入土である。2層は焼土塊を多量に含む赤褐色土で、カマド付近にのみ確認できる。2層は焼土塊を多量に含み、その一部がP 1内に混入する堆積状況から、カマドを人為的に壊していると判断した。

2号竪穴住居跡の施設として、カマドと床面を掘りこむ穴(P 1～P 6)、上屋を支える柱穴(壁P 7～壁P 10)を確認した。カマドは東壁の中央に位置する。火熱で硬化した底面を確認したが、袖部の痕跡は遺存していない。底面はやや不整な楕円形で、その規模は長辺の長さが70cm、短辺の長さが50cmである。P 1は床面の南東隅、カマドの南側に位置する。平面形が楕円形をなし、その規模は長径の長さが94cm、短径の長さが80cmで、床面からの深さが30cmである。堆積土はカマドを起源とする焼土塊を多量に含む土が、カマド側から底面に向かって落ち込むように堆積する。P 1は本来開口状態で機能していたものが、本遺構の廃絶に伴いカマドを壊す際に埋められたものと推察している。P 2・4・5は、床面からの深さが20cm程の浅い穴である。これらの機能を窺う所見は得られなかった。P 6は床面の北東側に位置する。平面形が楕円形をなし、その規模は長径が90cm、短径が75cmを測り、床面からの深さが35cmである。P 1と同様な特徴があることから、住居内の貯蔵穴と推察している。

上屋を支える柱穴は、いずれも壁際に沿って配される。柱穴の配置は搅乱などで不明瞭であるが、各壁とも2～3基設けられる。西壁の中央には浅い搅乱があるものの、柱穴の痕跡が認められない。この部分が堅穴住居の出入口になるのであろう。柱穴の平面形は床面上では隅丸方形であるが、底面では方形を基調とする。その規模は一辺が20cmで、床面からの深さが15～30cmを測る。

遺 物（図7、写真30・31）

2号堅穴住居跡からは、土師器片と須恵器片が少量出土した。遺物の大半は土師器で、須恵器は十数点のみである。そのうち形状が把握できたものを図7に示した。遺物は床面を覆う堆積土やP1の内部から出土しているが、遺物の使用痕跡を残す出土状況ではない。

1は土師器杯である。カマドの前面付近で、床面からやや浮いた位置から出土した。器形はやや丸みを帯びた体部で、口縁部が小さく外反する。外面はロクロメを明瞭に残す。底部から体部下端は、ロクロの回転を利用したケズリで、再調整が施されている。内面はミガキが密に観察でき、黒色処理される。内面のミガキは、口縁部付近が横方向、体部下半が斜位、見込み部が六角形になるように施されている。2は筒形土器の口縁部破片である。カマドの底面付近から出土した。器形は円筒形をなし、口唇部がわずかに内傾する。外面は製作時の粘土積み上げ痕を残し、指オサエによつて器面を整えている。口縁部の指頭痕は明瞭で、指で細かく摘み上げて整えられる。内面は横方向の指ナデが観察でき、外面に比べて平滑に整えられる。3・4は土師器の甕で、3はP1の内部から出土した。P1はカマドを人為的に破壊して埋められていることから、これらの甕はカマドに据えられていた可能性が高い。3は全体の20%程の破片である。口縁部が大きく外傾して開く。体部は長胴で、上半部に最大径を持ち、底部に向かって細くすぼまる。カマドに据えて用いていたのであろう。内外面とも摩滅が著しく整形痕は不明瞭である。口縁部はヨコナデ、体部はケズリがわずかに観察できる。4は50%程の破片である。体部は長胴で、中位に最大径を持ち、底部に向かってすぼまる。口縁部は大きく外傾して開き、内面の稜が明瞭である。3と同様に外面の調整痕は不明瞭で、特に下半部の摩滅は顕著である。口縁部はヨコナデで整えられ、体部はケズリが施される。内面は口縁部から頸部付近までヨコナデで整えられる。体部は指ナデで器面調整される。

5～13は須恵器の破片で、全体的な器形の分かることはできない。胎土に砂を含み、堅く焼き締まっている。5は瓶類であろう。体部上半から頸部に向かって丸みを帯びてすぼまる。内外面ともカキメが観察できる。6は横瓶であろうか。内外面ともカキメで整形されているが、外面にタタキ痕が残る。また破片上部にはケズリの痕跡が確認できる。7～13は甕の破片である。外面にはタタキ痕が観察できる。内面はナデで器面調整される。

ま と め

2号堅穴住居跡は北東端に位置し、1号堅穴住居跡や2号掘立柱建物跡から離れた地点に分布する。1号堅穴住居跡と比較して、カマドや貯蔵穴の位置、柱穴の配置など堅穴住居としての構造は共通する。一方、床面に深い穴が多く、土器類に須恵器を持つ点が異なる。これらが両堅穴住居跡の機能の違いを反映している可能性がある。出土した土器の特徴から、9世紀後半と考えている。

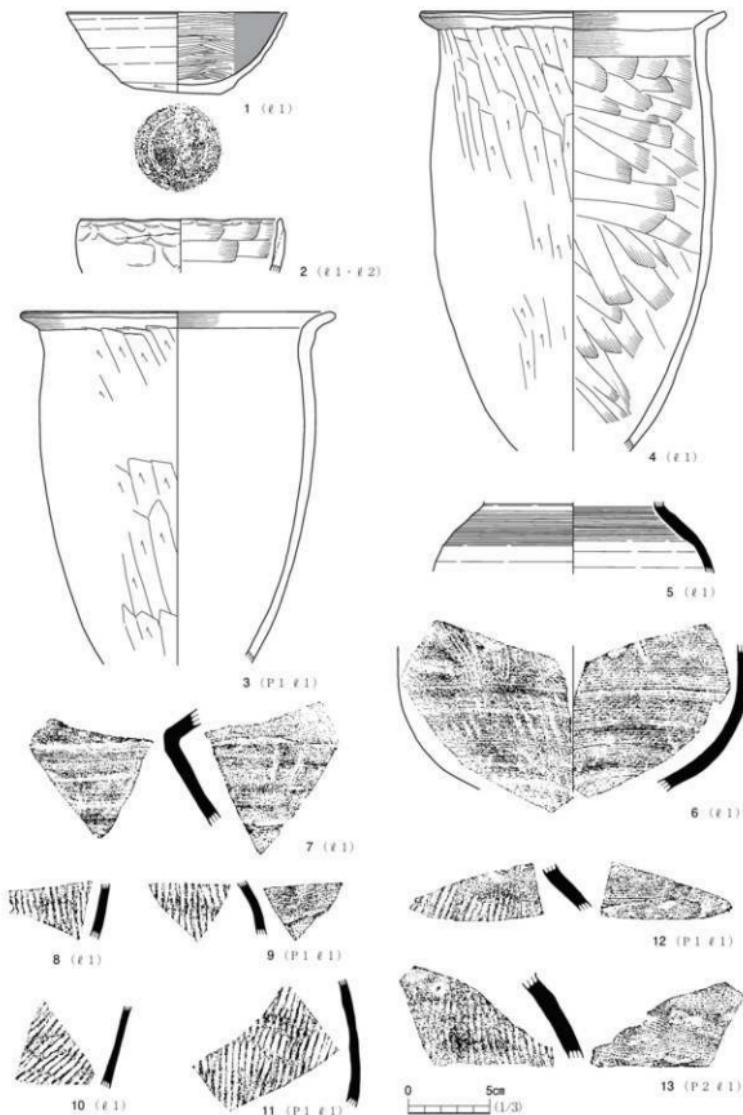


図7 2号竪穴住居跡出土遺物

第3節 掘立柱建物跡

南狼沢A遺跡1次調査では掘立柱建物跡を6棟確認した。いずれも建物の向きを同じくすることから、建物配置に規格性を持った一連の建物群を形成するものと考えている。各掘立柱建物跡の配置は、2号掘立柱建物跡が4間×1間以上の東西棟で、最も規模が大きい側柱建物である。さらに2号掘立柱建物跡の東側には、2間×2間の小型建物が3棟分布し、倉庫群となる可能性がある。2号掘立柱建物跡の北側24mには1号掘立柱建物跡が位置する。各掘立柱建物跡はある程度の空間を隔てて、建物跡の分布域を複数個所に分散して配置する傾向が看取できる。

これら掘立柱建物跡の性格については、本遺跡の南側に隣接する南狼沢B遺跡で確認された木炭窯跡および製鉄炉跡が重要になる。福島県浜通り地域において大規模製鉄関連遺跡である、南相馬市に所在する大船迫A遺跡と割田H遺跡でも掘立柱建物跡群が確認されている。それらの報告によれば、木炭や鉄の生産を管理するための施設と位置付けられている。本遺跡の掘立柱建物跡群の性格を検討する上で、良好な視座となるであろう。

1号掘立柱建物跡（図8、写真14・15）

1号掘立柱建物跡は調査区の西端に位置する。周囲の地形は、東に向かってわずかに低く傾斜するものの、全体的には平坦地である。標高は67.8mである。遺構検出面はLVとした黄褐色土の上面である。1号掘立柱建物跡と重複する遺構はないが、南東側28mには2号掘立柱建物跡が分布する。

1号掘立柱建物跡は調査区際に位置し、西半分が調査区外へと続く。そのため東側柱列3間と北側柱列1間を確認しただけで、掘立柱建物跡の詳細な規模は不明である。東側柱列を基準とする建物の向きは、真北に対して5度東に傾く。南側に分布する2～5号掘立柱建物跡と建物の向きを揃えている。

1号掘立柱建物跡の規模は、東側の柱列（P2A～P5間）が7.6m、北側の柱列（P1～P2A間）が3.0m以上である。各柱穴の柱痕跡を基準とする柱間距離は、P1～P2A間が22m、P2A～P3間が25m、P3～P4間が26m、P4～P5間が25mを測る。東側柱列の柱間距離が、北側柱列に比べて、わずかに広い。

各柱穴の平面形は隅丸方形を基調とする。その規模は一辺が50～58cmである。遺構検出面から柱穴底面までの深さは16～34cmである。柱穴底面の標高は67.36～67.55mで、北東隅にあたるP2Aに向かって徐々に低くなる。柱穴の堆積土は、柱痕跡と掘形埋土に分けた。柱痕跡はP1・P2A・P4・P5で確認した。いずれも炭化物をわずかに含む黒色土で、ややしまりがない。断面観察から柱材として、直径10cm程の丸太材が用いられたと推察している。さらに柱穴の底面には、平面形が円形で、直径が10cm、深さが1～2cmの浅いくぼみが認められる。このくぼみが土層断面で確認した柱痕跡の位置と一致することから、建物の自重によって柱材が沈下した痕跡と判断し

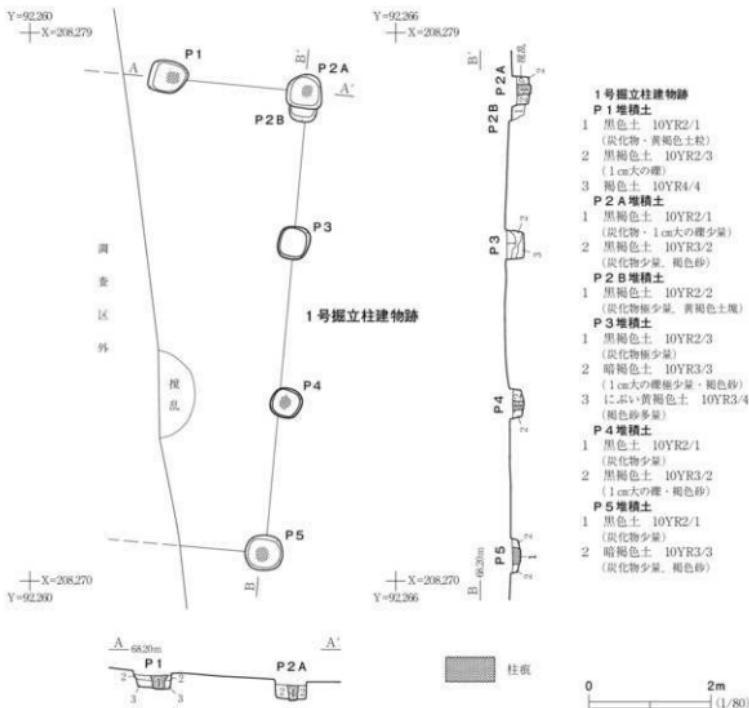


図8 1号掘立柱建物跡

た。掘形埋土は褐色土と黒褐色土が混ざった土で、堅くしまる。また、P 2 Bでは柱穴の重複が認められたが、その他の柱穴では建て替え痕跡や柱材の抜き取り痕跡などは確認できない。

1号掘立柱建物跡は、柱穴の規模が2号掘立柱建物跡より小さく、柱間距離も狭い。一方、3～6号掘立柱建物跡の柱穴とはほぼ同じ規模で、柱間距離も大差ない。6号掘立柱建物跡と同じく2間×3間の南北棟の建物跡と推察している。本建物跡の年代については、遺物が出土しておらず不明であるが、周囲の掘立柱建物跡と同じく9世紀後半代を中心とする時期と考えている。

2号掘立柱建物跡 (図9、写真16～19)

2号掘立柱建物跡は調査区の南西部に位置する。周囲の地形は東に向かって低く傾斜するものの、ほぼ平坦地となる。その標高は67.0m～67.5mである。遺構はLVとする黄褐色土の上面である。本遺構と重複する遺構はないが、東側には建物の向きを揃えて、軒を接するように3号掘立柱建物跡が分布している。さらに東側15mには4・5号掘立柱建物跡が分布する。

今回の1次調査においては、2号掘立柱建物跡は調査区間に位置するため、北側柱列4間と東西柱列1間分を確認しただけで、その全容は把握できなかった。北側柱列が4間であることから、南猿沢A遺跡では最大規模の掘立柱建物跡である。東側柱列を基準とする建物の向きは、N 3° Eである。周囲の掘立柱建物跡といずれも向きを揃えて配置することから、2号掘立柱建物跡が中心的な施設となる可能性が高い。またP2・P3、P5・P6において柱穴が重複し、部分的であるが建替えの痕跡と判断した。

2号掘立柱建物跡の規模は、北側柱列(P2-P8間)が10.52mを測る。東西柱列がP8-P9間で2.2m以上である。柱穴の中心を基準とする柱間距離は、北側柱列が東西柱列に比べて、わずかに広くなる。北側柱列では、P2-P4間が3.0m、P4-P5間が2.4m、P5-P7間が2.5m、P7-P8間が2.8mである。東西柱列ではP1-P2間が2.1m、P8-P9間が2.2mである。

柱穴の平面形は隅丸方形または隅丸長方形を基調とする。P4-P7は隅丸正方形、P1・P2・P8・P9は隅丸長方形である。隅丸方形となる柱穴は一辺が74cm、隅丸長方形になるP9は長辺が78cm、短辺が58cmを測る。検出面からの深さは総じて浅く、12~36cmである。柱穴底面の標

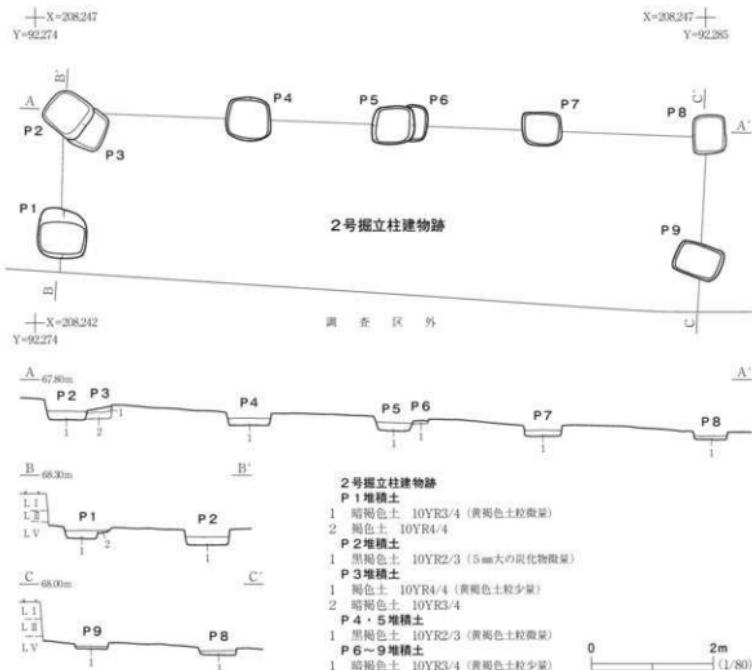


図9 2号掘立柱建物跡

高は66.92m～67.26mと不揃いで、全体的に北東側に向かって柱穴が深くなる傾向が見られる。柱穴の配置については、北西隅にあたる柱穴P2・P3の長辺を基準とする向きが建物の対角線と一致する特徴がある。一方、北東隅の柱穴P8は、長辺を基準とする向きは東側柱列と一致する。また東側柱列のP9も建物向きと柱穴の向きがずれる特徴がある。柱穴は垂直気味に掘り込まれる。P1の北側周壁は、上半部が大きく外側に広がるが、底面付近は垂直になる。柱材の抜き取り痕の可能性もあるが、柱穴自体が浅いこともあり、明確な痕跡を捉えることができない。柱穴の底面はいずれも平坦で、柱材の痕跡などは確認できない。柱穴内の堆積土を観察したが、明確な柱痕跡は確認できない。また、柱材の抜き取り痕なども確認できない。いずれも黄褐色土塊を含み堅くしまる黒褐色土を基調とする土であることから、掘形埋土と判断した。

2号掘立柱建物跡は東西4間、南北1間以上と、南狼沢A遺跡において最大規模となる。また、本遺構からは遺物が出土していないため詳細な年代は不明であるが、周辺に分布する掘立柱建物跡の年代観を勘案すれば、9世紀後半でを中心とする時期と推察している。一方、南狼沢A遺跡で確認した掘立柱建物跡はいずれも建て替え痕跡が少ない。掘立柱建物跡の存続期間がそれほど長期間ではない特徴がある。平安時代における本遺跡の主要施設の一つとなる2号掘立柱建物跡の性格を考える上で、重要な要素となるであろう。

3号掘立柱建物跡（図10、写真17・20・21）

3号掘立柱建物跡は調査区の南端部に位置する。周囲の地形はわずかに東に向かって低く傾斜するものの、全体的にはほぼ平坦である。その標高は67.1mである。遺構検出面はLVとした黄褐色土の上面である。本遺構の柱穴P2・P3と1号竪穴住居跡が重複する。遺構検出時には1号竪穴住居跡の覆土が薄く、床面が部分的に露出していた。そのためP2・P3との新旧関係が不明瞭であった。ただ遺構検出時の印象としては、3号掘立柱建物跡が1号竪穴住居跡より新しいと判断した。本遺構の西側に近接して2号掘立柱建物跡、北東側7mには4号掘立柱建物跡、東側11mには5号掘立柱建物跡が分布する。また、これら掘立柱建物跡の向きは、ほぼ一致する特徴が認められる。

3号掘立柱建物跡は南北2間、東西2間の側柱建物跡である。建物の平面形は、東西方向に長い長方形をなす。東側柱列を基準とする建物の向きは、N3°Eで、近接して分布する掘立柱建物跡の向きとほぼ一致する。なお、南側柱列は木根による搅乱が著しく、一部掘り過ぎている。

建物跡の規模は、北側柱列（P1-P7間）が4.65m、南側柱列（P3-P5間）が4.7m、東側柱列（P1-P3間）が3.75m、西側柱列（P5-P7間）が3.75mを測る。柱穴の中心を基準とする柱間距離は、東西柱列に比べて南北柱列の柱間が広くなる。北側柱列では、P1-P8間が2.25m、P7-P8間が2.4mである。南側柱列では、P3-P4間が2.5m、P4-P5間が2.2mである。東側柱列では柱痕跡が遺存していたP2Bを基準とすれば、P1-P2B間が1.75m、P2B-P3間が2.0mである。西側柱列P5-P6間が2.0m、P6-P7間が1.8mである。

柱穴の平面形は方形を基調とする。その規模はP2Bが最も大きく、一辺の長さが58cmである。

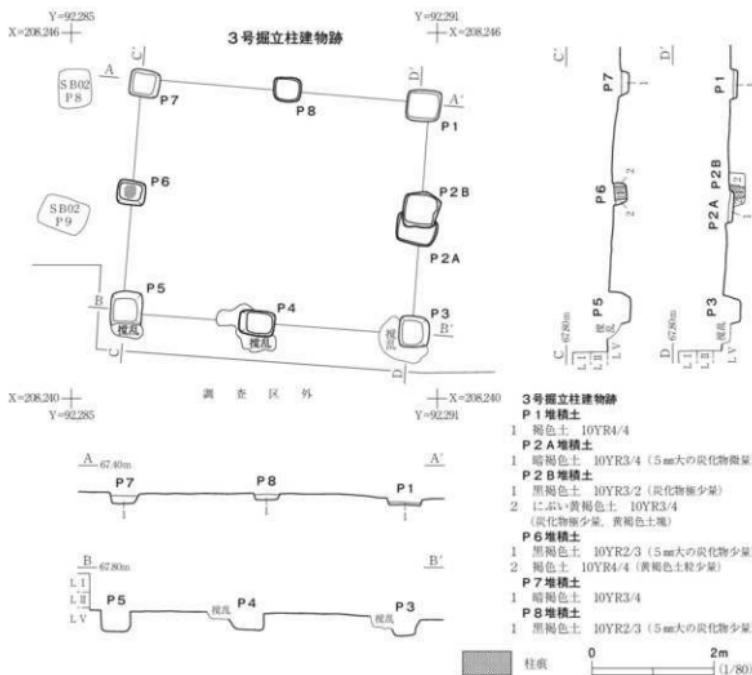


図10 3号掘立柱建物跡

その他の柱穴は一辺の長さが45~55cmで揃う。検出面からの深さは16~36cmで、柱穴底面の標高は66.70~66.82mと不揃いである。柱穴内の堆積土は柱痕跡と掘形埋土に大別できた。柱痕跡はP 2 BとP 6で確認でき、いずれも炭化物を含む黒褐色土である。柱材としては直径10cm前後の丸太材を用いていたと推察している。掘形埋土は褐色土を基調とし、黄褐色土塊を含み堅くしまる。柱穴の重複は、P 2 AとP 2 Bにのみ認められた。建物の部分的な補修の痕跡であろうか。

3号掘立柱建物跡は、最も規模が大きい2号掘立柱建物跡の東側に軸を接するように配置している。2間×2間の小型側柱建物跡となる形状から、2号掘立柱建物跡に付属する倉庫としての機能が推定される。一方、4・5号掘立柱建物跡とは建物の向きを同じくするものの、やや離れた位置に分布する。さらに建物の規模や柱穴の規模が大きく、これらとは用途が異なる建物である可能性も指摘できる。

3号掘立柱建物跡からは出土遺物がなく、その詳細な年代は不明である。1号竪穴住居跡より新しいと考えているが明確でない。周辺に分布する掘立柱建物跡と向きを揃えていることを評価すれば、年代は9世紀後半代を中心とすると考えている。

4号掘立柱建物跡（図11、写真22～24）

4号掘立柱建物跡は調査区の南東部に位置する。周囲の地形はわずかに東に向かって低く傾斜するものの、全体的にはほぼ平坦である。その標高は66.8mである。遺構検出面はLVとした黄褐色土の上面である。本遺構の東側2.5mには2号土坑、南東側2mには5号掘立柱建物跡が分布する。

4号掘立柱建物跡は東西2間、南北2間の側柱建物跡で、平面形は長方形をなす。南北柱列とも中央の柱穴（P4・P8）が内側にずれる。本遺構の規模は、東側柱列（P1-P3間）が3.45m、西側柱列（P5-P7間）が3.6m、北側柱列（P1-P7間）が3.95m、南側柱列（P3-P5間）が3.8mを測る。柱穴の中心を基準とする柱間距離は、南北柱列が2.0m、東西柱列は1.8mである。

柱穴の平面形は、隅丸方形を基調とするが、P1とP5は円形となる。柱穴の規模はばらつきが認められP7が最も大きく、直径が45cmである。P3が最も小さく、直径は34cmである。深さは10～38cmで、底面の標高は66.24～66.52mと不揃いである。柱穴内の堆積土は、柱痕跡と掘形埋土に大別できた。柱痕はP5・P6で確認でき、黒褐色土を基調とする。柱材として直径10cm程度の丸太材が用いられたと推察している。掘形埋土は褐色土に黄褐色土塊を含み堅くしまる。

4号掘立柱建物跡は2間×2間の規模で、その平面形が正方形となることから、倉庫としての機能が推察できる。周辺の掘立柱建物跡と建物の向きを同じくしており、一連の建物群を構成すると考えている。年代は近接する2号土坑から出土した土器の特徴から、9世紀後半代と判断した。

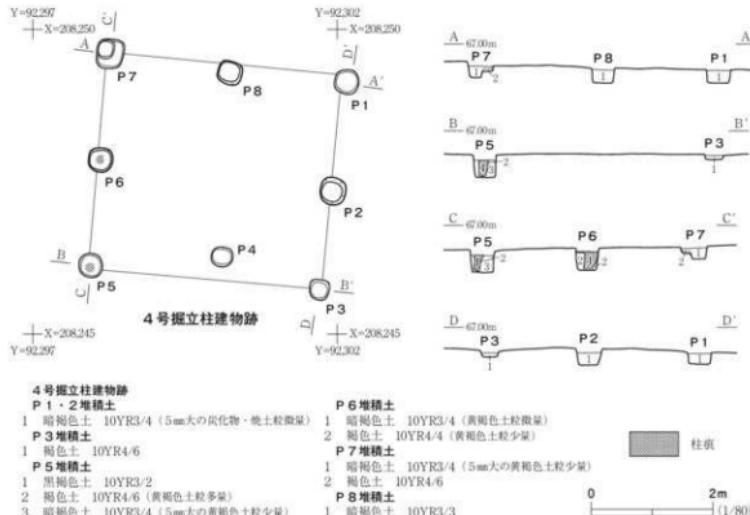


図11 4号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡（図12、写真24・25）

5号掘立柱建物跡は調査区の南東部に位置し、調査区際に接している。周囲の地形は東に向かってわずかに低く傾斜するものの、ほぼ平坦地である。標高は66.7mである。遺構検出面はLVとした黄褐色土の上面である。本遺構と重複する遺構はないが、北側1mには2号土坑、北西側2mには4号掘立柱建物跡が分布している。

5号掘立柱建物跡の南側は調査区外へと続くことから、その全容は把握できない。東西2間、南北2間以上の側柱建物跡である。西側柱列を基準とする建物の向きは、N5°Eである。近接する2～4号掘立柱建物跡の方向とはほぼ一致する。規模は北側柱列（P2～P4間）が3.35m、西側柱列（P4～P6間）が2.95mを測る。柱穴の中心間を基準として柱間距離を計測すると、P3～P4間が最も狭く1.15m、P2～P3間が広く2.2mを測る。西側柱列では1.4～1.5mである。

柱穴の平面形は隅丸方形を基調とする。その規模は、直径が35cmである。検出面からの深さは16cmで、その標高は66.22～66.35mとばらつきが認められる。柱穴内の堆積土は、いずれも黄褐色土塊を含む暗褐色土である。堆積土が堅くしまることから、掘形埋土と判断した。また、明瞭な柱痕跡や建替えの痕跡は確認できない。

5号掘立柱建物跡は調査区外に続くことから、その全容は把握できない。4号掘立柱建物と建物の向きを揃えて近接することを積極的に評価すれば、両者は2間×2間の同じ規模の掘立柱建物跡となる可能性を指摘しておく。正方形の掘立柱建物跡であることから、倉庫としての機能が推定できる。年代は遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺に分布する2号土坑との関連から、おおむね9世紀後半代を中心とする時期と推察している。

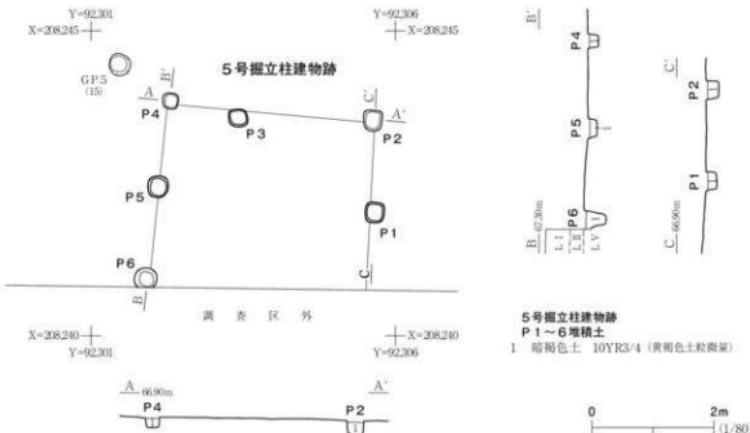


図12 5号掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡（図13、写真26・27）

6号掘立柱建物跡は調査区の北東部に位置する。周囲の地形は東に向かってわずかに低く傾斜するが、ほぼ平坦地である。その標高は66.5mである。遺構検出面はLVとした黄褐色土の上面である。6号掘立柱建物跡と5号土坑は重複するが、直接的な切り合はない新旧関係は不明である。また、本遺構の南西側には4号土坑、北東側には2号竪穴住居跡が分布する。なお、現代の搅乱によって北西隅の柱穴が失われている。

6号掘立柱建物は南北3間、東西2間の側柱建物跡である。南北柱列を基準とする建物の方向は、N5°Eである。柱穴の中心を基準として計測すると、建物の規模は東側柱列（P2-P5間）が4.6m、南側柱列（P5-P7間）が3.15mを測る。柱間距離は南北柱列がやや広く、北側柱列（P1-P2間）で1.7m、南側柱列は1.5~1.6mである。東西柱列の柱間距離は、1.45~1.65mとややまばらである。柱穴の平面形は隅丸方形を基調とする。柱穴の規模は、一辺の長さが35cmで、検出面からの深さは8~32cmである。柱穴の底面の標高は66.22~66.56mとまばらである。柱穴の堆積土の観察から、柱痕跡と掘形埋土に大別できる。柱痕跡はP1・P3で確認でき、炭化物を含む黒色土である。柱材として直径10cmほどの細い丸太材が用いられていると推察できる。掘形埋土は黄褐色土塊を含む黒褐色土で、堅くしまる特徴がある。

6号掘立柱建物跡は出土遺物がないため、詳細な年代は不明である。本遺跡で確認した掘立柱建物跡の年代と大差なく、9世紀後半代の所産と判断した。性格は小型建物跡であることから、倉庫であろうか。

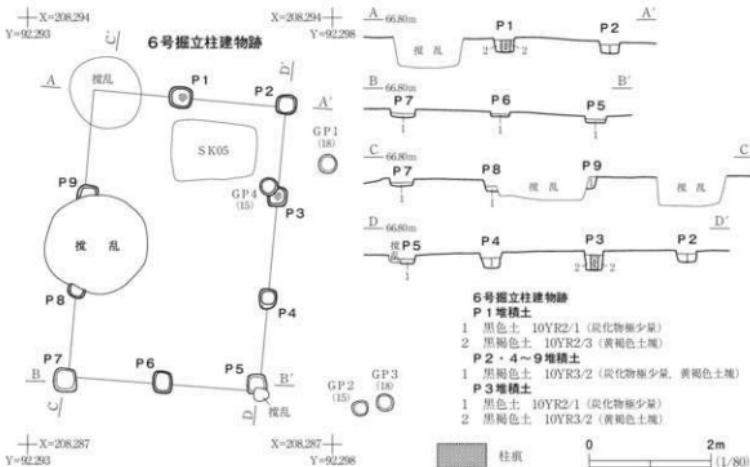


図13 6号掘立柱建物跡

第4節 土 坑

南狼沢A遺跡の1次調査では、土坑を4基確認した。いずれも平安時代に属すると判断した。1号土坑は調査区北側に単独で分布する。その他の土坑は掘立柱建物跡の周間に分布する傾向がある。1・2・4号土坑は当時の生活ゴミとともに土器類を投げ捨てた穴、いわゆる廃棄坑と考えている。5号土坑は遺存状態が極めて悪く、遺構の性格を特定できない。なお、3号土坑は欠番である。

1号土坑（図14、写真28・32・33）

1号土坑は調査区の北西部に位置する。北側の沢地に面する平坦地の縁辺に立地する。標高は68.2mである。また現況が宅地や果樹園であったため、削平が著しく遺構の遺存状態が極めて悪い。遺構検出面はLV上面である。本土坑と重複する遺構ではなく、周間に遺構は確認できない。

1号土坑については、試掘調査によれば、土坑の堆積土中に人頭大の焼土塊を確認したことから堅穴住居跡と報告している。そのため発掘調査時においては、焼土塊や炭化物を含んだ黒色土の広がりを確認した程度で、明確な平面形を捉えることができなかった。削平が著しい堅穴住居跡の一部の可能性もあることから、土層観察用畦を十字に残して掘りこんだ。調査の結果、周壁の立ち上がりが不明瞭で、底面にも柱穴やカマドのような明瞭な施設の痕跡も観察できない。そのため堅穴住居跡の一部となる可能性は低いと判断した。さらに2号土坑と同様な堆積土の特徴と土器類の出土状況であるから、土器類を廃棄した穴、いわゆる廃棄坑と判断した。

1号土坑の平面形は、やや不整な長方形である。その規模は、長軸の長さが2.32m、短軸の長さが2.0mである。検出面からの深さは最大でも0.35mである。周壁の遺存状態は悪く、北側は5cm程度の立ち上がりが確認できたが、南側の周壁は遺存していない。底面は平坦でなく、南側が北側に比べて約10cm低くなる。遺構内の堆積土は3層に分けた。1層は土坑の上層を覆う黒褐色土で、炭化物や焼土粒を含む。2層は土坑の底面上に堆積する暗褐色土で、小砾や黄褐色土塊を含む。3層は土坑東側の壁際にのみ認められる焼土塊である。3層の下部から底面に焼け面は確認できない。土層観察から焼土塊や黄褐色土塊を含む堆積土の状態から、人為的に埋め戻されたと判断した。

1号土坑からは土師器片と須恵器片が合わせて十数点出土した。そのうち形状が分かるものを図14に示した。1～5は土師器杯である。いずれも整形にロクロが用いられている。器形は体部下半がやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部がわずかに外反して開く。体部下半から底面にかけて再調整が施され、底部の切り離し痕跡は不明である。1・4は手持ちによるケズリ、2はロクロの回転を利用したケズリによる再調整が施される。5は摩滅が著しいため、整形痕は不鮮明である。6～8は土師器甕である。いずれも整形にロクロが用いられている。6は甕の上半部の破片である。口縁部が頸部で「く」の字状に開く。口唇部が上方に摘み上げられ、その断面形は三角形をなす。7は底部の破片である。8は口縁部付近の破片である。口縁部は頸部でわずかに外傾して開く。ロ

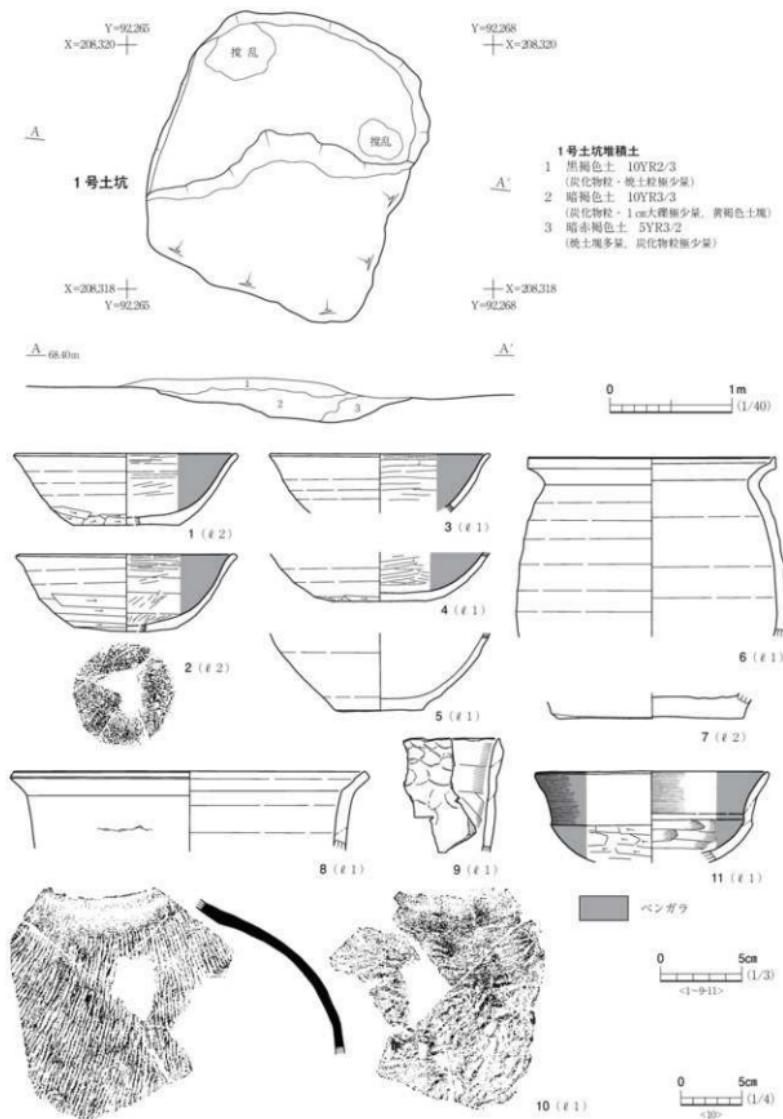


図14 1号土坑、出土遺物

クロ整形であるが、外面には製作時の粘土積み上げ痕が残る。9は筒形土器の小破片で、いわゆる製塙土器である。10は須恵器壺の体部上半部の破片である。器形は、頸部から体部上半部がやや丸みを帯びる。外面には平行タタキ具痕、内面には肩状の模様が入るアテ具痕が観察できる。

11は口縁部の小破片であるが、古墳時代後期の有段丸底杯である。本遺物以外で南狼沢A遺跡から古墳時代後期と推定される遺物は出土していない。整形にロクロが用いられていない。口縁部はやや外反気味に立ち上がる。内外面ともにヨコナデによって整えられる。口縁部と体部の境にするどい段を持ち、体部下半から底部にかけてケズリが施されて丸底となる。内面は横方向のナデで器面が整えられる。内外面ともにベンガラを用いた赤色顔料によって彩色されている。

1号土坑は遺物の出土状況や堆積土の特徴などから、当時の生活ゴミとともに土器類を棄てた穴、いわゆる廃棄坑と判断した。2号土坑と4号掘立柱建物跡が近接して分布するなど、廃棄坑が掘立柱建物跡の周囲に分布する事例が多い。周辺の遺構分布を勘案すれば、本土坑の東側は宅地へと続く道跡で大きく削平された地点であることから、調査区外となる1号土坑の西側に掘立柱建物跡が存在する可能性が高い。本土坑の年代は、出土遺物の特徴から9世紀後半と判断した。

2号土坑（図15、写真28・32・33）

2号土坑は調査区の南東部に位置する。周囲の地形は、わずかに東に向かって低く傾斜するものの、ほぼ平坦である。標高は665mである。遺構検出面はLV上面である。2号土坑と重複する遺構はないが、本土坑の西側には4号掘立柱建物跡、南側には5号掘立柱建物跡が近接する。

2号土坑の平面形は不整形で、南半部は楕円形を基調とし、北半部は隅丸長方形になる。規模は長軸の長さが2.0m、短軸の長さが1.68mである。検出面からの深さは0.2mと浅い。長軸の方向は、ほぼ真北に対して3度東に傾き、近接する掘立柱建物跡の向きと揃う。

遺構内堆積土は2層に分けた。1層は上層部分の堆積土で、炭化物と焼土粒を含む暗褐色土である。2層は土坑の底面を覆う褐色土である。堆積土の土質などから、人為的に埋められた堆積状況と判断した。周壁は急傾斜で立ち上がり、底面と周壁の境が明瞭である。底面はほぼ平坦である。

2号土坑からは灰釉陶器片1点、土師器片と須恵器片が合わせて十数点出土した。いずれも2層中から出土し、土坑の底面からやや浮いた状態で検出できた。これら遺物のうち、形状が把握できたものを図15に示した。

1は灰釉陶器の底部破片である。全体的な器形は不明であるが、高台付椀であろう。高台部はロクロの回転を用いて丁寧に整えられる。内外面ともにハケ塗りにより灰釉が施される。内面は体部上半部に灰釉が施され、見込み部には釉薬が塗られない。胎土は灰白色で、砂粒が少なくきめが細かい。

2・3は土師器杯である。いずれもロクロを用いて整形され、内面は黒色処理される。2は口縁部がわずかに外反して開く器形である。内面のミガキは単位幅が狭く、口縁部付近が密に施される。3はやや丸みを帯びた体部である。4は土師器の鉢であろう。底部を欠損するものの、体部が直立気味に立ち上がる。口縁部は小さく外傾して開く。外面はロクロを用いた整形痕を残す。内面はミ

ガキが施された後に、黒色処理される。

5・6は須恵器で、接合しないが同一個体となる。上半部を欠損して全体の器形は不明であるものの、底部に高台が貼り付けられた大型瓶類と判断した。胎土は砂粒を含み、やや紫色がかった灰色である。5は体部下半部の破片である。外面にはタタキ具の痕跡を残して、ロクロの回転を利用したカキメで整形される。内面はカキメが観察できる。6は体部下半から底部の破片である。平底となる底部に、断面形が台形となる高台を貼り付けている。体部下半はナデやケズリが施され、カキメで整えられる。内面はカキメで器面が整えられた後に、底面付近はナデが観察できる。

2号土坑は楕円形を基調とする浅い穴で、人為的に埋め戻された特徴がある。4・5号掘立柱建

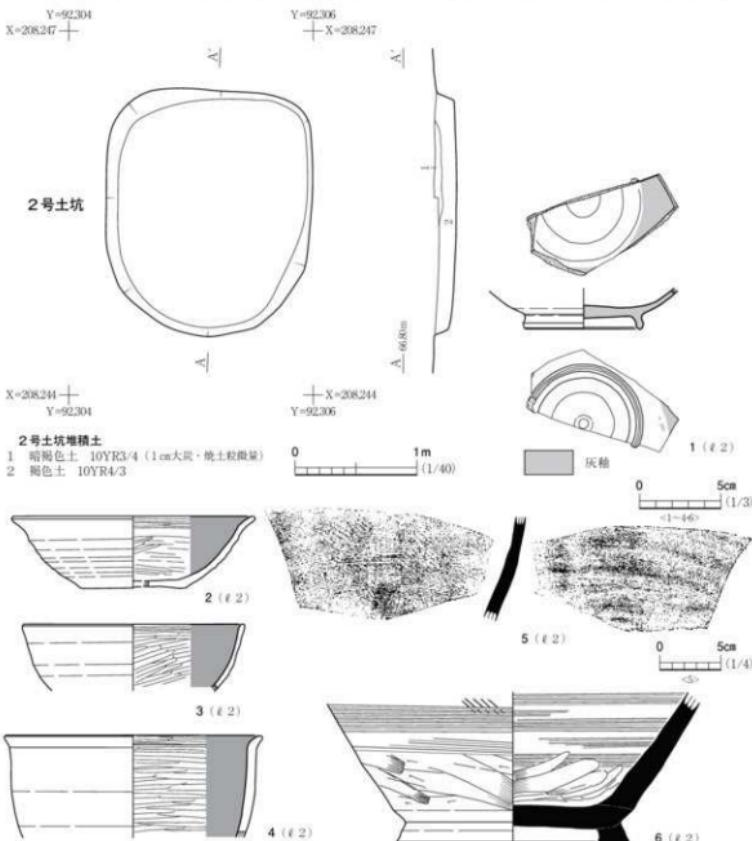


図15 2号土坑、出土遺物

物跡に近接する。本土坑の性格として、当時の生活ゴミとともに土器類を捨てた穴、いわゆる廃棄坑と判断した。出土した遺物の特徴から9世紀後半代と考えている。また、福島県浜通り地域において施釉陶器の出土例は極めて少ない。南狼沢A遺跡から北東側1.1kmに位置する別所遺跡では、縁釉陶器の碗が1点出土している。これら施釉陶器は明らかに他地域からの搬入品であるため、これらの入手経路や手段などを含めて、南狼沢A遺跡の性格を検討する上で重要な遺物である。

4号土坑（図16、写真29）

4号土坑は調査区の北東側に位置する。周囲の地形は、ほぼ平坦である。標高は66.5mである。遺構検出面はLV上面である。重複する遺構はないが、北東側には6号掘立柱建物跡が近接する。

4号土坑の平面形は、南側の周壁がやや直線的になるが、全体的には楕円形を基調とする。規模は長軸の長さが2.24m、短軸の長さが1.58mである。検出面から底面までの深さは0.16mと浅い。長軸の方向は真北に対して75度西に傾き、その方向は6号掘立柱建物跡とはほぼ一致する。周壁は比較的急峻に立ち上がる。底面は中央部がやくぼむが、ほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色土で、炭化物や焼土粒を含んでいる。2層は土坑底面の中央付近にのみ認められる暗褐色土で、黄褐色土塊を含んでいる。いずれも堆積土中に凝灰岩の小礫や黄褐色土塊を含むことから、人為的に埋め戻されたものと判断した。

4号土坑からは土師器片が数点出土したが、摩滅が著しい小破片のため図示していない。

4号土坑は、平面形が楕円形をなす深い穴で、人為的に埋め戻された特徴がある。さらに6号掘立柱建物跡に近接するなど、1・2号土坑と共に通する特徴があることから、その性格についても同様に、いわゆる廃棄坑と考えている。出土遺物が少なく、詳細な年代は不明であるが、周辺に分布する遺構群の年代と大差なく、おおむね9世紀後半代の所産と推察している。

5号土坑（図16、写真29・32）

5号土坑は調査区の北東部に位置する。周囲の地形は、わずかに東に向かって低く傾斜するものの、ほぼ平坦である。標高は66.5mである。遺構検出面はLVとした黄褐色土の上面である。5号土坑と6号掘立柱建物跡は重複するが、柱穴とは直接的な切り合いがなく新旧関係は不明である。また、本土坑の北東側8mには2号堅穴住居跡、南西側4mには4号土坑が分布する。

5号土坑の平面形は東側の幅がやや狭まるものの、四隅の角が整った長方形となる。規模は南北の長さが1.38mを測り、西辺の長さが1.0m、東辺の長さが0.8mである。長軸の向きは、ほぼ東西方向を示す。検出面から底面までの深さは0.1mと浅い。底面中央からやや西寄りに位置する不整形の落ち込みの底までは0.22mである。周壁は各辺ともわずかであるが、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、中央やや西寄りに不整形の落ち込みが認められる。落ち込みの底面は比較的整った平坦面となる。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は焼土塊である。2層は底面に認められた小穴に堆積する暗褐色土で、炭化物や焼土粒を含む。3層は土坑底面を覆う褐色土で、黄褐色土粒を含

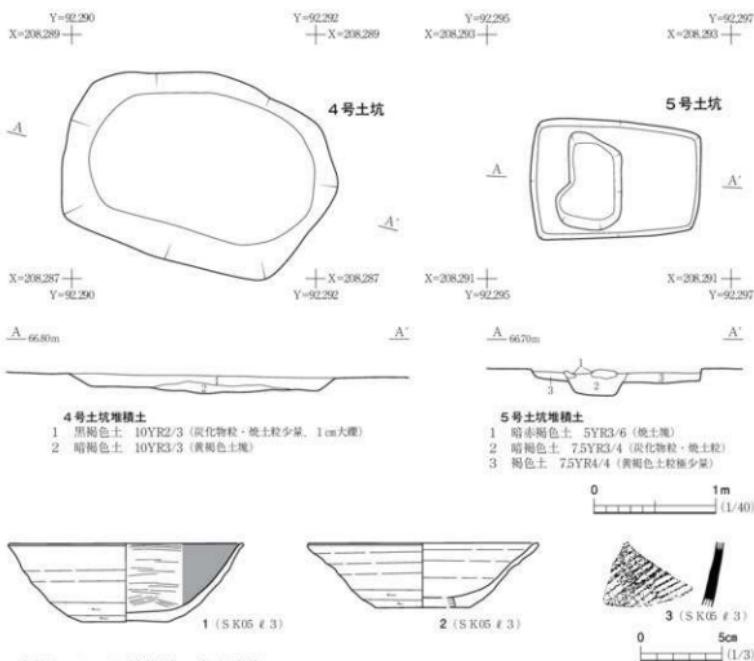


図16 4・5号土坑、出土遺物

んでいる。堆積状況と含有物の特徴から、人為的に埋め戻されたものと判断した。

5号土坑からは土師器片と須恵器片が数点、その他に鉄製品の破片が3点出土した。鉄製品は錆化が著しい小破片のため図示していないが、刀子または釘の一部であろうか。

1・2は土師器杯である。1は内面が黒色処理される。器形は体部がやや丸味を帯びて立ち上がり、口縁部が小さく外反して開く。体部下半から底面は、ロクロの回転を利用したケズリで再調整が施される。内面は単位幅が狭いミガキが観察できる。口縁部から体部が横方向のミガキ、見込み部は六角形になるようにミガキが施される。2は底部から口縁部まで直線的に立ち上がる。体部下半と底面はロクロの回転を利用したケズリで再調整される。内外面ともにロクロを用いた整形痕を明瞭に残し、内面にはミガキや黒色処理が施されない。3は須恵器壺で、体部下半の小破片である。外面は平行タタキ具痕が観察される。内面はナデで整えられる。胎土は砂粒を含み、青灰色をなす。

5号土坑は平面形が長方形をなし、底面に不整形の落ち込みを持つ特徴がある。遺構自体が削平されて浅いこともあり、性格を特定する所見に乏しい。また土坑の形状から墓跡と推定したが、棺の痕跡など積極的根拠は得られていないため性格は不明である。本土坑の年代は、出土した遺物の特徴から9世紀後半と判断した。

第5節 遺構外出土遺物（図17、写真34）

南狼沢A遺跡の遺構外出土遺物として、縄文土器、平安時代の土師器や須恵器が出土した。遺物の出土量はコンテナ箱で1箱に満たない程度と極めて少ない。南狼沢A遺跡の現況は、北側が宅地、南側が果樹園であったため削平が著しい。そのため遺構の遺存状態が極めて悪いだけでなく、遺物を含む当時の生活面が大きく損なわれていることが分かった。遺構外出土遺物はL IIとした黒褐色土中に含まれているものもあるが、その出土量は極めて少ない。その他に果樹の苗木を植えるために掘られた穴に混入したものも多い。遺物は、遺構の分布状況と同様に2号竪穴住居跡の周辺から多く出土した。遺構外出土遺物のうち、特徴が把握できたものを図17に示した。

1～5は縄文土器である。1は深鉢の体部破片である。粘土紐を貼り付けた隆帯がめぐり、隆帯の上部に指頭によるキザミが施される。体部には地文として縄文が施される。2～4はいずれも深鉢の体部破片である。器面の摩減が著しく不鮮明であるが、地文として縄文が施される。2は胎土に纖維混和痕が観察できる。1～4は文様や胎土などの特徴から、縄文時代前期頃の所産と判断した。

5は深鉢の体部破片である。外面には縄文が施される。内面は摩減が著しく器面調整を観察できない。胎土に砂粒を多量に含み、もろく軟質である。縄文時代後期頃の所産と判断した。

南狼沢A遺跡では縄文時代の遺構は確認していないが、南側に近接する南狼沢B遺跡において縄文時代前期および後期の遺構や遺物が確認されている。本遺跡の縄文土器は、南狼沢B遺跡の遺構群に関連して、当時の生活圏の一部であったものと考えている。

6は須恵器で、甕の体部下半の破片である。胎土は、やや紫色がかった灰褐色で、砂粒を含んでいる。非常に硬質な焼き上がりである。外面はタタキ具痕、内面には木目が明瞭に残るアテ具痕が観察できる。本遺物の年代は、1・2号竪穴住居跡と同時期で、9世紀代の所産と判断した。（福田）

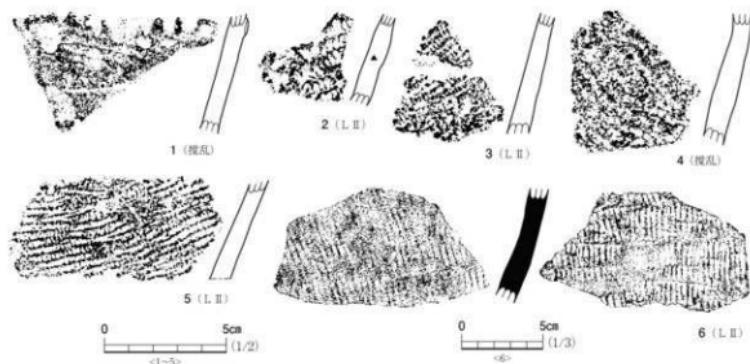


図17 遺構外出土遺物

第3章 総括

南狼沢A遺跡1次調査では、平安時代に属する堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡6棟、土坑4基を確認した。本章では、掘立柱建物跡の性格を中心に1次調査の成果をまとめる。

1. 南狼沢A遺跡の掘立柱建物跡

掘立柱建物跡の特徴 第2章第3節で報告したとおり、南狼沢A遺跡の掘立柱建物跡群は建て替えの痕跡がなく、建物の向きを描える分布状況から、ほぼ同時期に存続していたと考えられる。掘立柱建物の配置については、遺跡の全容が把握できない点を留保する必要があるものの、1・6号掘立柱建物跡がそれぞれ離れた場所にあることから、3～4棟の掘立柱建物が複数個所に分散して配置されていた可能性が指摘できる。今回の調査においては、大型建物となる2号掘立柱建物跡の東側に小型建物の3～5号掘立柱建物跡が配される配置状況が確認できた。

2号掘立柱建物跡は全体の規模が不明であるが、柱間が4間である。南狼沢A遺跡で最も規模が大きい東西棟の掘立柱建物跡と推定される。3～5号掘立柱建物跡は、いずれも2間×2間の側柱建物跡で、その平面形は東西方向に長い長方形である。2号掘立柱建物跡に比べると、柱穴の規模が小さく、柱間距離も狭いなど両者の違いは明瞭である。これらの配置では、2・3・5号掘立柱建物跡は北側柱列を揃えて配置する。3号掘立柱建物跡が副屋的な機能を持つのであろう。さらに4号掘立柱建物跡が東側柱列を5号掘立柱建物跡の西側柱列に揃えて、北側にずれて位置する。

一方、南狼沢A遺跡や生産遺構の周辺に所在する堅穴住居跡は、日常生活を営む集落跡の堅穴住居跡の特徴と比較しても、その規模は一辺が4m前後と小さく、出土遺物も生活痕跡に乏しい。これららの堅穴住居跡は居住施設ではなく、作業場や工房の機能に特化されたものと考えられる。

掘立柱建物跡の年代 掘立柱建物跡の年代を直接的に知ることができる出土遺物はないため、掘立柱建物跡に伴う廐棄坑である2号土坑の出土遺物と、3号掘立柱建物跡と重複する1号堅穴住居跡の出土遺物に年代決定の根拠を求めた。ただし各遺構とも器形が分かる土器が少なく、その器種構成に偏在が見られる点は明らかである。土師器杯はやや丸みを帯びた体部で、内面黒色処理されるものが主体となる。体部下端から底部の再調整は、1号堅穴住居跡の図4-1は回転糸切りで切り離され、再調整が施されない。2号土坑の図14-1・2は回転ヘラケズリと手持ちケズリによる再調整が混在する。福島県浜通り北部において9世紀中葉頃に位置付けられる別所遺跡S X 01の資料でも、底部の再調整は手持ちケズリと回転ヘラケズリが混在していることが確認できる。相馬市荻平遺跡20号住居跡の土師器杯には、底径が小さく、回転糸切りで切り離された後に再調整を施さないものが見られる。また南狼沢A遺跡には器形が椀形をなし、高台が貼り付けられた杯も見られない。10世紀まで時期が下るもののが見られないことから、9世紀後半段階が下限となる。

土師器甕は、整形にロクロが用いられていないものが多いが、小型甕はロクロを用いて整形される。9世紀後半以降の土師器甕から整形にロクロを用いないものが増加する傾向は先学が指摘するところであり、前記した別所遺跡ではロクロを用いて整形される甕が主体となる。別所遺跡に比べて、南狼沢A遺跡の資料にやや後出の要素は認められる。須恵器は破片資料が多いため年代の検討は困難である。灰釉陶器図15-1については、福島県内において9世紀後半には灰釉陶器の出土例が増加する点と灰釉陶器の施釉方法がハケ塗りであることを評価すれば、灰釉陶器の編年研究において、9世紀後半代としても大きく逸脱しないであろう。以上のことから、南狼沢A遺跡の資料の年代について、10世紀までは下らない時期で、概ね9世紀後半代に位置付けられる。

周辺の製鉄関連遺跡 周辺に分布する製鉄関連遺跡を概観すると、標高が高い丘陵の斜面地に生産遺構、標高が低い平坦地に掘立柱建物跡や堅穴住居跡が分布する傾向が看取できる。

南狼沢B遺跡は、南狼沢A遺跡の南側に接する丘陵に所在する。接する北側斜面の上位に木炭窯跡2基が確認され、工区外に廃滓場が確認されている。これらの機能時期については、詳細な年代を特定できる出土遺物が少ないが、9世紀後半代を中心とする。南狼沢A遺跡の掘立柱建物とは、沢を隔てて約100mと近いことからも両遺跡が密接に関連していたことは想像に難くない。

大清水B遺跡は、南狼沢A遺跡の北側0.7kmに位置し、製鉄炉跡3基と木炭窯跡5基が確認されている。製鉄炉跡と木炭窯跡は重複し、継続的に機能していることから、新地町北部における鉄や木炭の生産拠点の一つである。およそその存続期間は9世紀初頭には操業が始められ、9世紀末には操業が停止している。なお小型堅穴住居跡は数棟確認できるが、掘立柱建物跡は見つかっていない。

別所遺跡は大清水B遺跡の北東0.6kmに所在する。小規模な発掘調査であるため、遺跡の全体像は不明である。製鉄に関連する遺構や掘立柱建物跡は確認していないが、溝跡内部から綠釉陶器が1点出土している。共伴する土器の年代から9世紀中葉頃と考えられる。別所遺跡は標高が低く、平坦な段丘上に立地する点、出土遺物に明らかに搬入品である施釉陶器を持つ点など、南狼沢A遺跡と共に通する点も指摘できる。これらの点を積極的に評価すれば、周辺に掘立柱建物跡が存在する可能性があり、大清水B遺跡の鉄生産と密接な関連を持った施設になると推察される。

鈴山遺跡は南狼沢A遺跡から南1.1kmに位置する。標高の高い丘陵の南向き斜面に製鉄炉跡が確認できる。しかし炉跡自体は削平されて、詳細な構造は不明である。製鉄炉跡に近接して堅穴住居跡が1軒確認できる。建て替えの痕跡が認められる小型堅穴住居で、床面上には鍛冶炉の痕跡がある。

大根遺跡は鈴山遺跡の南0.2kmに位置し、丘陵裾の平坦地に堅穴住居跡が認められる。遺存状況が悪いが一辺4m程度の大型堅穴住居跡で、床面上には鍛冶炉の痕跡が認められる。調査区が狭く遺跡の全体像が不明であるが、鈴山遺跡の鉄生産に関連する鍛冶工人が存在する可能性がある。

2. 製鉄関連遺跡における掘立柱建物跡の性格

福島県浜通り地域における製鉄関連遺跡の中で、掘立柱建物跡群が確認された南相馬市の大船迫A遺跡と割田H遺跡の調査例について、立地する地形と掘立柱建物跡の配置などを比較する。

大船迫A遺跡(第3次調査南区) 大船迫A遺跡南区は、複雑に入り組んだ丘陵地に立地する金沢地区製鉄遺跡群の中でも、標高20m前後と低い丘陵で、東西に開析する谷に面して南に向かって緩く傾斜する平坦面に立地する。この丘陵の斜面上位側に木炭窯跡が2基ある他は、平坦地は堅穴住居跡と掘立柱建物跡が分布する。報告によれば、これら堅穴住居跡と掘立柱建物跡は、8世紀中葉から9世紀後葉まで7段階の変遷が示されている。平場南側を建物がない広場とし、8世紀中葉から末葉にかけての時期に掘立柱建物跡と堅穴住居跡が規格的に配置される。9世紀代になると掘立柱建物跡と堅穴住居跡は8世紀代に比べて、平坦面の東側に分布域を移動し、建物の数を減らすだけでなく、その規模も小さくなる。さらに10世紀までは掘立柱建物跡群が継続しない。

8世紀代(第1～第3段階)は、掘立柱建物跡は東西棟で2間×3間の側柱建物と2間×2間の小型側柱建物が認められ、2間×3間の掘立柱建物跡が複数あり、周間に小型掘立柱建物跡1～2棟が配される。9世紀代(第4～第6段階)では、東西棟で2間×3間の側柱建物跡1棟と2間×2間の小型側柱建物跡が2～4棟認められる。9世紀前葉頃には小型掘立柱建物跡だけとなり、分布域も狭い範囲にまとまるところから、掘立柱建物の機能の特化または縮小が背景にあるのであろう。

大船迫A遺跡南区の掘立柱建物跡の性格については、掘立柱建物跡と堅穴住居跡を主体とした丘陵平坦面の集約的な利用、墨書き土器や刻書き土器の文字資料や関東系土器の出土から、製鉄操業管掌者の滞在地とする見解が示されている。

割田H遺跡 割田H遺跡は割田H遺跡群の北端部に位置する。東西に開析する谷に面して、南北に伸びる細い丘陵尾根に立地する。割田H遺跡の掘立柱建物跡群は、細尾根の先端部、標高20～25mの間に分布する。周囲の地形を概観すれば、掘立柱建物跡の構築に併せて、尾根先端部を削平して平坦地を造成しているのであろう。この平坦地は南北45m、東西25mの範囲である。

掘立柱建物跡は2間×3間の側柱建物跡3棟と2間×2間の小型総柱建物跡1棟が確認できる。その配置は、平場北側には東西棟の側柱建物跡が2棟並び、平場の東側に南北棟の側柱建物と小型総柱建物が南北に分布する。平場西側を広場とし、平場上に逆「L」字に建物群が配置されている。

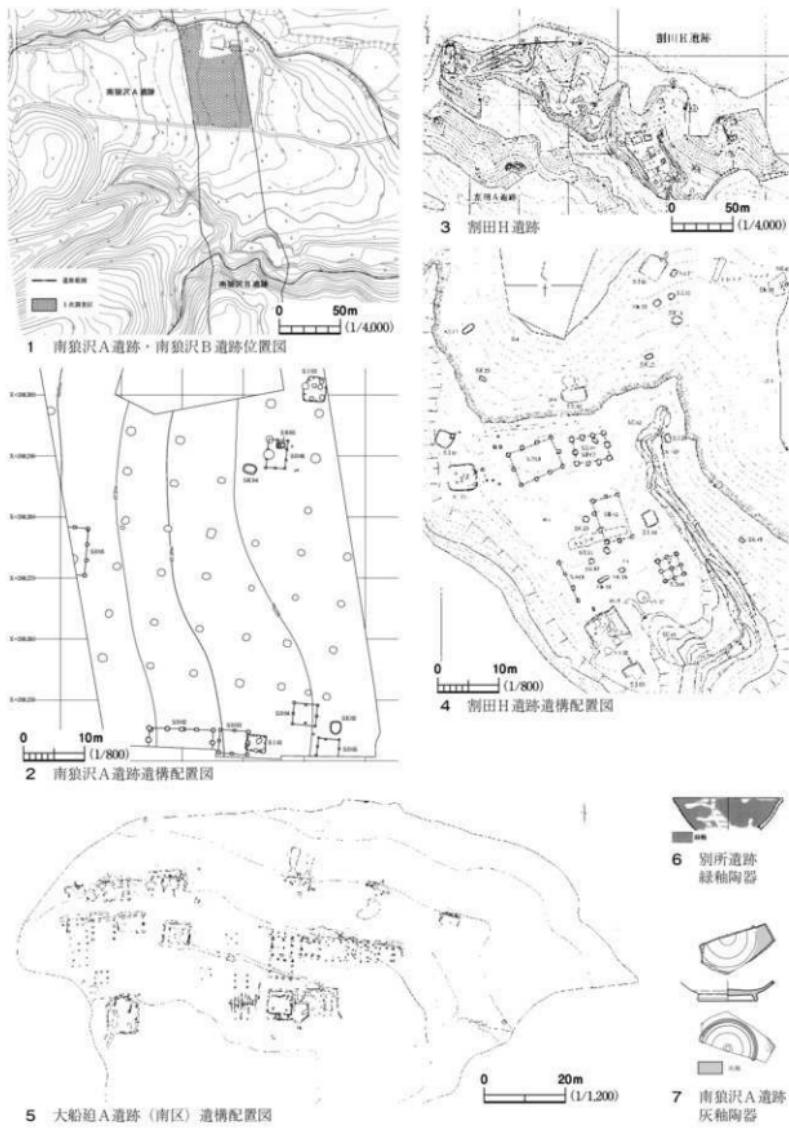
掘立柱建物跡の年代は、周辺の堅穴住居跡や沢地の出土遺物から9世紀中葉から後葉頃としている。掘立柱建物跡の性格については、2間×3間の側柱建物跡と小型総柱建物跡が各1棟セットで配置される。これらの性格を事務管理棟と倉庫とし、製鉄関連物資の在庫管理や工人の出役管理が行なわれ、原材料や生産物の管理を担うとする見解が示されている。

3.まとめ

南狼沢A遺跡の掘立柱建物跡は、大船迫A遺跡や割田H遺跡と立地する地形や配置状況に共通点が見られるが、掘立柱建物跡の性格や機能を特定できるだけの所見が得られていないのも確かである。南狼沢A遺跡は平成25年度に2次調査が予定されており、掘立柱建物跡の配置や鉄や木炭の生産遺構と掘立柱建物跡の関係をより具体的に解明できるであろう。南狼沢A遺跡の性格については、この2次調査の成果を待って改めて検討したい。

(五十嵐)

第2編 南狼沢A遺跡（1次調査）



5 大船道A遺跡（南区）遺構配置図

図18 製鉄遺跡関連の掘立柱建物跡群

第3編 南狼沢B遺跡

遺跡記号 ST-MO・B
所在地 相馬郡新地町谷地小屋字南狼沢
時代・種類 繩文時代の集落跡・平安時代の製鉄跡
調査期間 平成24年8月20日～平成25年2月15日
調査員 佐藤 啓・佐藤悦夫・五十嵐敏裕
荻野美香・由井文菜

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置

南狼沢B遺跡は、相馬郡新地町谷地小屋字南狼沢に所在している。今回の調査区の中心地点は、北緯37度52分11秒、東經140度52分57秒である。南狼沢B遺跡は、新地町の西半部を南北に連なる阿武隈高地の東麓に位置する。深い谷が幾重にも入り組んだ丘陵地の、東に向かって細長く延びる狭い尾根の頂部平坦地に立地する。遺跡全域は南北550m、東西1,100mの範囲で、その面積は84,200m²である。遺跡の標高は54～87mである。

今回の調査原因となった常磐自動車道は、遺跡の中央やや西寄りを南北に貫くように建設される。平成23年度に実施した試掘調査によって、遺構と遺物が確認された。東方に開口する谷を挟んだ南北の尾根平坦部の9,400m²が保存対象となった。ここでは、調査区を南北に隔てる谷を中区、北尾根を北区、南尾根を南区と呼称する。北区は丘陵頂部の平坦部で、北側に下る谷は南狼沢A遺跡に含まれる。頂部は、東に向かって標高を減じ、北東で東方に開口する小規模な谷がさらに派生する。北側は、切り立った急斜面となっており、北東部には削平された痕跡が確認できる。標高は70.0～78.0mを測る。中区は、東方に開口する谷の谷頭にあたっており、西側の調査区外では丘陵部との標高差がなくなっている。標高は68.5～74.5mである。南区は、調査区南側の深い開析谷に面した、丘陵頂部の平坦面から南向き斜面にあたり、比較的広い平坦地となっている。その標高は67.5～75.0mである。開析谷をはさんだ南側に、南狼沢遺跡が隣接している。

調査区の現況は、スギとマツを中心とした山林で、南区北部の平坦面に東西に走る林道が残っていた。

第2節 調査経過

南狼沢B遺跡の調査は平成24年8月20日に開始した。この時期は、調査員1名が南狼沢遺跡の調査と並行して着手した。まず、南狼沢遺跡との境界に走る開析谷に排水管を設置した後、これを埋めて進入路を造成した。次いで、調査区内に多数存在していた伐木と木根の除去と集積作業を行い、これらの作業が終了した9月上旬から表土除去を開始した。表土除去は調査区北部から南方に進め、この際の排土は、当初は南狼沢遺跡の南に接する工区内に仮置きした。南狼沢遺跡の調査終了後は、その調査区内に集積した。その際、南狼沢遺跡の北区を排土置き場に、南区を駐車場およびプレハブ用地に利用した。

9月10日からは、南狼沢遺跡の調査員1名と作業員に、赤柴前遺跡の調査を終えた調査員2名と作業員が合流し、調査員3名・作業員40名の体制で調査を開始した。現地には駐車場が確保で

第3編 南猿沢B遺跡

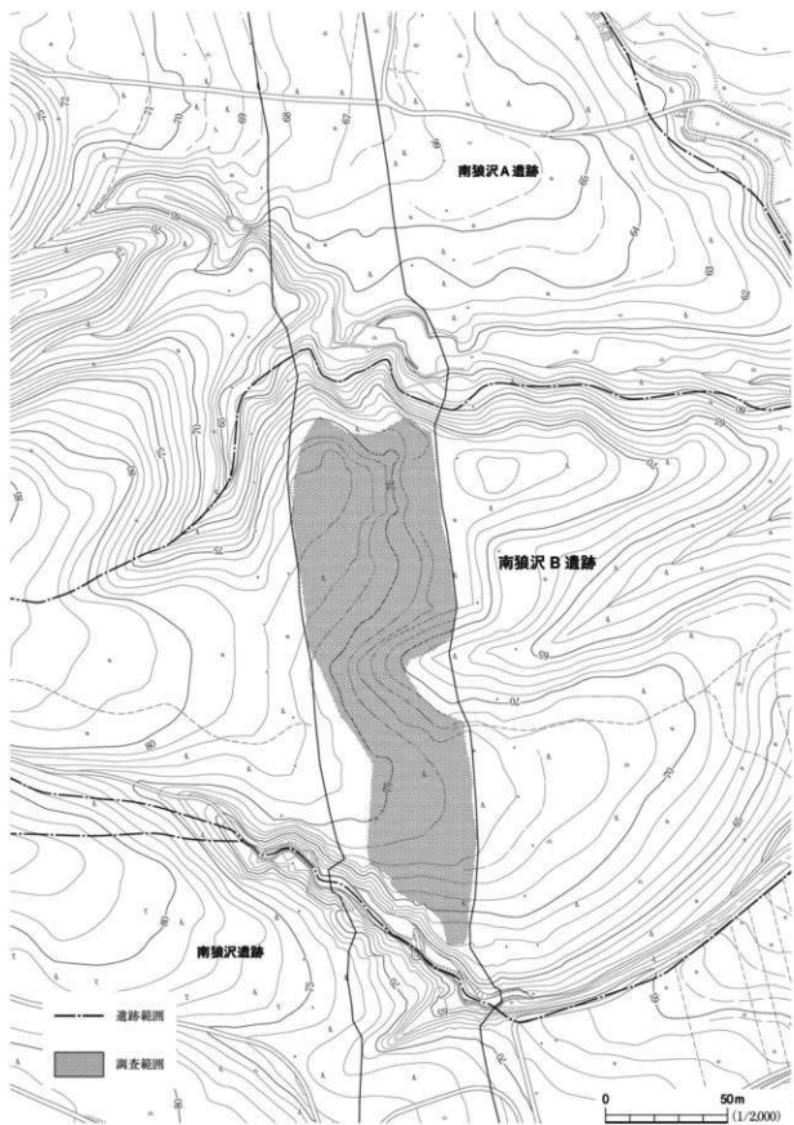


図1 調査区位置図

きなかったことから、赤柴前遺跡から合流した作業員をバス2台で送迎した。送迎バスの発着所は、9月末までは鈴山遺跡の駐車場、10月からは赤柴前遺跡の駐車場をそれぞれ利用した。また、調査開始時には休憩所用地の造成が済んでいなかったことから、休憩所として大形テントを使用していた。休憩所プレハブの設置は、用地造成が終了した10月30日まで待つことになった。

精査は、調査区北部(北区)から開始した。この地区には多くの搅乱坑が存在したが、少数ながら竪穴住居跡や木炭窯跡・土坑・焼土遺構が検出された。9月前半には、旧石器時代の石器が採集され、時期不明ながら多量の碎片が出土するなど、旧石器時代の遺構・遺物が包含されている可能性が高くなってきた。そこで、調査は石器の出土層位を確認しながら進められた。木炭窯跡は、表面では確認できなかったものが検出されるなど、近接した地点から2基確認できた。木炭窯跡の調査は、安全面を考慮して、周辺を重機でオープンカットした後に開始した。また、9月後半には長雨や台風が相次いだこともあって、9月から10月期の調査はかなり手間取ることになった。

11月19日には新田遺跡の作業員約20名が合流し、作業員数は60名となった。新規の作業員は、北区とは谷を挟んで対峙する南区での精査に着手し、11月20日に北区を対象とした第1回目の空中写真撮影を実施した。また、12月3日には調査員1名が合流したことから、調査が進捗した。なお、この頃、遺跡周辺で熊の出没情報があり、また、調査区内でイノシシが目撲された。そのため、通勤時および作業時における安全確保と安全教育に力を割いた。

12月初頭には、調査の主体は調査区中央部の中区に移っていました。12月20日には調査を一旦中断し、年末年始をはさんだ1月8日に再開した。調査再開あたり、鈴山遺跡の調査を終えた調査員1名と作業員7名が合流したことにより、調査員5名体制となり、2月に4名体制になるまで続いた。

調査は順調に進むと思われたが、1月後半から2月上旬にかけての3度の積雪により、当初予定の変更を余儀なくされた。なかでも1月後半の降雪は、積雪量が40cmと20cmという、相双地区には稀な豪雪であり、調査は著しく遅れた。この間は、中区の除雪を優先させて調査を継続したが、冷温が続き1月末まで調査区内には残雪があった。このような状況の中で、除雪が一段落した1月31日にラジコンヘリによる空中写真撮影を、翌2月1日にはセスナ機による高高度の空中写真撮影を行った。翌週に再び積雪があったが、調査に支障をきたすものではなかったため、調査と並行して撤収作業に着手した。2月15日に器材を撤収して、現地での作業を終了し、赤柴前遺跡の駐車場も撤去した。

賃借物件は2月19日に返却し、2月26日に引き渡しを行って、現地でのすべての作業を終了した。

(佐藤啓)

第2章 調査成績

第1節 遺構の分布と基本土層

1. 遺構・遺物の分布状況（図2、写真4・5）

南狼沢B遺跡は、平成23年度の試掘調査によって確認された遺跡（福島県教育委員会2012）で、南北に地形を隔てる沢を挟んで、北に南狼沢A遺跡、南に南狼沢遺跡と隣接している。調査区は、南北約220m、東西約75mの南北に長い範囲を呈し、調査対象面積は9,400m²を測る。地形的には、中央の谷部とこれを挟んだ南北の丘陵部の3地区からなり、ここでは北から「北区」「中区」「南区」と呼称する。グリッドでいえば、北区が1～9グリッド列、中区が10～14グリッド列、南区が15～23グリッド列に相当する。

検出された遺構は、竪穴住居跡1軒・木炭窯跡2基・土坑16基・採掘坑1基を数える。なかでも北区からは竪穴住居跡・木炭窯跡・採掘坑のほか土坑12基が分布するなど、遺構の多くはこの地区から検出されている。立地的には西部の丘陵平坦面に竪穴住居跡や土坑が、北東部の斜面に木炭窯跡と採掘坑などが分布している。これららの遺構の年代は、古代が主体を占め、一部が縄文時代に属するとみられる。中区からは土坑3基が検出された。2基が落し穴、1基が貯蔵穴とみられ、いずれも縄文時代の所産と推定している。このほか、小規模な遺物包含層が形成されていたが、遺物量は少ない。南区では、比較的広い平坦面が形成されているにもかかわらず、土坑1基が分布していたのみである。以上のように、南狼沢B遺跡は北区を中心に遺跡が形成されていることが分かる。

遺物は、縄文土器165点・土師器30点・石器1,716点・鉄製品1点など平箱に換算して7箱ほど出土した。南狼沢B遺跡で最も古い遺物は、北区北東端から発見された彫器で、後期旧石器時代に属する石器である。縄文時代の遺物のうち、縄文土器は、早期中葉をはじめ早中期末葉・前期前葉・中期後葉～末葉・後期前葉・晚期前半など各時期にわたるが、出土量は少ない。1号住居跡からは炉跡埋設土器を含む2個体が出土している。土師器も出土量は少ない。土師器は北区と中区に分布しており、7号土坑から廃棄された状態で土師器の大形破片2個体分などが出土した。

これに対し、石器は総出土点数の90%を占め、なかでも剥片と碎片の出土量が多い。これらは、旧石器時代と縄文時代の資料が混在している可能性があるが、層位的には縄文土器と同じ層位から出土している。器種判別が可能な石器として、石鏃の出土数が比較的多い。これらの中には、未成品や、実用品とは考えにくい例も多数みられる。

2. 基本土層（図2・図3、写真6）

土層の観察は4地点で記録した（図2・3）。ここでは、堆積状況が良好だった中区と南区の土層を基本土層として説明し、地点的な色調や土質についてはその都度記載していくこととする。

L Iは、現表土の褐色粘質土である。腐食度合で若干の色調の違いが指摘できるが、細分はしていない。調査区全域に20～30cm堆積している。

L IIは、南区では暗褐色を呈する粘質土で、L IIIに比べて明るい色調である。これに対し、北区では色調が淡く、むしろ褐色に近い。丘陵尾根頂部における同色のL IVとの判別は、本層はL IVよりもやや砂質で、しまりや粘性が弱い点で区別される。本層は遺物を含み、特に北区では本層から大量の石器碎片が出土している。北区では5～10cm、南区では約20cmの層厚がある。

L IIIは暗褐色を呈する粘質土で、少量の遺物を含む。北区では、北半の丘陵尾根頂部には堆積しておらず、中区との境界付近および北東部の、いずれも谷の周辺でのみ確認されている。それらの土層もやはり淡い色調を呈している。一方、中区では黒味が強く黒褐色を呈していたため、L III aと細分して土層番号を付した。層厚は、南区では約20cmあり、中区では20～60cmと厚く堆積している。

L IVは褐色粘質土のいわゆる「ローム層」で、無遺物層である。本遺跡の基底面で、遺構の多くはL IV上面から検出されている。中区では、本層上位に暗い色調を呈する土層が堆積しており、土質が共通していたのでL IV aと命名している。

L Vは褐色砂質土で、北区北半と南区南端の斜面部や深掘り箇所で確認されている。また、図2・3には図示していないが、L V以下の土層についても説明しておく。L VIは、赤褐色砂質土で、丘陵の表層である山下層上面の赤色風化殻（真鍋1997）と考えられる。一見焼土と見間違うほどの色調を呈している。層厚は約50cmある。さらにその下位には、灰色砂層のL VIIが確認されている。厚さは1m以上あり、色調やしまりの強弱による細分が可能である。これについては、半固結の砂岩・シルト岩層である山下層と考えられる。木炭窯跡や採掘坑・7号土坑などが本層を掘り込んで底面としている。このほか、北区北東端のL VII上部でラミナ状の堆積状況を示す土層が確認されている。

以上のように、本遺跡の土層は概ね類似した土層が堆積していた。色調の相違などは、地形による腐食度合いに起因すると考えられる。以後の記述にあたり、上記の土層番号を使用するが、地区により若干の土質の違いがある。

（佐藤啓）

第3編 南猿沢B遺跡

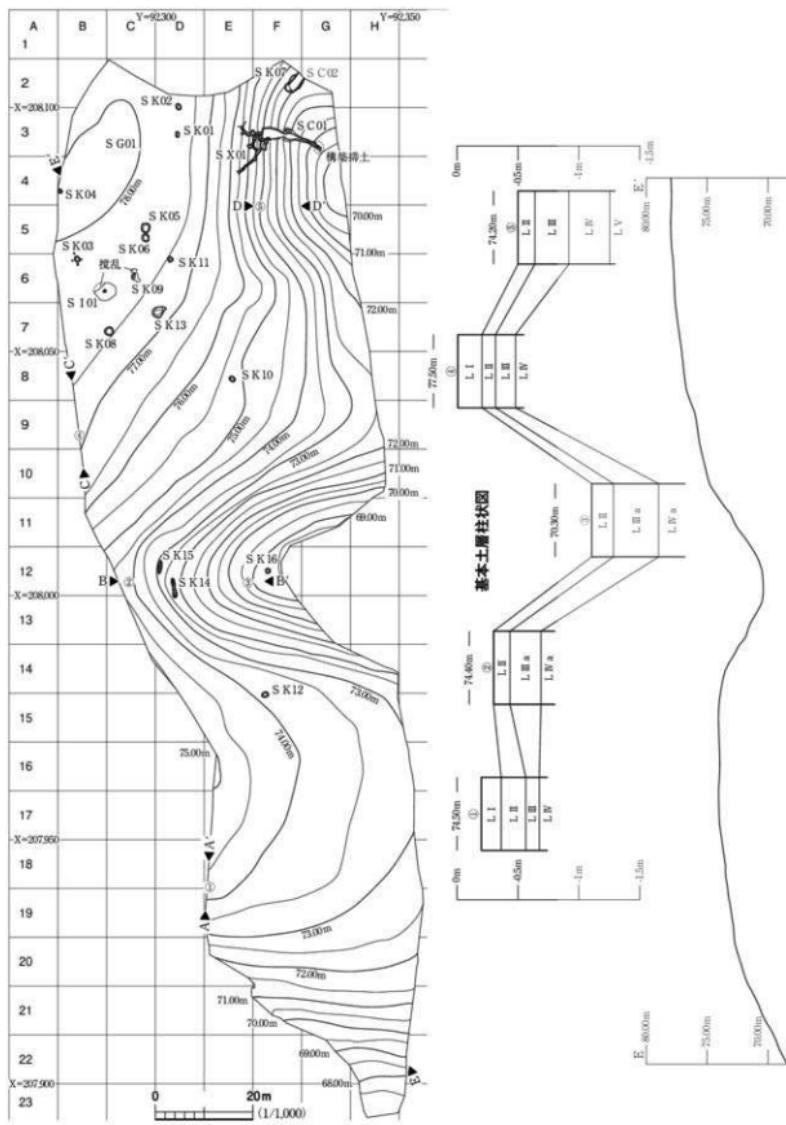


図2 遺構配置図

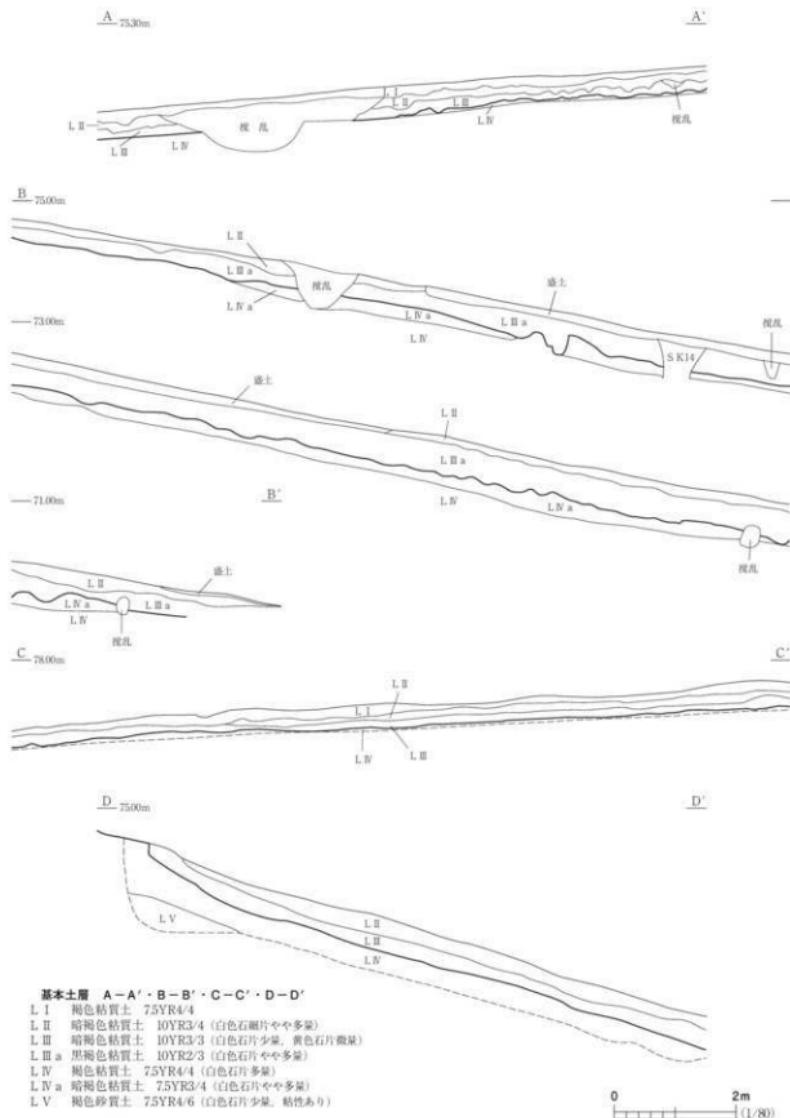


図3 基本土層図

第2節 壺穴住居跡

1号住居跡 S I 01

遺構 (図4・5、写真7・8)

本遺構は、北区中央西側のB6・C6グリッドに位置する壺穴住居跡である。丘陵尾根頂部の平坦面に立地する。周辺の地形はほぼ平坦で、南東方向にわずかに傾斜している。遺構検出面はLIV上面である。重複する遺構はないが、北西部が倒木痕で壊されている。

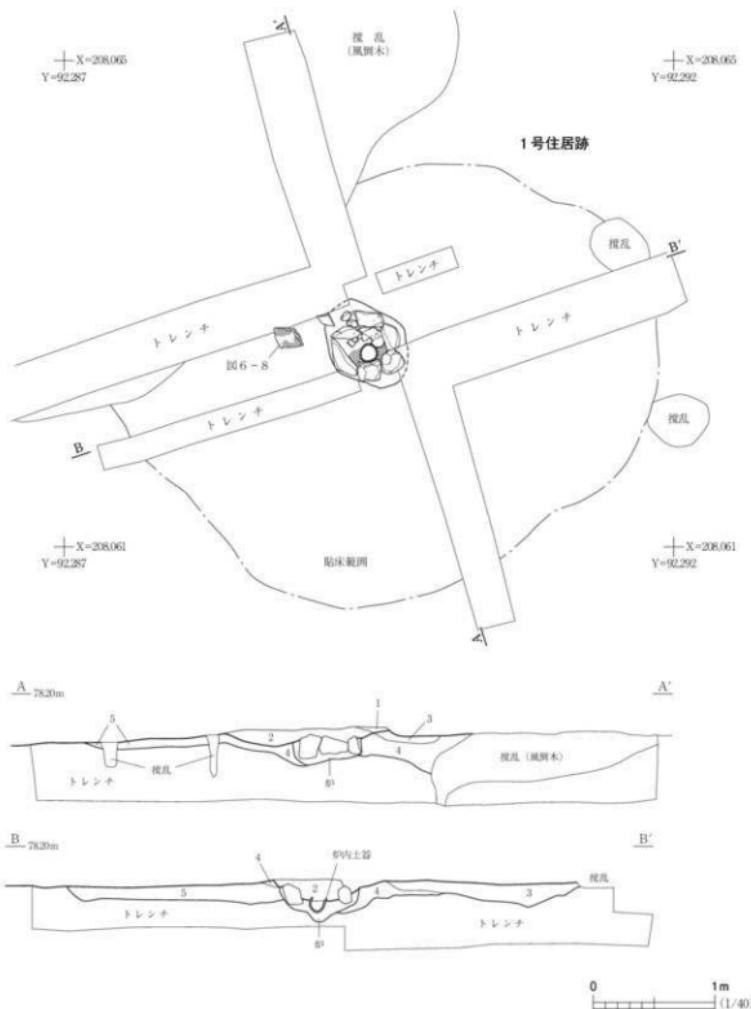
本遺構は、検出段階で中央に焼土、周辺にLII類似のやや暗い色調の堆積土が分布しており、焼土遺構とその掘形と考えられた。そこで平面的な記録を作成した後に、断ち割り調査を行ったところ、焼土が粒状をなしており廃棄されたものであることが判明したことと、その下部から炉跡が検出されたことで、住居跡と認定した。

遺構内堆積土は5層に細分され、ℓ1・3・5などLIVと類似する色調の土層もあったため、底面の認定に難儀した。混入物が少ないℓ1が自然流入土、焼土粒を主体とし、炭化物が混じるℓ2が人為堆積と判断される。ℓ2はちょうど炉跡の上位に分布していた。ℓ3～5は、その下部が水平にならず、炉跡がℓ4・5を掘り込んで構築されていることから、掘形埋土と理解できる。したがって、ℓ3～5が本住居跡の貼床構築土であり、廃絶後の堆積土は、炉跡上部のℓ1・2のみと判断している。

本遺構は、上記したように、検出段階ですでに床面が露出している状態であった。しかも、遺構の北西部が壊されていたため、遺構の詳細は不明な点が多い。残存部から推定すれば、本遺構の平面形は東西方向にやや長い楕円形とみられ、規模は東西4.4m、南北4.0mと推定される。床面は貼床で、LIVを10～30cm掘り込んだ掘形にℓ3～5を充填して構築されている。周壁は、削平されて残存していない。

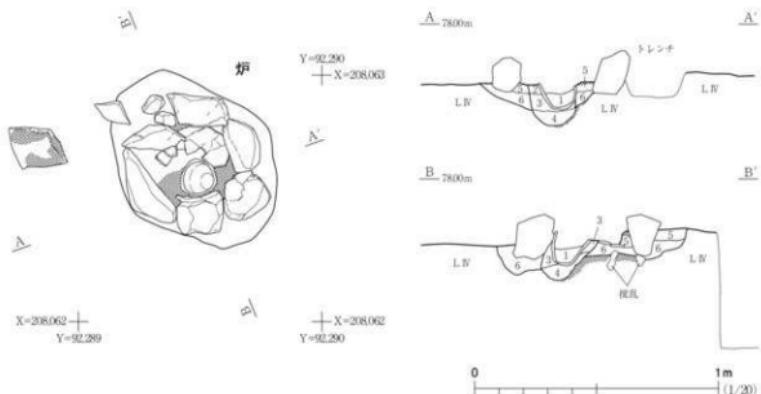
床面からは炉跡が検出された。柱穴は確認されていない。炉跡は中央から北に寄って位置している。土器埋設石開炉で、南辺に接して土器が埋設されている。石開部の形状は方形に近く、内側での大きさは33×31cmを測る。用いられる石は、南北辺で拳よりやや大きいもの2～3個、東西辺で長めのもの1個で、それぞれ側辺が天に向くよう据えられている。炉跡の北西部には形状のゆがんでいる箇所があり、周辺に被熱した石が散乱していたことから、それらがこの部分に用いられていた可能性も考えられる。

埋設土器は南辺に接して据えられている。小形の深鉢の体部下半を用い、開口部が北西を向くよう傾けている。炉跡断面(図5B-B')をみると、埋設部掘形も同様に傾いていることから、土器は意図的に斜位に据えられていることが分かる。埋設土器内には、焼土や炭化物を多量に含む暗褐色土が堆積していた。ただし、火床面とみられる焼土面は確認されていない。

**1号住居跡堆積土**

- | | |
|--------------------------------------|----------------------------------|
| 1 棕色粘質土 7.5YR4/3 (炭化物・焼土粒少量、しまりややあり) | 4 にぶい赤褐色土 5YR4/4 (焼土塊・焼土粒、炭化物多量) |
| 2 赤褐色土 2.5YR4/6 (焼土塊・粒多量、炭化物やや多量) | 5 褐色土 7.5YR4/4 (炭化物・焼土粒やや多量) |
| 3 棕色土 7.5YR4/4 (炭化物・焼土粒少量) | |

図4 1号住居跡



炉堆積土

- 1 茶褐色土: 75YR3/3 (炭化物・焼土塊・粒多量)
- 2 茶褐色土: 75YR4/6 (炭化物・焼土塊・粒多量)
- 3 赤褐色土: 5YR4/6 (炭化物・焼土塊・粒多量)

- 4 暗褐色土: 5YR3/4 (炭化物・焼土塊・粒・LN塊多量)
- 5 茶褐色土: 75YR4/6 (焼土塊・粒多量・炭化物少量・LN塊微量)
- 6 茶褐色土: 75YR4/6 (炭化物少量・焼土塊・粒・LN塊微量)

図5 1号住居跡跡

炉跡内からは2面の焼土面が確認され、炉跡の使用が2時期にわたることが判明した。新段階は埋設土器と炉 ℓ 2・5上面の焼土面である。炉 ℓ 5が分布しない炉跡北東部では炉 ℓ 6上面に土器片が敷かれており、この土器片が被熱により器面がもろくなっていた。搔き出しなどで炉 ℓ 5が失われた箇所では、これらの土器片が火床面であったことが分かる。古段階は炉 ℓ 6を除去したLIVでの焼土面である。主に炉跡北半部が最厚3cmで焼土化していた。部分的に炉 ℓ 4下位にも焼土面がみられ、古段階の埋設土器の痕跡の可能性がある。

遺物 (図6、写真16~18)

遺物は縄文土器片22点・石器84点が出土し、層位的には ℓ 4出土資料が主体を占める。本遺構に伴う遺物としては、炉跡から出土した縄文土器と石器が挙げられる。

図6-1は炉跡の埋設土器で、底部から体部下半が遺存する。底部は被熱と土圧によってもろくなっている、碎片で取り上げたため接合できなかった。底径6cmの小形の深鉢で、体部上半で緩やかにくびれて口縁部にいたる器形と推察される。遺存部には断面三角形の隆帯による文様帶区画線がめぐるよう、これ以下は地文の縄文が施されている。大木10式の新しい段階に比定されようか。同図2~4は炉跡北部の炉 ℓ 6に内面を天に向かって状態で出土している。同一個体で、器形は緩やかなキャリバー形とみられる。文様は、縄文地に沈線で区画された無文部で施文されている。いずれも曲線的なモチーフが観察されており、「J」字状あるいは抱卵形と推定され、3の文様から上下2段に展開することが分かる。沈線は比較的浅く施文されており、3のように途切れている箇所もみられる。4のモチーフ末端は比較的鋭角になっている。

図6-5~8は石器を図示した。図6-5~7は ℓ 5から出土した剥片石器で、5が石鏃、6が

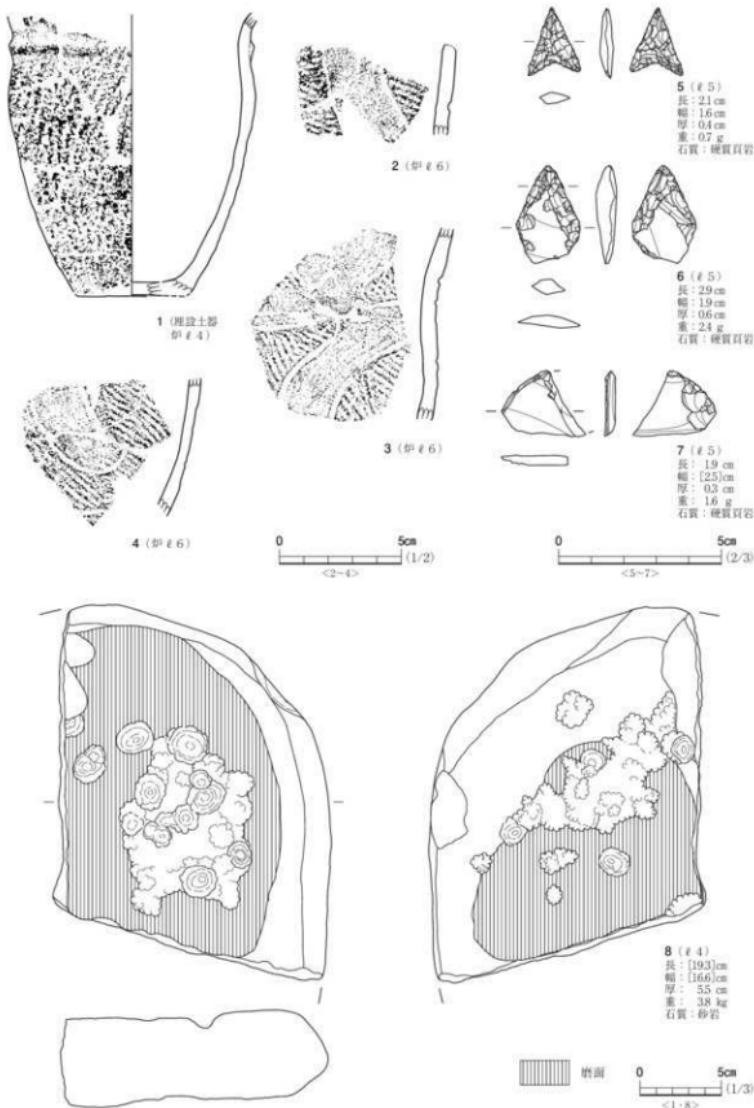


図6 1号住居跡出土遺物

石錐未成品、7が剝片である。5は比較的整った形状の凹基錐で、側辺や基部が直線的に成形されている。同図6は素材の打面側を尖頭部として調整を加えたが、厚みを除去しきれず製作を断念したものであろう。石錐とも考えられたが、使用痕などは観察されない。図6-8は炉跡から20cmほど西方の床面から出土した石皿で、おおむね1/4が遺存している。表裏に磨痕と敲打痕が観察され、頻繁な利用が想定される。

まとめ

本遺構は、南猿沢B遺跡から検出された唯一の住居跡である。遺存状態が悪く、不明な点もあるが、比較的小形の土器埋設石圓炉が付属することが判明した。土器埋設石圓炉は、これまで縄文時代中期末葉に存在することが知られており、出土した土器もこれを逸脱するものではない。したがって、本遺構の所属年代は、縄文時代中期末葉と考えられる。(佐藤悦)

第3節 木炭窯跡

木炭窯跡は2基検出された。いずれも北区北東部の谷に存在している。これらは主軸が異なっており、作業場を別々の谷に構築していた可能性が高い。

1号木炭窯跡 S C 01

遺構 (図7・8、写真9・10)

本遺構は、北区北東部のF3・G3グリッドに位置し、地形的には東に開口する谷の傾斜面に立地している地下式木炭窯跡である。遺構は、LIV上面で確認されており、東部は作業場ないし通路に堆積した木炭範囲の、西方は焼成室天井崩落後の窪地に堆積した黄褐色土の広がりとして検出した。調査は木炭窯の天井や壁面の崩落を防止するため、重機によりオープンカットすることで遺構を検出した。

本遺構は1号採掘坑と重複しており、これより古いことが判明している。遺構内堆積土は、通路部の構築排土も含めると33層に分層される(図8)が、ℓ1~18は上述した1号採掘坑機能時の堆積土と考えられる。したがって、本遺構の土層としては、ℓ19以下が該当することになる。

ℓ19~26は焼成室に堆積した土層である。このうちℓ19・20はLV塊が多く含まれており、一部青灰色被熱化(還元化)や赤褐色被熱化(酸化)した部分もみられるので、天井部の崩落に由来する土層と考えられる。これらの土層は、焼成室でも奥壁側に堆積している。一方、焼成室から焚口部・作業場前庭部にかけてはℓ21・22が厚く堆積する。これらには、炭化物が比較的多く含まれるものの、基本的にはLVを主体としていることから、周辺地山の流入土と考えている。

ℓ23は木炭層で、焚口部付近で確認され、奥壁側では同じく木炭層のℓ26と区別できなくなる。ℓ23の下位には、LVを主体とするℓ24・25が堆積しており、ℓ25の上面に赤褐色被熱面が確認できることから、これらは焚口部付近の天井崩落土と考えられる。ちょうどℓ24・25の堆積範囲

から奥壁側には天井部が残存していたことから、この残存部から東側が天井の崩落した際の土層と判断される。 $\ell 26$ も木炭層で、作業場から通路部にかけて確認された。このように本遺構の操業面は、 $\ell 23$ と $\ell 26$ の2面を確認した。

$\ell 27 \sim 31$ は、作業場および通路部に堆積している土層である。特に $\ell 28 \cdot 29$ には多量の炭化物が含まれていることから、本遺構の操業に伴う土層と判断される。 $\ell 32 \cdot 33$ は木炭窯掘削時の堆土であろう。これらを掘り込んで通路部が設けられている。

本遺構は、焼成室・焚口部・作業場前庭部・通路部からなる木炭窯跡で、全長は12.9mである。焼成室は、平面形が長方形に近く、最大幅を中央からやや奥壁側にもち、焚口に向かってすばまっている。主軸はN 85°Wを指す。長さが4.6mあり、最大幅は2.40m、奥壁の幅は2.14mを測り、長さに対して幅が広い特徴をもつ。底面はおむね10°の傾斜で上がってく。焚口から奥壁寄りの1.10～3.15mの範囲に天井が遺存しており、高さは115～88cmであった。壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、わずかに丸みをもって天井にいたる。

焼成室北壁の奥壁から焚口寄りに1.6mの地点には煙道が設けられていた。調査中に側壁とともに

に崩落し、正確な記録は行えなかったが、直径は20cmあつた。煙道構築に当たり、側壁側から横坑、天井側から縦坑をそれぞれ掘り込んでいるため、両者の合流箇所では縦坑より北側が大きく抉られていた。焼成室の天井部や壁面には熱変化の痕跡が明瞭に残されていた。表面から、青灰色→黄褐色→赤褐色の順で熱変化しており、底面付近では青灰色被熱面と赤褐色被熱面の間に黒色の炭素吸着面が確認されている。

焚口部は幅80cmを測り、焼成室に対してすばまっている。側壁は硬くしまっており、熱変化も著しい。作業場は、焚口側が広く丸みをもち、通路部側で狭くなるた

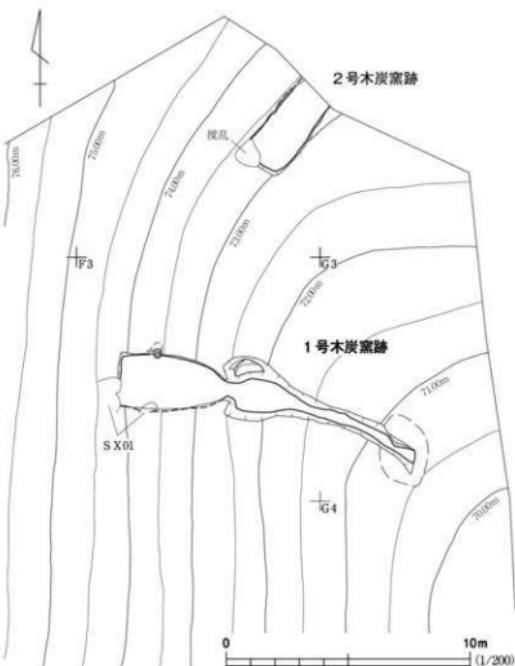


図7 1・2号木炭窯跡

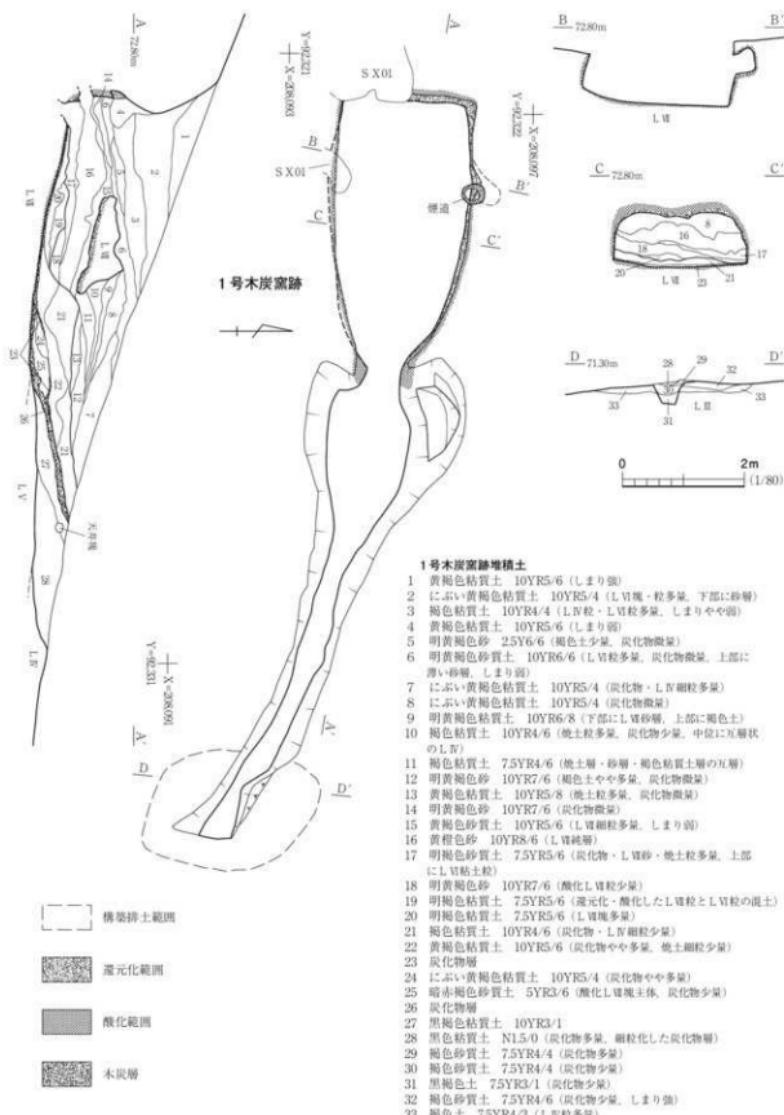


図8 1号木炭窯跡

め、「イチジク」形を呈している。通路部との境界が明瞭でないが、長さ2.7m、幅2.6mある。また、作業場北側にはテラス状に整えられた平坦面が存在していた。通路部は下端で幅30~50cmで南東方向に下がっていく。作業場端部から、東端の削平された地点までの長さは、58mを測る。炭化物以外の出土遺物はない。

まとめ

本遺構は、地下式の木炭窯跡である。焼成室から通路部まで確認されるなど遺存状態は良く、一部天井も残存していた。形態的には、長さに比して幅が広いため、やや寸足らずな形状をしている特徴をもつ。木炭層は2面確認された。

なお、出土した炭化物の年代測定を実施しており、概ね古代の数値が提示されている。よって、本遺構は古代の所産と考えられる。

(五十嵐)

2号木炭窯跡 SC02

遺構 (図7・9、写真11)

本遺構は、北区北東端のF2・G2グリッドに位置し、地形的には北向き斜面に形成されている。7号土坑の精査時に、被熱により変色した地山層と焼土粒を多量に含む土層が確認されたことから、土坑より古い木炭窯跡と想定された。そこで、北端部では重機によりオープンカットして遺構を確認した。この際、遺構の北側が急崖に面しており、土砂の崩落や作業員の転落等の恐れがあつたことから、北端部では重機による掘削を行わなかった。上記したように7号土坑と重複し、これより古いことが判明している。また、遺構の西半が倒木痕で壊されている。

遺構内堆積土は9層に細分した。これらは、木炭層であるℓ9を除き、いずれも天井の崩落に関係する土層と考えられる。なかでもℓ8は青灰色あるいは赤褐色に変色したLⅦ塊を主体とした土層であり、明らかな天井崩落土である。位置的に奥壁側の天井が崩落したと推測される。ℓ1~7はLⅥやLⅦを主体とする土層群で、これに崩落土が含まれている。天井の崩落後に奥壁側から流入したものと考えられる。

本遺構は、焼成室のみが調査された木炭窯跡で、焚口部や作業場は削平により失われている。また、遺構の南東部が7号土坑に、遺構の南西部が倒木痕に、それぞれ大きく壊されている。

調査の結果、焼成室は長方形を呈しており、奥壁側に向かって幅が広くなっている。焼成室の長さは3.82m、最大幅は1.91mである。主軸はN50°Wを指し、隣接する1号木炭窯跡と大きく異なる。底面はLⅦで、奥壁に向かい10~18°と傾斜している。その傾斜は奥壁側が急で、焚口側は相対的に緩やかである。奥壁から2.8mの地点からは天井が残存しており、天井高は84~100cmを測る。周壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、天井付近ではやや丸みをもっている。天井および壁面には16~7cmの厚みで熱変化の痕跡が残されていた。

本遺構からは、炭化物以外の遺物は出土しなかった。

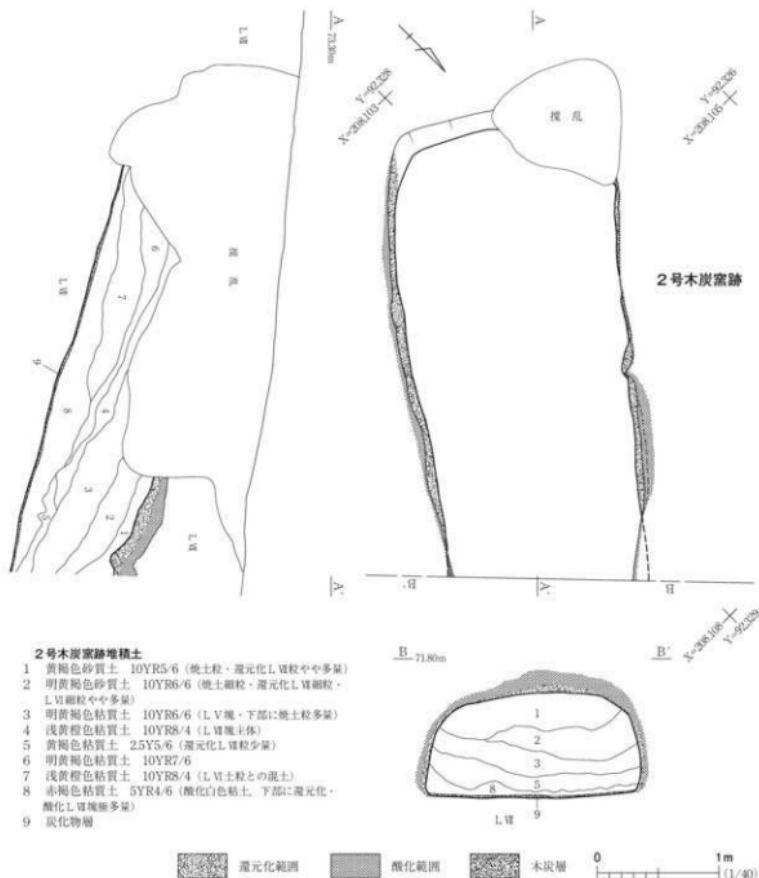


図9 2号木炭窯跡

まとめ

本遺構は、地下式の木炭窯跡である。焼成室の一部が調査されたのみであり、詳細は不明な点が多い。木炭層は1面しか確認されなかったことから、短期間のうちに操業を停止したのであろう。遺構の年代は、7号土坑との重複関係から9世紀末葉頃よりは古く、出土した炭化物の年代測定でもおおむね古代の年代幅に収まっていることから、古代の範疇と考えられる。

(五十嵐)

第4節 土 坑

1号土坑 SK 01 (図10, 写真12)

本遺構は、調査区北西部のD 3 グリッドに位置する。東向きの緩斜面に立地する。検出面はL IVで、にぶい黄褐色土の堆積範囲として確認した。

平面形は、南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は、長軸103cm、短軸60cmを測り。検出面からの深さは最大14cmである。周壁の立ち上がりは比較的緩やかで、西壁中央部上端は焼土化する。堆積土は3層に分けられ。ℓ 1 が廃絶後の流入土で、ℓ 2・3 は炭化物を多量に含む使用時の残渣と考えられる。遺物は出土していない。

本遺構は堆積土および壁面焼土化の状況から木炭焼成土坑と考えられる。ℓ 2 出土の炭化物を分析した結果、樹種がイヌシテ節であり、放射性炭素年代が $1,240 \pm 30$ yrBPである。よって古代に属するものと考えられる。

(由 井)

2号土坑 SK 02 (図10, 写真12)

本遺構は、調査区北西部のD 2・3 グリッドに位置する。東向きの緩斜面に立地する。検出面はL IVで炭化物の集積範囲として確認した。

平面形は、北西-南東方向に長い楕円形である。規模は長径128cm、短径92cmである。周壁はほぼ遺存しない。堆積土は薄く、炭化物を多量含む黒褐色土が4cm程度堆積するのみである。遺物は、石器2点が出土しているが、微細な剥片のため図示していない。

本遺構は、堆積土から、遺存状態の悪い木炭焼成土坑と考えられる。時期については不明である。なお、出土した炭化物の樹種はクリである。

(由 井)

3号土坑 SK 03 (図10, 写真12)

本遺構は、調査区北西部のB 6 グリッドの北西付近に位置する。周囲の地形は、南東から北西へ緩やかに上がる斜面上に立地している。検出面はL IV上面である。土坑を中心として4個のピットが平行四辺形に配置されている。

土坑は、開口部における平面形は楕円形基調を呈し、長軸136cm、短軸104cmを測る。南東から北西方向に長軸をとり、長軸の方位はN 25° Wを示す。周壁の遺存高は、最大で40cmである。周壁は、底面から65~85°の急角度で立ち上がるが、上部は後世の削平のため不明である。堆積土は、L IV類似の褐色土を基調とした単層で、多量の炭化物と焼土塊・粒を含む。また周辺には見られない拳大の礫が多量に混入していることからも、明らかに人為的な堆積土と考えられる。遺物は、石器の製作過程で生じる碎片が11点出土している。

土坑の周囲にあるピットは、長軸および短軸に沿って配されている。P 1 - P 2 - P 3 - P 4 - P 1 の芯々間距離はそれぞれ184cm, 120cm, 186cm, 138cmである。柱穴の規模は、18~24cm。検出面からの深さは、P 1 は20cmと浅いものの、他は35~40cmと均一していた。P 1 以外は、底面はLVを掘り込んでいる。柱穴の埋土は、すべてLIV類似の褐色土を基調とした単層で、炭化物と焼土粒が混入する。

3号土坑は、人為的に躰や石器の碎片を投棄した土坑で、墓坑の可能性がある。時代は縄文時代と考えられるが、遺構の所属時期を決定できる遺物が出土していない。ピットは土坑と同様の堆積土で埋没しており同時期のものと思われるが、その機能を明らかにするまでには至らなかった。

(佐藤悦)

4号土坑 SK 04 (図10, 写真12)

本遺構は、調査区北西部のB 4 グリッドの調査区西壁際に位置する。検出面はL IV上面である。

平面形は梢円形で、規模は長軸70cm、短軸50cmを測る。長軸の方位はN 46° Wを示す。遺存状態は悪く、周壁の遺存高は最大で10cmである。壁面は底面から緩やかに立ち上がる。

堆積土は、炭化物を多量に含む黒色土の単層で、底面を覆っていた。堆積土の特徴から、本遺構は木炭焼成土坑であり、底面のみ遺存したものと考えられる。

(佐藤悦)

5号土坑 SK 05 (図11・16, 写真12・17・18)

本遺構は、北区北西部のC 5 グリッドに位置し、地形的には丘陵平坦面に立地している。遺構検出面はL IVである。重複する遺構はないが、すぐ南に6号土坑が隣接している。

遺構内堆積土は大きく3層に分けられる。いずれもL IVに類似した褐色土が堆積しており、土層の特徴や混入物から人為堆積と考えられる。 ℓ 1 はやや明るい色調の土層である。 ℓ 1 aは混入物が比較的少なく、 ℓ 1 bには拳大から人頭大の石が多量含まれていた。 ℓ 2 は暗い色調の褐色土層で、その上面は水平に堆積している。 ℓ 3 は、しまりが強く ℓ 2 とは明瞭に区別されることから、土坑掘形に本層を貼り付けその上面を底面としたと考えている。 ℓ 3 上面に置いたような石も出土している。石は ℓ 3 中にも含まれており、掘形底面に接していたものや、底面からやや浮いて出土したものとの双方が確認されている。

本遺構の平面形は、円形を基調として南側がやや張り出す形状を呈する。大きさは、南北204cm、東西178cm、検出面から掘形底面までの深さ41cmを測る。底面は、掘形底面から約10cmの高さまで ℓ 3 を貼ったその上面を利用しており、ほぼ平坦である。周壁は急角度で立ち上がる。

遺物は、縄文土器片5点・石器316点が出土し、土器片に対して石器の数量が圧倒している。層位的には ℓ 1・2中からの出土が97%を占め、 ℓ 3 からもわずかに出土している。出土遺物の大半を占めるのは石器碎片で、これに石礫や剥片が少量混じる状況を呈していた。また、石皿など重量のある石器は ℓ 3 から出土しており、掘形底面に置いた状態の例もあった。このうち石器9点を

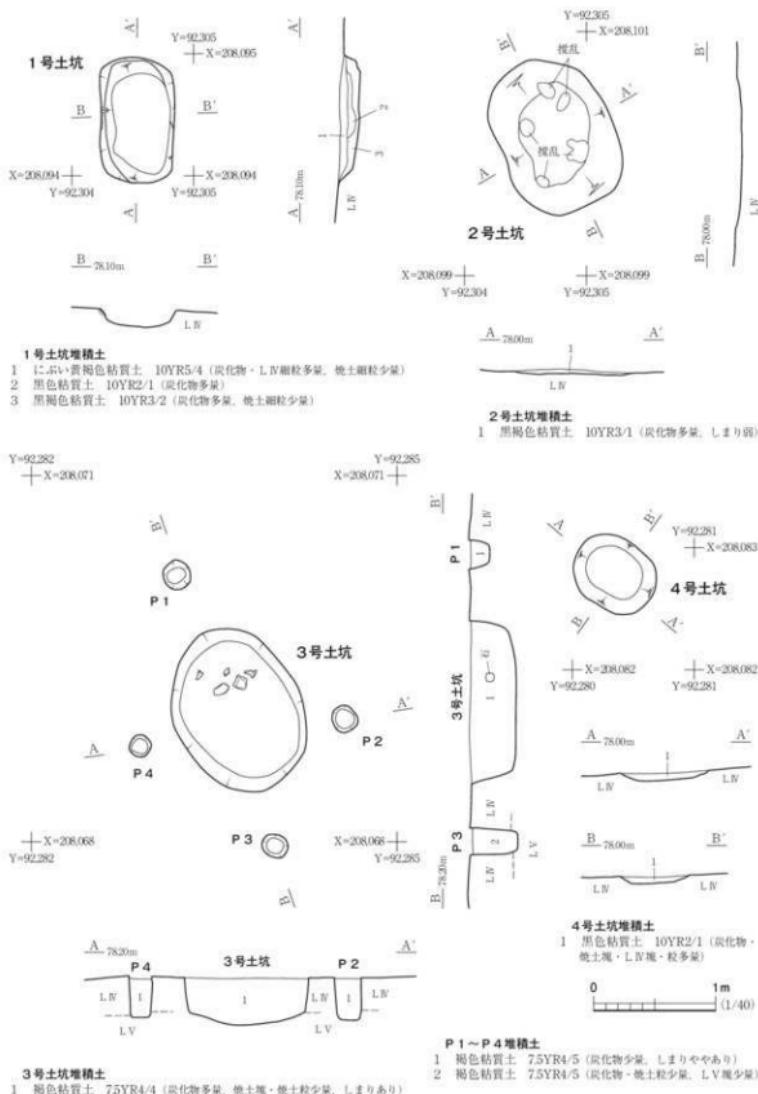


図10 1～4号土坑

第3編 南猿沢B遺跡

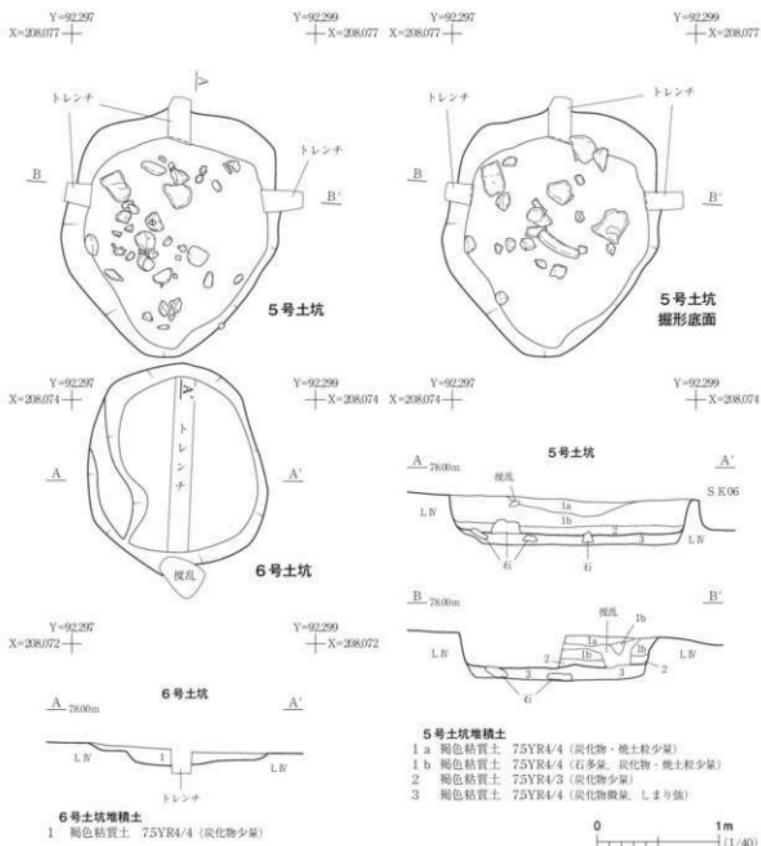


図11 5・6号土坑

図16に示した。

図16-3～9は石鉋とその未成品である。完成品が少なく、欠損品(4・6・7)や未成品(8・9)が多い。3は、形状は整っているものの、微細な調整が少なく、側辺が直線でない。未成品に含むべき資料かもしれない。4は比較的整った形状をなすが、やはり側辺に微細調整がみられない。また、脚部を欠損している。5は尖頭部を作出し、一応の形状はなしているものの、打面やバルブを除去するにはいたっていない。6・7は製作途中に削れた資料である。調整は比較的大きなもので、器面の厚みも除去されていない。8・9は明らかな未成品である。9は正面左基部を欠損する。しかし、この欠損面を切る剥離が確認できるので、石器製作を続けていたことが分かる。以上のように

に、石錐は稚拙な技術で製作されており、いずれも実用品とは考えにくい。

図16-12・13は石皿である。12は掘形底面からわずかに浮いて ℓ 3から出土している。厚みのない丸い川原石の両面に磨痕が観察され、表面には凹みもみられる。13は、遺構北西から、掘形底面に置かれた状態で出土した。凝灰質砂岩製の石皿で、厚みのある平滑な川原石を素材としている。

本遺構は、 ℓ 3を貼って底面とした円形土坑で、人為的に埋め戻されている。多数の石器が出土しており、なかには意図的に置かれたような遺物もみられた。したがって本遺構は、単なる廃棄土坑ではなく、特殊な性格が想定される。遺構の年代は、出土した石錐の形態から、縄文時代するのが妥当と考えられる。
(佐藤啓)

6号土坑 SK 06 (図11・16、写真12・17)

本遺構は調査区北西部のC 5グリッド南東部に位置する。検出面はL IV上面である。重複関係はないが、5号土坑とは北側で近接している。

平面形は不整な円形を呈し、西壁に不整な段を有する。規模は長軸168cm、短軸144cmを測る。長軸の方針はほぼ真北を示す。遺存状態は悪く、周壁の遺存高は、最大で20cmである。周壁は、遺存の比較的良好な西側で底面から約50°の角度で立ち上がる。底面は、中心部分がやや窪んでいるが概ね平坦である。堆積土は、炭化物を少量を含むL IV類似土の單層で、本遺構周辺には分布しない石が含まれていることから人為的な堆積土と考える。

図16-10には出土した石錐を示した。メノウ製の無茎四基錐で、先端部および右脚部を欠く。

本遺構の所属時期は、出土遺物から縄文時代と推定できるが、詳細な時期の特定は困難である。石器碎片を含む人為堆積であることから、墓坑の可能性がある。また、5号土坑とは堆積土が類似し、主軸方向もほぼ一致することなどから、同時期に機能した可能性がある。
(佐藤悦)

7号土坑 SK 07 (図12・16、写真13・16)

本遺構は調査区北東部のF 2グリッドに位置する。北区の谷へと下る南東向きの斜面に立地している。検出面はL IVである。2号木炭窓跡の奥壁天井を破壊する倒木痕と重複しており、本遺構の方が新しい。

平面形は、北東-南西方向に長い不整楕円形を呈する。規模は、長径514cm、短径240cmを測る。深さは西壁で157cmである。壁面は、立ち上がりは急傾斜であるものの、不整な段を有する。底面も不規則に窪み、中央部には北東方向へ下る段を有する。堆積土は14層に分層される。上端の窪みにはL I・IIが堆積し、以下にL II-Vの混土である褐色系の粘質土がレンズ状に堆積しており、崩落等を含む自然埋没と判断される。

遺物は、 ℓ 2から土師器2点、石器1点、 ℓ 4から縄文土器片2点、 ℓ 8から土師器片1点が出土している。2点を図示した。図16-1は ℓ 2出土の土師器杯である。器高が低く、底径が小さい。

口縁部は外反する。ロクロ整形後に回転糸切りにより切り離され、後の調整はない。図16-2は ℓ 2出土の土師器短胴壺で、 ℓ 8の破片が接合している。口縁部から胴部上半はロクロ整形で、以下はヘラケズリが施される。

本遺構は、倒木痕と重複する不整な崖みであり、倒木痕の一部である可能性もあるが、完形の土師器が出土したり、これを伴うような遺構が周間に見当たらないため、土坑として報告した。時期については、遺物の年代観から9世紀末から10世紀前半と考えられる。
(佐藤啓)

8号土坑 SK 08 (図12, 写真13)

本遺構は、調査区北西部B7・C7グリッドの境界付近に位置し、LIVから検出された。

平面形は、円形を基調とする。規模は、開口部で長軸170cm、短軸168cm、底部で長軸142cm、短軸136cmを測る。長軸の方位はN40°Wを示す。遺存状態は悪く、周壁の遺存高は、最大で18cmである。底面はLIVを6~8cm程掘りこんで、ほぼ平坦で水平である。遺存する周壁は、底面から40~45°の角度で立ち上がる。堆積土は炭化物粒と焼土粒を少量含むLIV類似土の単層である。混和物が少量である状況から、流入したものと考えられる。

本遺構は、出土遺物がないことから、機能時期については不明である。
(佐藤悦)

9号土坑 SK 09 (図13, 写真13)

本遺構は、調査区北西部のC6グリッドの中央付近に位置する。周囲の地形は、南東から北西へ緩やかに上がる斜面上に立地している。検出面はLIV上面で、礫を伴う暗褐色土の範囲として確認した。

本遺構は、西側半分と南側が後世の搅乱を受けて、大きく破壊されている。遺存する部分から推測される平面形は円形を基調とし、平面規模は南北136cm、東西65cmが遺存する。遺存状態は悪く、周壁の遺存高は最大で38cmで、底面から50~65°の角度で立ち上がる。底面はLVを6~10cm程掘りこんで、構築されている。

堆積土は3層に分層できる。 ℓ 1は暗褐色土を基調とする堆積土で、その性状から周囲の土壤が遺構内に流入したものと考えられる。 ℓ 2・3は褐色土を基調とするLIV類似のしまりの強い堆積土である。 ℓ 2と ℓ 3には、炭化物や土器細片、石器の碎片・屑が多量に混入していた。また ℓ 2の直上に長さ30cm、幅12cm、厚さ5cmの扁平な自然礫が斜めに据えてあったことからも、 ℓ 2・3は人為堆積と考えたい。 ℓ 2・3中からは、縄文土器細片3点、石器17点が出土している。

本遺構は、堆積状況および出土遺物から、縄文時代の墓坑の可能性が考えられる。土器細片が出土したが、遺存状態が悪く、遺構の時期を判断する資料とすることはできなかった。
(佐藤悦)

10号土坑 SK 10 (図12, 写真13)

本遺構は、北区南寄りのE8グリッドに位置する。中区にあたる谷北岸の尾根上の南西向き緩斜

面に立地する。検出面はLⅢで、炭化物を含む褐色系の堆積土の範囲として確認した。

平面形は、西辺に膨らみを持つ隅丸長方形である。長軸方向は北西-南東方向である。規模は、長軸117cm、単軸81cmを測る。検出面からの深さは24cmである。周壁は急傾斜で立ち上がり、底面は平らである。南側長辺の壁上端が焼土化している。堆積土は5層に分層される。 ℓ 1~3は、使用後に土坑内に戻された木炭を多量に含む土層。 ℓ 4・5は使用時の突きこみ、搔き出しなどに伴い発生した堆積土であろう。遺物は出土していない。

本遺構は、焼土化した壁面および堆積土から木炭焼成土坑と考えられる。 ℓ 1および ℓ 3出土の炭化物各2点の分析を行った。どちらの層位からもシラキとクリが同定された。さらにシラキ2点の放射性炭素年代は ℓ 1出土が 1280 ± 30 yrBP、 ℓ 3出土が 1230 ± 30 yrBPとされている。これより機能年代は古代と考えられる。

(由井)

11号土坑 SK 11 (図13・16、写真13・17)

本遺構は、調査区北西部のD6グリッドの北西付近に位置する。周囲の地形は、南東から北西へ緩やかに上がる斜面上に立地している。検出面はLⅣ上面である。

平面形は円形を基調とする。規模は、開口部では長軸112cm、短軸106cm、底部では長軸80cm、短軸72cmを測る。長軸の方位はN25°Wを示す。底面までの周壁の遺存高は、最大で44cmである。底面から周壁への立ち上がりは、北壁で73°の角度であった。底面は概ね平坦であった。堆積土は3層に分層できる。 ℓ 1・2は褐色土を基調とするLⅣ類似の堆積土である。 ℓ 3は、炭化物を多量に含む暗褐色土である。 ℓ 3は人為堆積の可能性があるが、 ℓ 1・2は、凹レンズ状の堆積状況と含有物からも流入による自然堆積と考えたい。

遺物は、縄文土器1点、石器114点が出土している。土器は ℓ 2に含まれ、石器はいずれの層にも含まれている。図16-11には石錐を示した。硬質頁岩製の無茎凹基錐で先端部を欠損する。

本遺構は、縄文時代の所産と考えられるが、詳細な時期、性格は不明である。

(佐藤悦)

12号土坑 SK 12 (図13、写真13)

本遺構は、南区北縁のF14・15グリッドに位置する。中区とした谷に向かう北東向きの緩斜面に立地する。検出面はLⅣである。

平面形は、東西に長い不整な隅丸長方形であり、西、北辺がやや膨らむ。規模は長軸142cm、短軸103cmを測る。深さは、南壁で17cmを測る。周壁の残りはあまり良くないが、緩やかな立ち上がりで、底面は概ね平らである。堆積土は、LⅢにLⅣが混入する土の单層である。遺物は出土していない。

本遺構は、南区で検出された唯一の遺構で、浅い土坑である。堆積土から縄文時代に構築されたと考えられるが、遺物がなく、その機能、時期ともに明らかにすることはできない。

(佐藤啓)

13号土坑 S K 13 (図14, 写真13)

本遺構は、調査区北西部のD 7グリッドの北西隅付近に位置する。周開の地形は、南東から北西へ緩やかに上がる斜面上である。検出面はL IV上面である。

開口部における平面形は、北東-南西方向に長い不整な楕円形を呈している。規模は長軸270cm、短軸204cmを測る。長軸の方位はN 60°Eを示す。壁高は、最大で50cmである。周壁は、東端部を除いて幅20~40cmの段を有する。底面から周壁への立ち上がりは、45~55°の角度である。底面は、L Vを12~16cmほど掘りこんで構築されており、凹凸がありながらも中央部がわずかに窪む形状となる。

堆積土は、L IV基調の褐色土で、5~20cm大の石が多量に含まれていた。本遺構周辺の地山には石が認められないため、他の場所から石を運び、堆積土とともに意図的に埋め戻した可能性を考えている。

本遺構は出土遺物もなく、その所属時期については不明である。

(佐藤悦)

14号土坑 S K 14 (図14, 写真14)

本遺構は、中区西部のD 12グリッド南西に位置する落し穴である。調査区中央の谷の谷頭に立地している。北西3mには同様の落し穴である15号土坑が位置している。検出面はL IV aであるが、断面観察によりL IIIを掘り込んでいることが確認されている。

開口部における平面形は、南北に長い長楕円形を呈する。長軸両端の壁上端は崩落により広がっているため、本来は柳葉形と推定される。長軸方位はN 9°Wで等高線と平行する。長辺側壁は直立するが、短辺側壁は、北側でやや開き気味に、南側では底部から抉れを持って立ち上がり、上方に向かって開く。底面は長軸両端がやや高くなる船底状となる。規模は開口部で長軸388cm、短軸62cm、底部で長軸355cm、短軸46cmである。深さは62cmである。

底面中央には円形のピットが、長軸沿いに2個配置される。南をP 1、北をP 2とする。P 1は径15cm、深さ43cmで杭痕を3つ持っている。杭痕は径4cm程度で、深さ16cmに達するものもある。P 2は径19cm、深さ35cmで杭痕を2つ持っている。杭痕は径7cmとP 1よりも太く、深さはピット底面まで達する。

堆積土は、9層に分けられる。ℓ 1~6は土坑本体の堆積土である。ℓ 1~3・6はL IIIを主体とし、ℓ 4・5は壁崩落土とL IIIの混土であることから自然堆積と考えられる。ℓ 7~9はピットの堆積土である。ℓ 7が杭痕、ℓ 8がP 1上部の杭痕間に見られるL IVを主体とする堆積土で、杭の固定時にピット上面に貼り込んだものと思われる。ℓ 9はピットの大部分を占める埋め戻し土である。出土遺物はない。

本遺構は、谷頭に位置する落し穴である。隣接する15号土坑と形態・規模・長軸方位のいずれも類似しており、同時期に機能したと考えられる。遺構の機能時期は、縄文時代中期末葉の遺物を包含するL IIIを掘り込んでいることから、縄文時代中期以降に位置づけられる。

(佐藤啓)

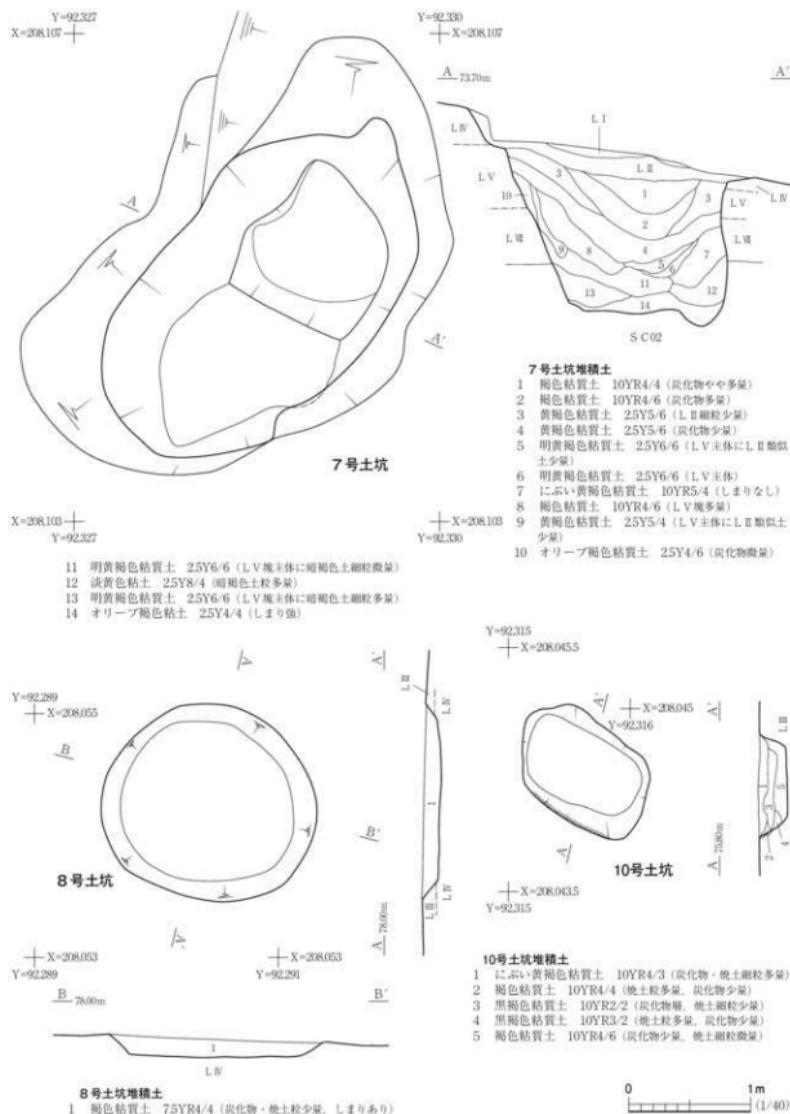


図12 7・8・10号土坑

第3編 南猿沢B遺跡

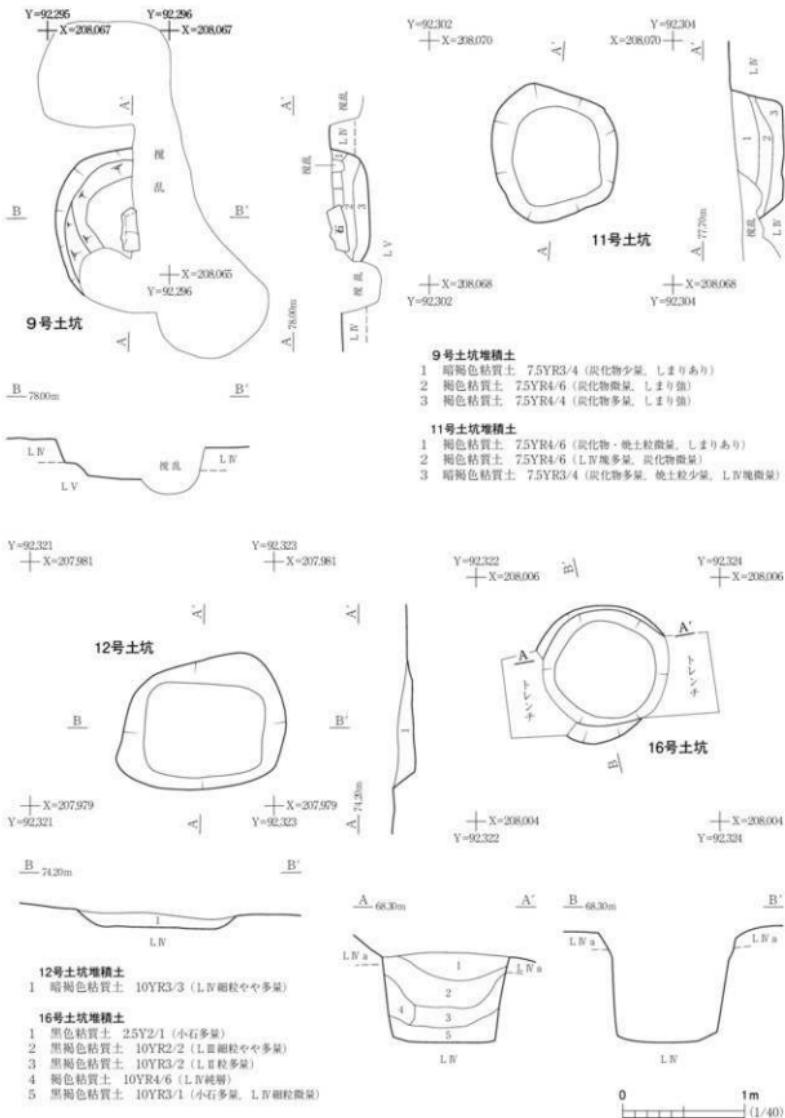


図13 9・11・12・16号土坑

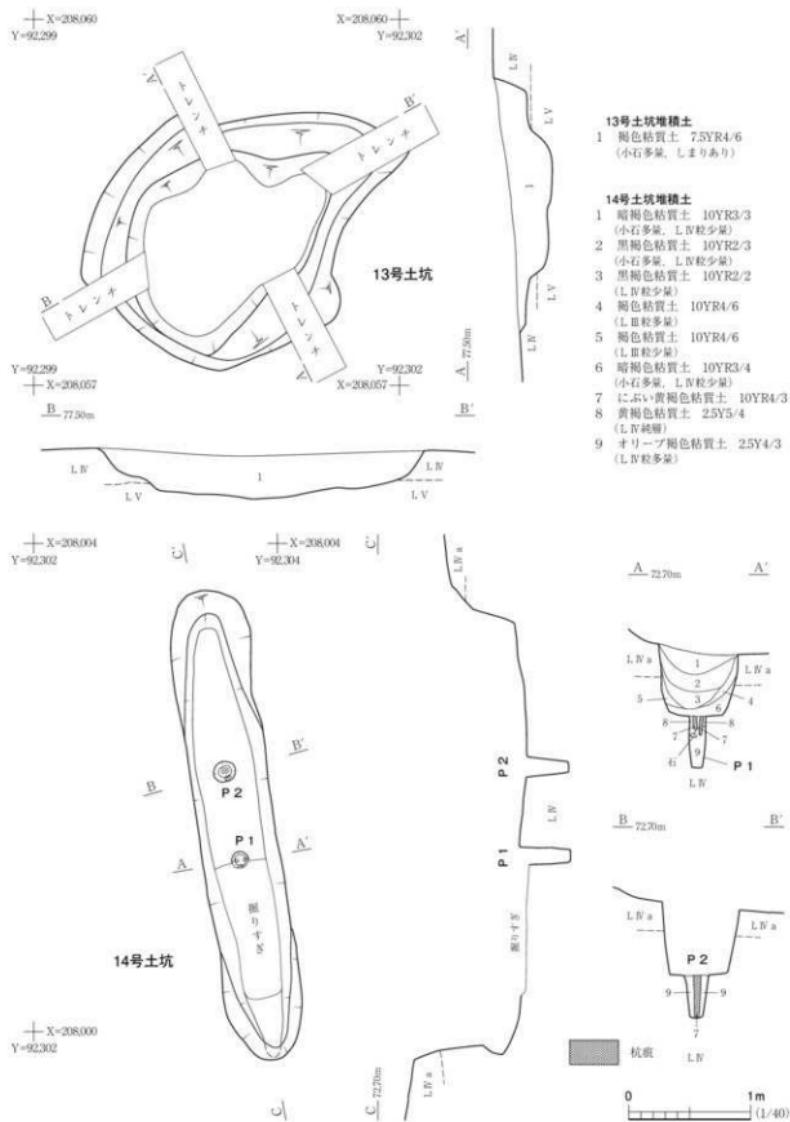


図14 13・14号土坑

15号土坑 SK 15 (図15, 写真14)

本遺構は、中区西部のD 12グリッド西端にある落し穴である。調査区中央の谷の谷頭に立地している。南東3mには同様の落し穴である14号土坑が位置している。検出面はL IV aである。

平面形は、南北に長い柳葉形を呈する。長軸方位はN 5° Eで、等高線と平行する。長辺側壁は崩落に伴う膨らみを持ちながら、ほぼ直立する。短辺側壁はオーバーハングし、縦断面がフラスク状となる。底面は、概ね平坦である。規模は開口部で長軸269cm、短軸88cm、底部で長軸305cm、短軸48cmである。深さは92cmである。

底面中央には円形のピットが、2個長軸沿いに配置される。南をP 1、北をP 2とする。P 1は径12~16cm、深さ46cmで杭痕を2つ持つ。杭痕は径5cm程度である。P 2は径15cm、深さ31cmで杭痕を2つ持つ。杭痕は径6cm程度である。

土坑本体の堆積土は、6層に分けられる。坑底ピットは降霜による崩落で土層断面の記録ができる

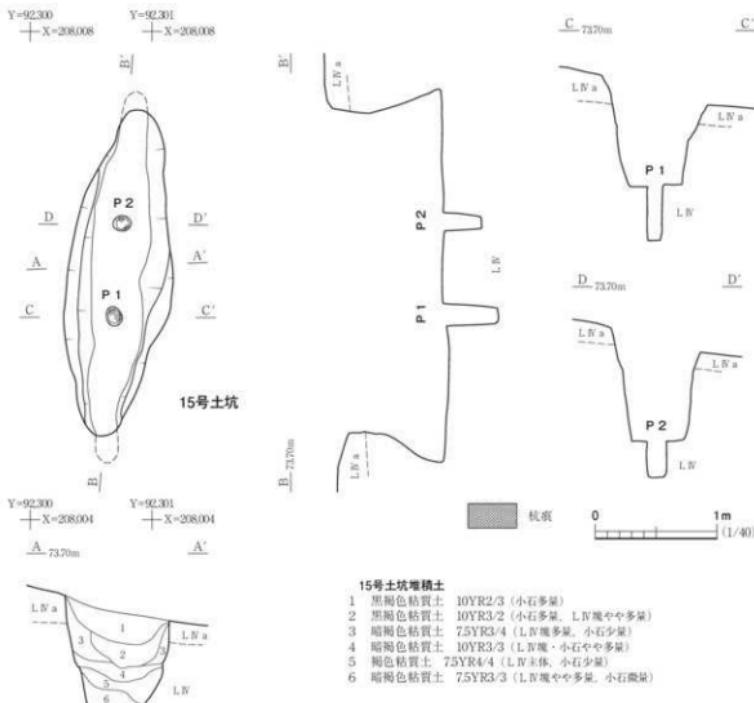


図15 15号土坑

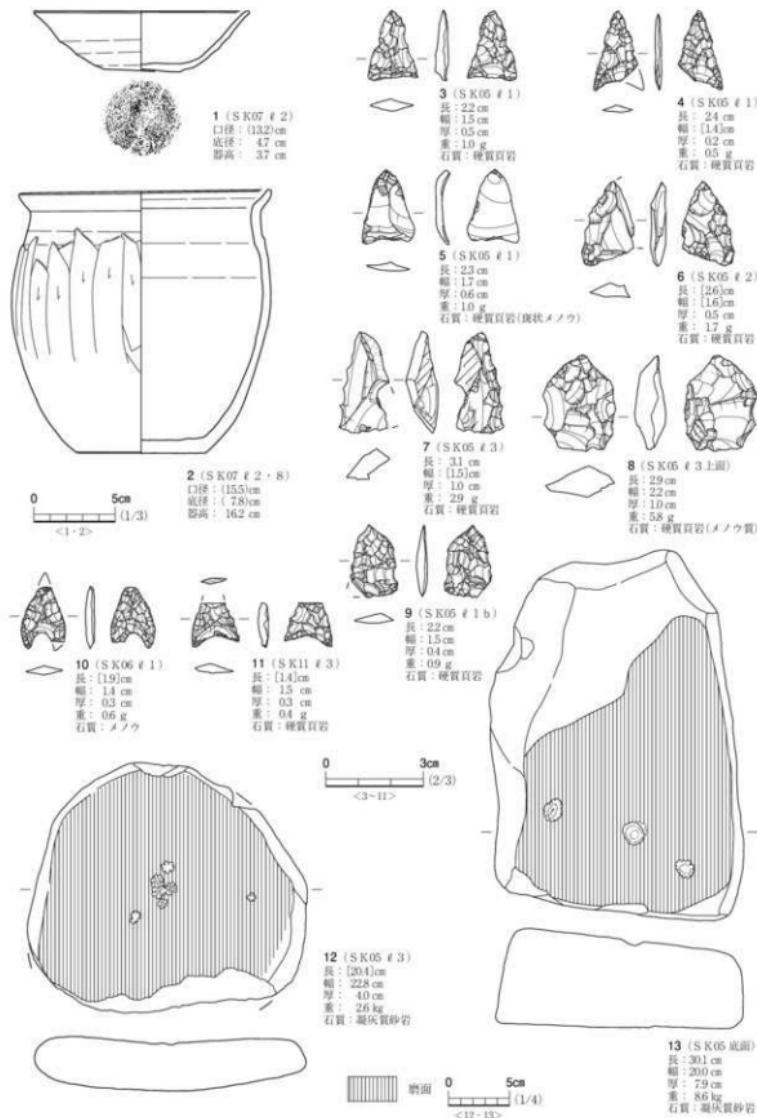


図16 土坑出土遺物

なかった。 ℓ 1～4・6はLⅢおよびLⅢaを主体とし、 ℓ 5は壁崩落土とLⅢの混土であることから自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

本遺構は、谷頭に位置する落し穴である。隣接する14号土坑と形態・規模・長軸方位のいずれも類似しており、同時期に機能したと考えられる。遺構の機能時期は、縄文時代早期～中期の遺物を包含するLⅢを堆積土とすることから、縄文時代中期以降に位置づけられる。（佐藤啓）

16号土坑 S K 16（図13、写真14）

本遺構は、中区東端のF 12グリッドに位置する。調査区中央の谷の底に立地する。検出面はLⅣaで、黒色土の堆積範囲として確認した。

平面形は、円形である。周壁は上端が崩落によって若干開くが、ほぼ直立する。底面はほぼ水平で、中央に向かって若干窪む。規模は、東西105cm、南北111cm、深さ91cmである。

堆積土は、5層に分けられる。 ℓ 1～3・5はLⅢaを主体とし、壁の崩落に由来するLⅣaおよびLⅣを含む。 ℓ 4は壁の崩落土を主体とする。自然堆積である。遺物は出土していない。

本遺構は、谷底に位置する円形の土坑である。堆積土がLⅢ主体であることから、縄文時代中・後期以降と考えられる。土坑の形態からは貯蔵穴の可能性が考えられるが、立地が谷底であることから雨水の流入も考えられ、断言するには至らない。（佐藤啓）

第5節 その他の遺構

これまで述べてきた以外の遺構として、探掘坑と焼土遺構が検出されている。いずれも1基のみであることから、本節においてまとめて報告する。

1号探掘坑 S X 01

遺構（図8・17、写真15）

本遺構は、北区北東部のE 3・E 4・F 3・F 4グリッドにまたがって位置し、東方に開口する谷部斜面に立地している。1号木炭窯跡の精査時に、奥壁を壊して南方に延びる径約1mの円形の掘り込みが検出された。そこで、1号木炭窯跡内堆積土の検討を行ったところ、 ℓ 16・17がこの掘り込みに連続する土層であることが確認され、1号木炭窯跡より新しい遺構と判明した。これらの土層は、LⅣ上面すでに検出されていたことから、LⅣを掘り込んだ遺構であることが分かる。

本遺構は、木炭窯跡が崩落した窓地を利用して、その壁面を横方向に掘り込んだ特殊な遺構であり、遺構の主体が1号木炭窯跡の奥壁より西に延びていた。そのため、遺構の精査は、遺構の新旧関係とは逆に、木炭窯跡の調査が終了した後に行った。具体的には、重機を用いてオープンカットしながら遺構の平面形を確認した。

本遺構の横坑は1号木炭窯跡奥壁から3本確認されている。横坑Aは奥壁中央付近から西方に延

びる。奥壁から35mで北西に屈曲し、さらに東西方向に二股に分かれる。開口部の大きさは、約80cmと比較的大きい。また、奥壁から1.4mの地点で南北に直交する横坑があり、ここにも分岐した部分がみられる。横坑Bは、1号木炭窯跡の奥壁南西隅から曲線的に南に延び、1.5m付近で横坑Cに合流する。開口部の大きさは約70cmあり、横坑Cとの合流地点での幅は55cmが確認されている。横坑Cは1号木炭窯跡の奥壁から約1m離れた南壁から南西方に延びている。壁面から、約1.5mの地点で横坑Bと合流し、土層の観察では横坑Cが新しいことが判明している。開口部の径が40cmであることを確認しており、また、天井部が残存していた南西部(図17 E-E'断面)でも径が30cmであったことから、横坑Cでの人の出入りは不可能と考えられる。

遺構内堆積土は、1号木炭窯跡内に堆積していた土層群と、横坑部分に堆積していた土層群に大きく分かれる(図8・17)。1号木炭窯跡ℓ1~15は、天井部が崩落して窪地化した木炭窯跡内に堆積した土層である。上部に堆積するℓ1~5は、焼土や炭化物がほとんど含まれていないことから、自然流入土と考えられる。また、下部に堆積するℓ7~15には、1号木炭窯跡由来の混入物が多くみられる。やはり自然堆積とみられる。

横坑内に堆積した土層群は、主に図17に図示した。このうち、1号木炭窯跡ℓ16・17は木炭窯跡から横坑A内に続く土層で、特にℓ17は図17 A-A'断面のℓ1と同一層の可能性が高い。焼土粒や炭化物を含み、なかでも炭化物は薄層をなして木炭窯跡内から連続していた。横坑掘削時などの照明具の痕跡の可能性がある。また、横坑A内には、木炭窯跡の壁体とみられる焼けた粘土粒が含まれている。これに対し、横坑B・Cの土層には地山層以外の混入物は少ない。

本遺構から、炭化物・粘土粒以外の出土遺物はない。

まとめ

本遺構は、天井の崩落により窪地化した木炭窯跡を掘り込み、LⅦを掘り込んだ横坑を特徴とする遺構である。3本検出された横坑のうち、横坑Aは開口部や溝部分の幅から、実際に人が入ることが可能である。その形状や構築状態は、本遺跡と同じ新地町に所在する大清水B遺跡の粘土採掘坑と報告された遺構群に類似していることから、同様の機能を果たしたと考えたい。横坑Aの場合には、砂質土のLⅦを採掘対象としていたとみられる。

一方、横坑Cはその径から人為的な所産とは考えにくく、動物の巣穴である可能性が考えられる。横坑Bについては開口部の径が比較的大きいことから、採掘坑として機能したと考えている。

本遺構は、土層の堆積状況や炭化物の年代測定の結果から、1号木炭窯跡とは大きな時間差が考えにくい。したがって、その年代も、古代と推定している。

(佐藤啓)

1号焼土遺構 SG01(図17、写真15)

本遺構は、北区北西部のC3グリッドに位置する焼土遺構で、地形的には丘陵頂部平坦面に立地している。遺構検出面はLIV上面である。

本遺構は、南北50cm・東西46cmの範囲が赤褐色に焼土化していた遺構である。焼土化面の厚み

第3編 南猿沢B遺跡

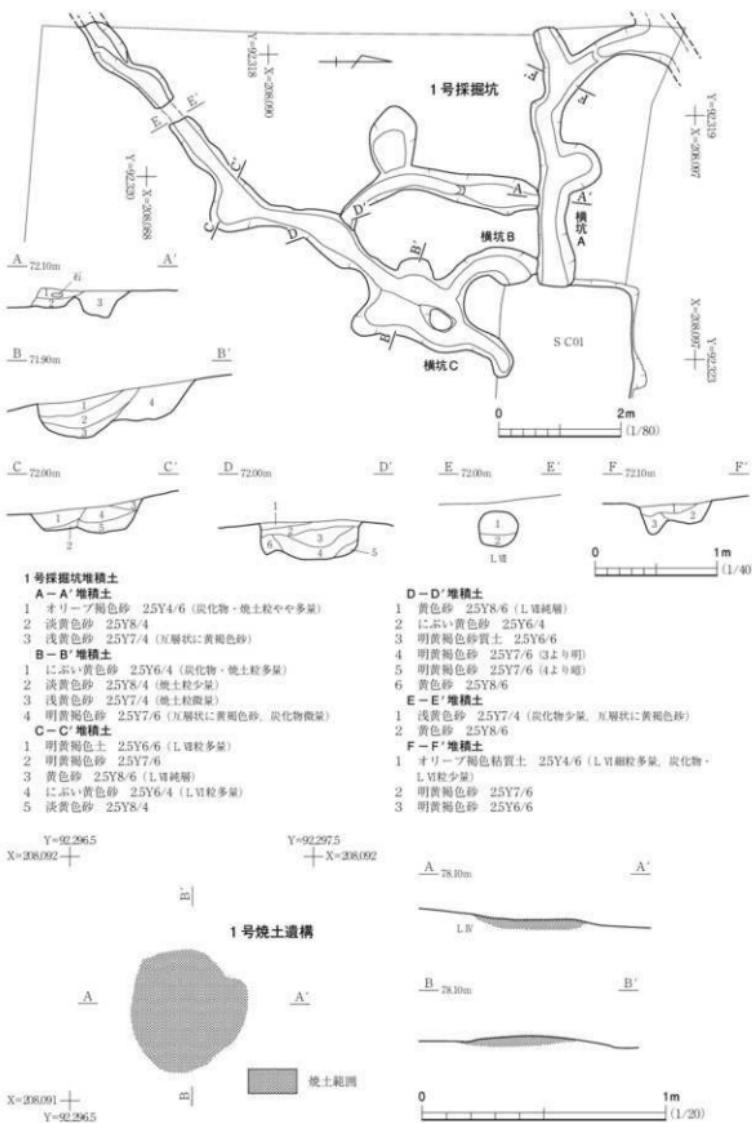


図17 1号探査坑、1号焼土遺構

は最大4cmあり、中央部が厚い。周辺に柱穴などが存在しないことから、住居跡の炉跡ではなく、単独で利用された遺構と考えられる。出土遺物がないため、その年代は不明である。（由井）

第6節 遺構外出土遺物

遺構外から、縄文土器片134点・土師器片25点・石器1,163点が出土した。平面的には、縄文土器は中区と南区からの出土が多く、石器は大部分が北区からの出土である。層位的にはLⅠ～LⅢから出土しており、土師器と石器は主にLⅠ・Ⅱから出土し、LⅢからの出土は少ない。また、中区では縄文時代早期の資料がLⅢ下部、中期の資料がLⅢ上部からそれぞれ出土した。このうち、良好な資料を図18・19に図示した。土師器は図示しなかったが、年代が判明したのは、すべて口クロ成形で内面黒色処理された杯で、9世紀代に属する資料であった。

縄文土器（図18-1～13、写真16）

図18-1～6は早期中葉の沈線文系土器群に比定される一群である。明るい色調を呈し、比較的薄手の資料が多い。1・2は平行沈線文が観察される。なかでも1は、区画沈線下位に貝殻腹縁圧痕文を斜位に施している。3は横方向に貝殻腹縁圧痕文が施されている。これらは、田戸下層式の特徴をもつ。同図4は、口縁部に文様が展開する資料である。沈線が伴う区画隆基上にボタン状の貼付けがあり、ここを起点に口端から垂下する沈線と、斜方向に延びる沈線が観察される。沈線はいずれも單沈線で、垂下する沈線には末端に刺突があり、これに貝殻腹縁圧痕文が沿っている。田戸上層式古段階の資料である。5・6の沈線は細く浅く施されている。

同図7・8は早期後葉の条痕文系土器である。ただし、纖維混和痕は多くない。7は外面にこまかい条痕が施され、微隆起による区画文が確認できる。8は内面に条痕文が観察される。これらは、条痕文系土器群でも古い段階の標本I式に比定できる。同図9は纖維混和痕が認められる前期前葉の土器である。0段多条の縄文が密に施されている。

同図11は懸垂文間を磨り消す技法から、中期後葉の大木9式と考えられる。同図10・12は晩期に属する。10は羊歯状文が施文される大洞B-C式の鉢ないし深鉢である。12は網目状撚糸文が、やや粗く密に施されている。晩期中葉の所産とみられる。同図13は底部片である。後・晩期の所産かと推定される。

石 器（図18-14～図19、写真17・18）

旧石器時代の石器（図18-14・15） 可能性があるものを含め2点図示した。図18-14は彫器である。灰白色の良質な硬質頁岩を用いており、山形県方面からもたらされたと考えられる。比較的厚みのある石刃を素材として、基部に打面をそのまま残し、剥片端部に彫刀面が形成されている。彫刀面は、正面右側邊に2回ないし3回の打面形成を行った後、左側面に作出されている。年代的

第3編 南猿沢B遺跡

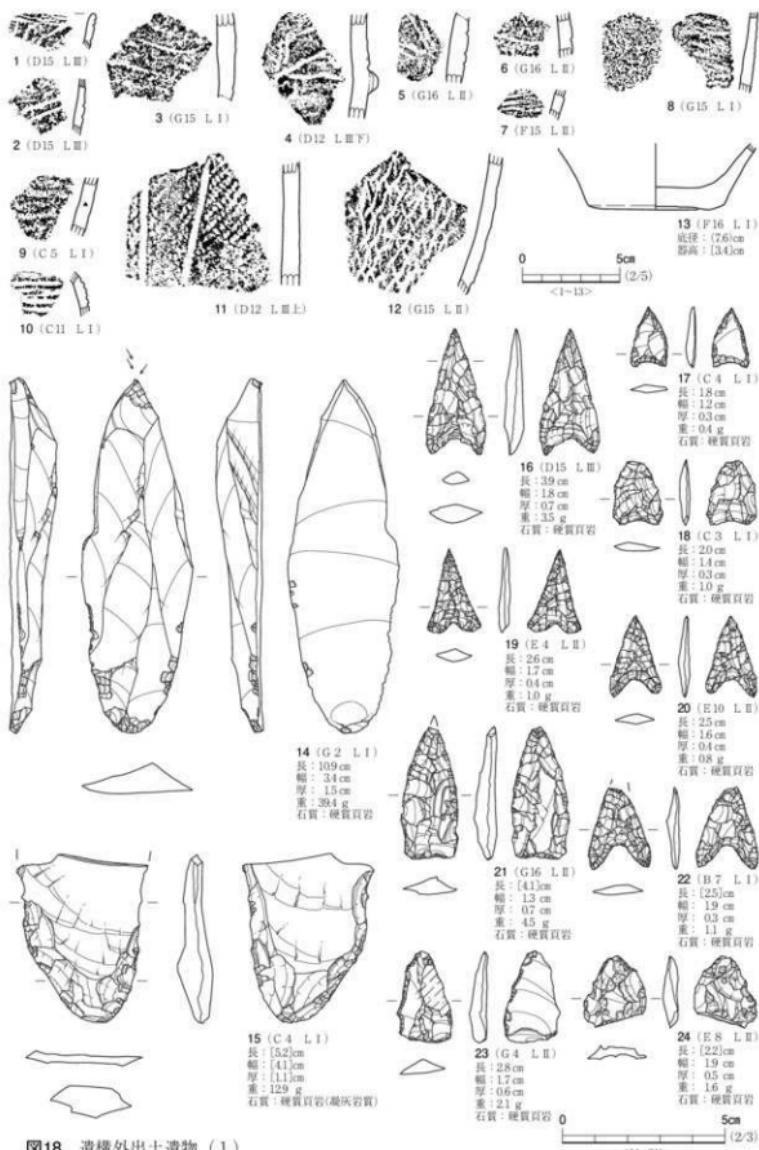


図18 遺構外出土遺物（1）

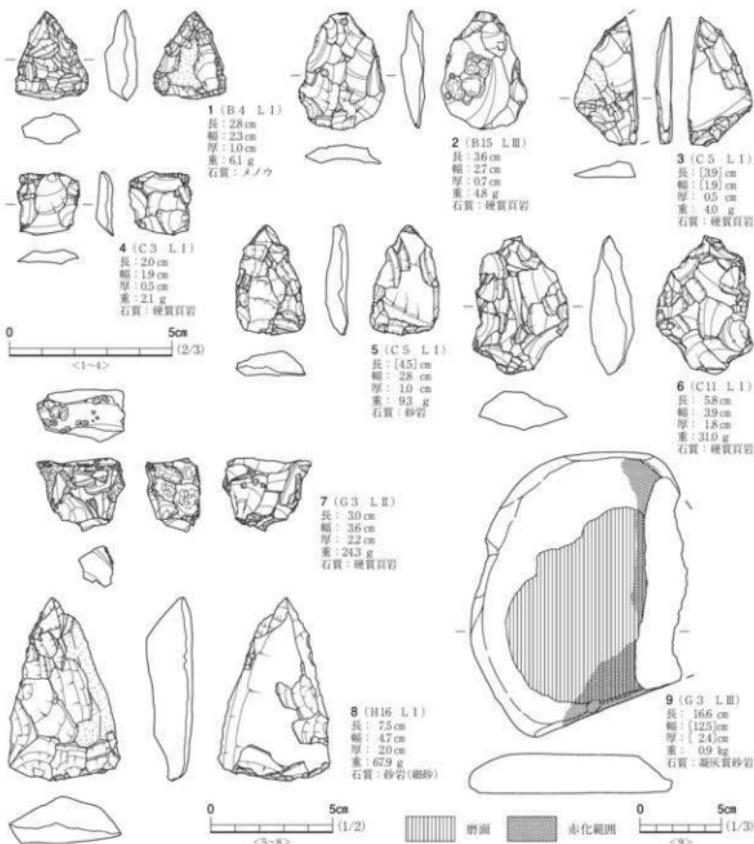


図19 遺構外出土遺物（2）

には、後期旧石器時代に属することは間違いないが、厳密な時期を推測することは難しい。

同図15は槍先形尖頭器とみられる。砂質の強い硬質頁岩製で、表裏面とも大きく剥落して、基部のみがかろうじて残存している。残存部を観察すれば、裏面には中央に到達する深い剝離がみられ、正面には浅い剝離しかみられないようである。その形状は、左右対称でなく、正面左側刃が広がっていることから、木葉形というより半月形に近いと推測される。このため、後期旧石器時代末から縄文時代草創期に属する資料と考えている。

縄文時代の石器(図18-16～図19-9) 石鎌(図18-16～図19-3)は、未完成品と判断したのも含め12点図示した。このうち、図18-16・17・19・20・22が完成品、それ以外が未完成品と判

断している。図18-16は硬質頁岩製の凹基鎌で、優品である。形状も非常に整っており、尖頭部から側辺にかけて直線的で、基部付近で丸くなっている。基部の抉りは浅い。長さは約4cmあり、大形である。同図19・20・22も凹基鎌である。19は側辺が外反気味になり、基部の抉りは浅い。20・22は16に類似した形状で、基部の抉りは22が深く、20はそれほど深くない。同図17も完品であるが、調整は素材剥片の周縁部にのみ施されている。周縁部のみ調整を加えた例として同図23や5号土坑から出土した図16-5が挙げられる。なお、17・23とともに、5号土坑に近いグリッドから出土している。

図18-18・21・23～図19-3は石鎌未成品である。完成形や大きさがある程度推定される資料(図18-18・21・23、図19-1)と、そうでない資料に分けられ、石器製作の段階を想定することが可能である。また、図18-24、図19-2には被熱によるハジケが観察されている。

図19-4は楔形石器と考えている。整った方形を呈し、厚みも一定に成形されている。正面中央には、最も新しい大きな剝離面が観察される。図19-5・8は範状石器である。小形の例(5)と比較的大形の例(8)がある。これらの素材となっているのは砂岩で、石鎌や楔形石器とは異なる。図19-7は北区から出土した石核である。黒色を呈する硬質頁岩製で、同一母岩とみられる剝片や碎片がC5・D5グリッドを中心に多数出土している。石核は、打面転移を頻繁に行なながら、剝片の大きさが2cm程度になった段階で廃棄されたと理解できる。器面には被熱によるハジケが数多くみられており、同様の痕跡が図18-24、図19-2をはじめ上記した剝片・碎片にも高い頻度で認められる。

図19-9は、G3グリッドから出土した石皿で、西方の丘陵部から廃棄された遺物と推定される。1/4ほどを欠損しており、この割れ面の部分が被熱により赤化している。 (佐藤啓)

第3章 総括

これまで述べてきたように、南狼沢B遺跡では、旧石器時代から古代にいたる人々の痕跡が明らかとなった。

遺跡に残された最も古い痕跡は、山形産とみられる良質な頁岩を素材とした旧石器時代の彫器であった。ただし、表掲資料であり、これと組成をなす石器が確認されていないことから詳細は不明である。次の縄文時代には、少量の遺物とともに、集落や狩場として利用されたことが判明している。1号住居跡は、土器埋設石圓炉が付属する住居跡で、出土土器は大木10式でも新しい段階とみられる。報文中では、その年代について、これまでの研究史を尊重し中期末葉に位置づけておいたが、近年、大木10式の最も新しい段階については、研究者間で土器型式の認定や段階設定に見解の相違はあるものの、加曾利E式の系譜をひく土器や称名寺式土器などとの関連が窺える資料があり後期初頭との指摘もなされている(福島県文化センター1996・福島県文化振興事業団2003)。炉底に敷かれた土器(図6-2~4)もこれらの特徴を有している。新地町内では該期の住居跡として、杉目の川窓遺跡や大窓遺跡・駒ヶ嶺の三貫地遺跡(田丁場A地点)・小川の山海道遺跡等で調査がされている(新地町教育委員会1999)。なかでも大概遺跡2号住居跡や川窓遺跡4号住居跡は、大木10式でも新相を示す土器が出土している。ただし、両住居跡とも複式炉はしっかりと構築され、形態的に若干退化傾向が窺える程度なので、本遺跡より1段階古い年代が想定される。

また、詳細な時期は不明ながら、3・5・14~16号土坑も縄文時代の遺構と考えられる。特に5号土坑は、掘形に粘土を貼って底面とした土坑である。また、多数の石器が、堆積土や掘形埋土から出土している。出土した石器が実用品とは考えにくい事や、石器製作時に作出される碎片が300点以上あることから「ゴミ捨て場」とも考えられたが、上記したような土坑の構造から判断して、墓坑など特別な性格を推定することも可能である。

中区から検出された14~16号土坑は、14・15号土坑が落し穴、16号土坑が貯蔵穴と考えられた。いずれも谷底の地点に位置している。落し穴は、谷頭付近に2基が近接しており、近似した年代が想定される。落し穴の立地としては、想定される地点に並んでいくことになる。一方、谷底に存在する16号土坑は、その形態や大きさ、土層の堆積状況から判断して貯蔵穴と考えざるを得ない。その立地から、遺構の位置づけに苦慮されるが、湿地性の貯蔵穴ではないかと考えている。実際、遺構の精査中には、下部に掘り込んでいくにつれて、わずかながら湿ってくる傾向があった。現在より湿潤であった時期に、堅果類などを貯蔵していたと推定する。

その後、後晩期の土器片が出土しているが、その量は少ない。活動の痕跡が再び確認されるのは平安時代まで待たねばならない。該期の遺構は、1・2号木炭窯跡、1・2・4・7・10号土坑など、主に木炭生産に関連する遺構である。

このうち、1号木炭窯跡は地下式の木炭窯跡で、燃焼室は長さが46m、最大幅が2.4mあり、幅広の形状を特徴とする。全容が不明な2号木炭窯跡は、最大幅が1.9mと若干狭く、全長は5m程度と推定される。また、1号木炭窯跡には側壁に煙道が設けられているが、柱穴や排水溝などはない。年代的には、2号木炭窯跡と重複する7号土坑が9世紀末葉から10世紀初頭とされることから、2号木炭窯跡はこれより古いことが判明している。

相馬開発に伴う武井地区の調査成果(福島県文化センター1989)によれば、1号木炭窯跡は、「羽子板」形とされる形態や規模からV期(10世紀以降)の年代が与えられる木炭窯跡である。一方、2号木炭窯跡はⅢ・Ⅳ期(9世紀代)に認められる形態・規模となる可能性が高く、7号土坑との重複関係にも矛盾しない。北区からは、内面黒色処理された土師器杯が出土しており、7号土坑出土土師器より古い様相を示すことから、あるいは2号木炭窯跡の年代を示している可能性も否定できない。したがって、形態的には2号木炭窯跡→1号木炭窯跡の順で機能したと考えられ、その実年代は2号木炭窯跡が9世紀代(後半か)、1号木炭窯跡が10世紀前後と推定される。調査された2基の木炭窯跡は、若干の時間差が想定されることとなり、そのためこの2基は主軸が異なっていると考えることも可能である。

ところで、本遺跡の中区と南区の境界を走る林道沿いに東側へ、約100mと150m行った2地点で廐塗場が確認されている。また、本遺跡の北に隣接する南狼沢A遺跡からは、平成25年の発掘調査で製鉄炉が発見されており、このほか、常磐自動車道関連の新地町だけでも、沢入B遺跡・大清水B遺跡・鈴山遺跡・赤柴遺跡・赤柴前遺跡・鴻ノ巣遺跡などの製鉄関連遺跡が多数調査されている。このように、古代の当地域は、巨大製鉄遺跡群として東国の歴史上の舞台に登場する。本遺跡も、その中の一つとして機能した遺跡であることが判明した。(佐藤啓)

引用・参考文献

序 章

- 藤田至則・加納博・滝沢文教・八島隆一 1988年 『角田地域の地質』 通商産業省工業技術院地質調査所
福島県 1989年 『土地分類基本調査 相馬中村』
(有)平凡社地方資料センター編 1993年 『新地町』『日本歴史地名大系7 福島県の地名』
福島県教育委員会 1996年 『福島県遺跡地図 浜通り地方』 福島県文化財調査報告書第321-3集
柳沢幸夫・山元孝広・坂野靖行・田沢統一・吉岡敏和・久保和也・滝沢文教 1996年 『相馬中村地域の地質』 通商産業省工業技術院地質調査所
新地町教育委員会 1999年 『新地町史 歴史編』
福島県教育委員会 2012年 『福島県内遺跡分布調査報告18』福島県文化財調査報告書第479集
福島県教育委員会 2012年 『福島県内遺跡分布調査報告19』福島県文化財調査報告書第484集

第1編 南狼沢遺跡 関連

- (財)福島県文化振興事業団 2011年 「荻平遺跡(1次)」「阿武隈東道路遺跡発掘調査報告1」
福島県文化財調査報告書第455集 福島県教育委員会
(財)福島県文化振興事業団 2011年 「荻平遺跡(2次)」「阿武隈東道路遺跡発掘調査報告2」
福島県文化財調査報告書第463集 福島県教育委員会
(財)福島県文化振興事業団 2012年 「荻平遺跡(3次)」「阿武隈東道路遺跡発掘調査報告3」
福島県文化財調査報告書第475集 福島県教育委員会
(財)福島県文化振興財団 2014年 「朴木原遺跡」「新田遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告70」
福島県文化財調査報告書第493集 福島県教育委員会

第2編 南狼沢A遺跡(1次調査) 関連

- (財)福島県文化センター 1996年 「大船迫A遺跡」「原町火力発電所遺跡発掘調査報告VI」
福島県文化財調査報告書第315集 福島県教育委員会
(財)福島県文化振興事業団 2006年 「別所遺跡」「県営かんがい排水事業相馬第二地区遺跡発掘査報告III」 福島県文化財調査報告書第429集 福島県教育委員会
(財)福島県文化振興事業団 2007年 「割田日遺跡」「原町火力発電所遺跡発掘調査報告X」 福島県文化財調査報告書第439集 福島県教育委員会
(財)福島県文化振興事業団 2009年 「荻平遺跡(2次調査)」「阿武隈東道路遺跡発掘調査報告2」

福島県文化財調査報告書第463集 福島県教育委員会
福島県教育委員会 2013年 『福島県内遺跡分布調査報告20』 福島県文化財調査報告書第494集

第3編 南狼沢B遺跡 関連

- 渡辺一雄・寺島文隆 1976年 『山海道遺跡範囲確認調査報告』 新地町教育委員会
- 玉川一郎 1978年 『三貫地 田丁場A地点調査報告・田丁場B地点調査概報』 新地町教育委員会
- 玉川一郎 1987年 『川窪遺跡発掘調査報告』 新地町教育委員会
- (財)福島県文化センター 1989年 『相馬開発関連遺跡調査報告I』 福島県文化財調査報告書第215集 福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1996年 『越和田遺跡』『三春ダム関連遺跡発掘調査報告8』 福島県文化財調査報告書第322集 福島県教育委員会
- 真鍋健一 1997年 『山田A・B遺跡の地形・地質について』『相馬開発関連遺跡調査報告V』福島県文化財調査報告書第333集 福島県教育委員会
- 新地町教育委員会 1999年 『新地町史 歴史編』
- (財)福島県文化振興事業団 2003年 『高木・北ノ脇遺跡』『阿武隈右岸築堤遺跡発掘調査報告3』 福島県文化財調査報告書第402集 福島県教育委員会
- (財)福島県文化振興事業団 2007年 『原町火力発電所関連遺跡調査報告X』 福島県文化財調査報告書第439集 福島県教育委員会
- (財)福島県文化振興事業団 2011年 『大槻遺跡』『常磐自動車道遺跡調査報告67』 福島県文化財調査報告書第480集 福島県教育委員会

第4編 自然科学分析

第1章 南狼沢A遺跡の自然科学分析

第1節 炭化材の樹種同定

古代の森研究会

1. はじめに

南狼沢A遺跡は、新地町の鹿狼山東麓に位置している平安時代の遺跡である。1号竪穴住居跡のP1-1層から挽の一部と見られる炭化材と炭化した板材が出土したことから、木製品の木材利用状況を調査する目的で出土した炭化材3試料の樹種同定をおこなった。炭化材試料からはステンレス製剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の断面を割り取りプレパラートに固定して生物顕微鏡NikonEclipse80iに反射照明装置NikonTE2-PSを取り付け反射光で観察・同定をおこなった。

2. 同定結果と考察

炭化材試料の同定結果を表1に示す。本遺跡の平安時代の竪穴住居跡から出土した挽材2点はケヤキ。板材試料には破片2点があり、それぞれケヤキと散孔材であった。以下に同定された樹種の木材解剖学的記載をおこなう。

ケヤキ(*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino)：年輪はじめに大きな道管が1列並び、その後急に径を減じて小さい管孔が斜めに集合して配列する環孔材。道管は単穿孔で小道管内にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で1~6細胞幅ほどの紡錘形で、しばしば結晶細胞がある。

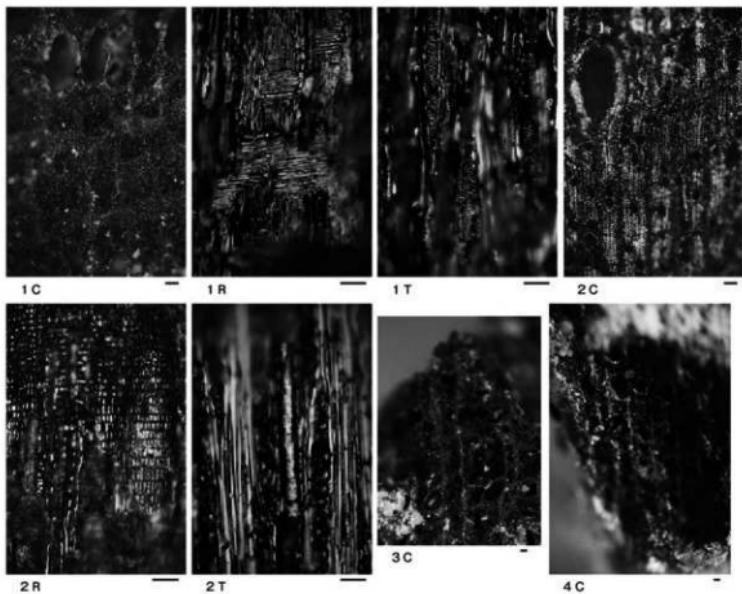
散孔材：年輪内に単独の管孔がほぼ均一にまばらに分布する散孔材。道管は単穿孔で道管と木織維にらせん肥厚がある。放射組織は異性で1~3細胞幅でやや長い。

本遺跡から出土した挽材は2点ともケヤキで、容器としてケヤキ材を選択して利用していたと考えられる。板材の1点もケヤキで一部残る端が円いことから皿か鉢などが焼け残ったものではないかと考えられる。同一箇所で出土した破片は散孔材であったため、同じ場所で複数の製品が燃焼した可能性もある。

(吉川純子)

表1 南狼沢A遺跡出土炭化材の樹種

| 試料番号 | 遺構名 | 出土層位 | 時代 | 器種 | 樹種 |
|------|---------|-------|------|----|-----|
| 1 | 1号竪穴住居跡 | P1 1層 | 平安時代 | 挽? | ケヤキ |
| 2 | 1号竪穴住居跡 | P1 1層 | 平安時代 | 挽? | ケヤキ |
| 3 a | 1号竪穴住居跡 | P1 1層 | 平安時代 | 板材 | ケヤキ |
| 3 b | 1号竪穴住居跡 | P1 1層 | 平安時代 | 板材 | 散孔材 |



1. ケヤキ (Na3a) 2. 散孔材 (Na3b) 3. ケヤキ (Na1) 4. ケヤキ (Na2)
C : 横断面 R : 放射断面 T : 接線断面 スケールは0.1mm

図1 南狼沢A遺跡から出土した炭化材の顕微鏡写真

第2章 南狼沢B遺跡の自然科学分析

第1節 炭化物の樹種同定

株式会社 加速器分析研究所

南狼沢B遺跡は福島県新地町に所在し、鮮新世後期山下層(大年寺層)を基盤とする丘陵上に立地する。

本報告では、木炭窯跡、採掘坑、土坑から出土した炭化材について木材の種類を明らかにするために樹種同定を実施する。

1. 試 料

試料は、木炭窯跡、性格不明遺構、土坑から出土した炭化材15点(ST-MO-B-1~15)である。なお、これらのうち10点について、同一試料の放射性炭素年代測定が実施されている(本章第2節参照)。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)や Wheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結 果

樹種同定結果を表2に示す。炭化材は、広葉樹3分類群(クマシデ属イヌシデ節・クリ・シラキ)に同定された。なお、ST-MO-B-7は、組織の特徴から上記3分類群とは異なる種類であるが、組織の保存状態が悪く、種類は不明である。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クマシデ属イヌシデ節(*Carpinus* subgen. *Euarpinus*) カバノキ科

散孔材で、道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近では径を減ずる。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列状~交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~40細胞高のものと集合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3~4列、道管は孔圈外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。

なお、ST-MO-B-11は、他の試料と比較して年輪幅が狭く、晩材部があまり形成されていないなど、いわゆるヌカ目の状況を示す。

・シラキ (*Sapium japonicum* (Sieb. et Zucc.) Pax et Hoffm) トウダイグサ科

散孔材で、道管は年輪全体にはほぼ一様に分布する。管壁は厚~中庸で、横断面では角張った梢円形、単独および2~4個が放射方向に複合する。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、單列(時に2列)、1~40細胞高。

・広葉樹

試料は直径1cmの芯持丸木である。横断面では、比較的大型の道管が散在し、大型の道管の間に小型の道管が僅かに見られる特徴から、本来は環孔材と考えられる。道管は、單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は潰れており、観察できない。

大型の道管が配列する特徴等から、つる植物に由来すると考えられるが、保存状態が悪く、種類は不明である。

表2 南猿沢B遺跡樹種同定結果

| 試料番号 | 造構 | 層位 | 形狀 | 種類 |
|------------|------------------|--------------|----------------|------------|
| ST-MO-B-1 | 1号木炭窯跡(S C 01) | 8層(ℓ 8) | 分割状 | クリ |
| ST-MO-B-2 | 1号木炭窯跡(S C 01) | 8層(ℓ 8) | 芯持材(直径1.8cm) | クマシデ属イヌシデ節 |
| ST-MO-B-3 | 1号木炭窯跡(S C 01) | 23層(ℓ 23) | 芯持材(直径2.1cm) | クマシデ属イヌシデ節 |
| ST-MO-B-4 | 1号木炭窯跡(S C 01) | 23層(ℓ 23) | 芯持丸木(直径2.0cm) | クマシデ属イヌシデ節 |
| ST-MO-B-5 | 2号木炭窯跡(S C 02) | 底面 | ミカン削状(半径4.1cm) | クマシデ属イヌシデ節 |
| ST-MO-B-6 | 2号木炭窯跡(S C 02) | 底面 | 分割状 | クマシデ属イヌシデ節 |
| ST-MO-B-7 | 1号性格不明造構(S X 01) | B-B' 1層(ℓ 1) | 芯持丸木(直径1.0cm) | 広葉樹 |
| ST-MO-B-8 | 1号性格不明造構(S X 01) | B-B' 1層(ℓ 1) | 分割状 | クマシデ属イヌシデ節 |
| ST-MO-B-9 | 1号性格不明造構(S X 01) | B-B' 1層(ℓ 1) | ミカン削状(半径1.5cm) | クリ |
| ST-MO-B-10 | 1号土坑(S K 01) | 2層(ℓ 2) | 芯持材(直径1.1cm以上) | クマシデ属イヌシデ節 |
| ST-MO-B-11 | 2号土坑(S K 02) | 1層(ℓ 1) | 分割角材状 | クリ |
| ST-MO-B-12 | 10号土坑(S K 10) | 1層(ℓ 1) | ミカン削状(半径2.1cm) | シラキ |
| ST-MO-B-13 | 10号土坑(S K 10) | 1層(ℓ 1) | 分割状 | クリ |
| ST-MO-B-14 | 10号土坑(S K 10) | 3層(ℓ 3) | 分割状 | シラキ |
| ST-MO-B-15 | 10号土坑(S K 10) | 3層(ℓ 3) | 分割状 | クリ |

4. 考 察

樹種同定を実施した炭化材15点は、木炭窯跡、性格不明造構、土坑から出土している。これらのうち炭化材10点の年代測定により、¹⁴C年代で 1320 ± 30 yrBP から 1230 ± 30 yrBP の年代値が得

られており、いずれも近い時期の遺構と考えられる。これらの炭化材には、4種類の広葉樹が認められた。クリは、二次林等を構成する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高く、耐朽性も高い。イヌシデ節とシラキは、丘陵や山地の斜面や谷筋等によく見られる落葉広葉樹である。イヌシデ節は重硬で強度が高い材質を有するが、シラキは比較的軽軟で強度は低い。これら3種類とは異なる特徴を持つが、樹種を詳しく同定できなかった広葉樹試料1点がある。

遺構別に見ると、1号木炭窯跡(S C 01)では、8層と23層から出土した炭化材が検討され、年代測定の結果からは層位による時期差は認められない。炭化材の樹種を見ると、8層でクリとイヌシデ節各1点、23層でイヌシデ節2点が出土し、イヌシデ節を主体としてクリが混じる組成が見られる。炭化材の形状を見ると、イヌシデ節は3点とも芯持材あるいは芯持丸木であるのに対し、クリは分割状を呈しており、樹種によって形状に違いが見られる。イヌシデ節の芯持材は、元は芯持丸木であったと考えられるような形状であり、芯持丸木の試料も含めて直径が1.8~2.1cmである。イヌシデ節としては細い材であり、枝等が利用されていることが推定される。

2号木炭窯跡(S C 02)では、ミカン割状の炭化材と分割状の炭化材とがあり、2点ともイヌシデ節に同定された。イヌシデ節が確認された結果は、1号木炭窯跡の結果とも調和的である。ミカン割状の試料を見ると、半径が4.1cmあり、1号木炭窯跡よりも太い木材が利用されている。

1号採掘坑(S X 01)の試料は、全て1層から出土した炭化材である。イヌシデ節、クリ、広葉樹が認められ、少なくとも3種類の木材が利用されたと考えられる。クリやイヌシデ節が認められる結果は、1号、2号木炭窯跡の結果とも類似する。なお、詳しい樹種が不明の広葉樹については、つる植物の可能性があり、イヌシデ節やクリとは材質が異なることから、利用の過程が異なる可能性がある。

1号土坑(S K 01)の炭化材は、2層から出土した1点で、イヌシデ節に同定され、木炭窯跡や性格不明遺構と樹種が共通する。また、残存直径が1.1cmの芯持材で、失われた部分を考慮しても2cmに満たないと考えられる状況は、1号木炭窯跡の炭化材に似ている。

2号土坑(S K 02)の炭化材1点は、クリに同定された。クリは1号性格不明遺構でも確認された樹種である。なお、2号土坑の炭化材は、角材状を呈しており、他の試料とは形状が異なる。また、年輪幅が狭い、孔圈部の大通管が中心で晩材部の小通管の発達が悪いなど、ヌカ目の状況を呈していることから、他のクリ材に比べて比較的柔らかく加工が容易であった可能性がある。

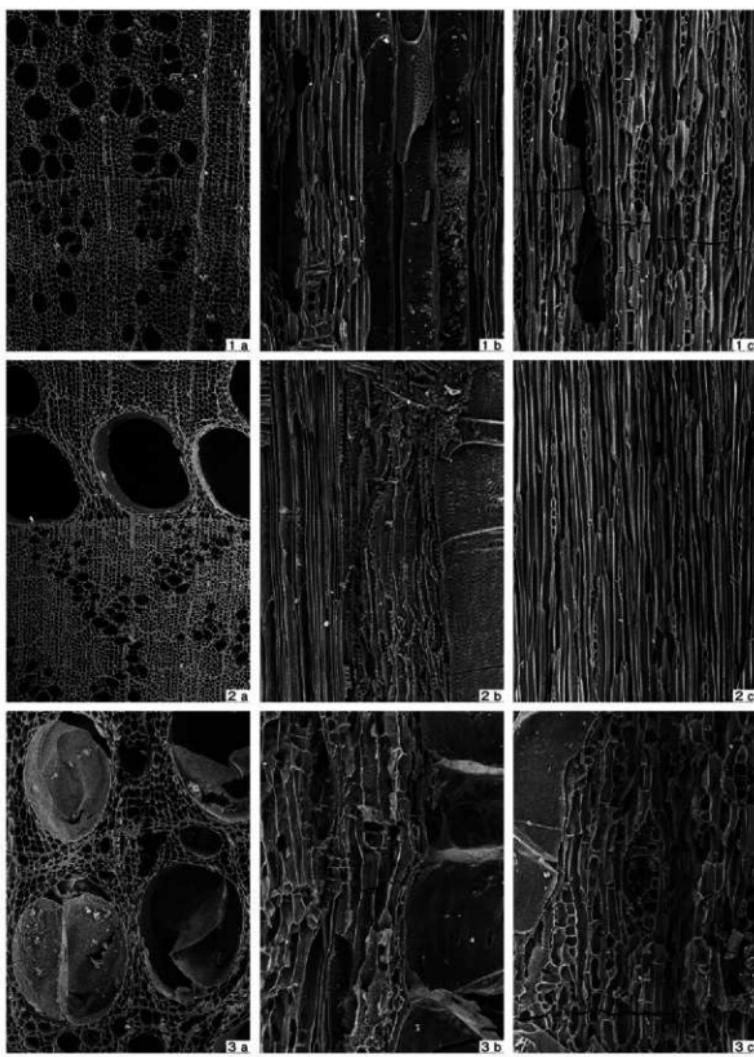
10号土坑の炭化材は、1層と3層から出土しているが年代測定の結果から層位による有意な年代差は認められない。形状はミカン割状あるいは分割状を呈している。1層と3層共にクリとシラキで構成されており、硬いクリと比較的柔らかいシラキが混在して利用されたことが推定される。

クリやイヌシデ節は、これまで本地域で実施された調査でも古代の木炭窯出土炭化材に多数確認されているが、イヌシデ節が主体となる事例は確認されていない(伊東・山田、2013)。今回の試料は、イヌシデ節としては径が細いことから、用途等を慎重に判断した上で、木材利用を検討する必要がある。

引用文献

- 林昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2013, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449 p.
- 鳥地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176 p.
- Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E.(編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122 p. [Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

※)本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



1. クマシデ属イヌシテ節 (ST-MO·B-8)

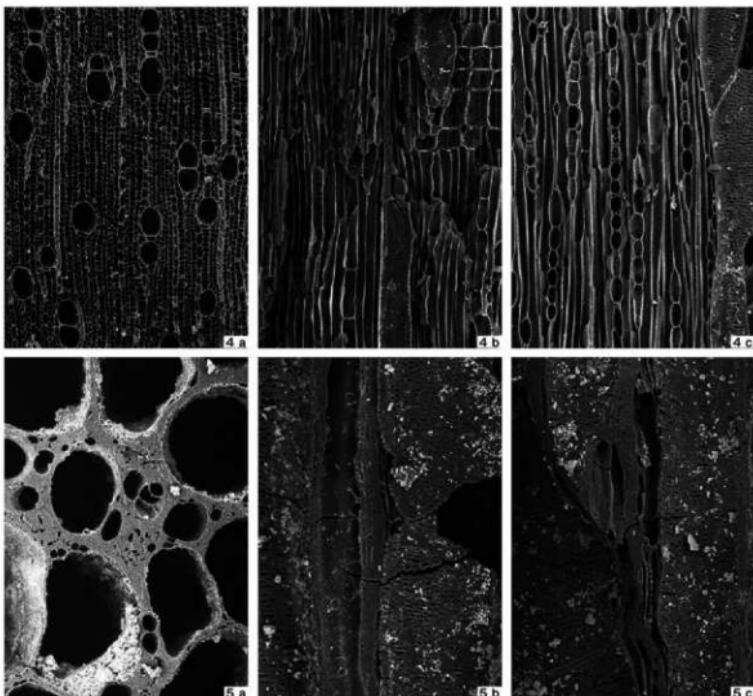
2. クリ (ST-MO·B-1)

3. クリ (ST-MO·B-11)

a : 木口, b : 径目, c : 板目

図2 南猿沢B遺跡炭化材の木材組織（1）

— 100 μ m : a
— 100 μ m : b, c



4. シラキ(ST - MO·B - 14)

5. 広葉樹(ST - MO·B - 7)

a : 木口, b : 梓目, c : 板目

図3 南狼沢B遺跡炭化材の木材組織（2）

第2節 炭化物の放射性炭素年代測定

株式会社 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

測定対象試料は、木炭窯跡、採掘坑、土坑から出土した木炭10点である(表3)。なお、同一試料の樹種同定が実施されている(本章第1節参照)。

2. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA : Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表3に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3. 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)の測定を行なう。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表3)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として算出される年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表4に示した。 ^{14}C 年代と誤

差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMC が100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の曆年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表4に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される)。

5. 測定結果

測定結果を表3、4に示す。試料10点の ^{14}C 年代は、 $1320 \pm 30\text{yrBP}$ (ST-MO・B-6)から $1230 \pm 30\text{yrBP}$ (ST-MO・B-14)の間にすべて含まれ、かなり狭い範囲に集中する。遺構、層位ごとに検討すると、1号木炭窯跡23層出土のST-MO・B-3と同4の値は誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で一致する。同遺構8層出土のST-MO・B-1と同2、2号木炭窯跡底面出土のST-MO・B-5と同6の値は、各々誤差範囲では重ならないが、ある程度近い値となっている。

历年較正年代(1σ)は、最も古いST-MO・B-6が $660 \sim 762\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、最も新しいST-MO・B-2が $722 \sim 865\text{cal AD}$ の間に3つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて60%以上の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(1), 337–360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 51(4), 1111–1150
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19(3), 355–363

表3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 补正値)

| 測定番号 | 試料名 | 採取場所 | 試料形態 | 処理方法 | $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ (AMS) | $\delta^{13}\text{C}$ 补正あり | |
|-------------|------------|---------------------------|------|------|--|----------------------------|--------------|
| | | | | | | Libby Age (yrBP) | pMC(%) |
| IAAA-130049 | ST-MO-B-1 | 1号木炭窯跡 S C 01 8層(ℓ 8) | 木炭 | AAA | -28.31 ± 0.49 | 1310 ± 20 | 84.96 ± 0.26 |
| IAAA-130050 | ST-MO-B-2 | 1号木炭窯跡 S C 01 8層(ℓ 8) | 木炭 | AAA | -24.44 ± 0.41 | 1230 ± 20 | 85.85 ± 0.26 |
| IAAA-130051 | ST-MO-B-3 | 1号木炭窯跡 S C 01 23層(ℓ 23) | 木炭 | AAA | -28.01 ± 0.55 | 1300 ± 30 | 85.07 ± 0.27 |
| IAAA-130052 | ST-MO-B-4 | 1号木炭窯跡 S C 01 23層(ℓ 23) | 木炭 | AAA | -26.73 ± 0.31 | 1260 ± 30 | 85.50 ± 0.27 |
| IAAA-130053 | ST-MO-B-5 | 2号木炭窯跡 S C 02 底面 | 木炭 | AAA | -25.46 ± 0.41 | 1230 ± 20 | 85.75 ± 0.26 |
| IAAA-130054 | ST-MO-B-6 | 2号木炭窯跡 S C 02 底面 | 木炭 | AAA | -25.85 ± 0.45 | 1220 ± 30 | 84.86 ± 0.27 |
| IAAA-130055 | ST-MO-B-8 | 1号探査坑 S X 01 B-B' 1層(ℓ 1) | 木炭 | AAA | -26.77 ± 0.43 | 1310 ± 20 | 85.00 ± 0.26 |
| IAAA-130056 | ST-MO-B-10 | 1号土坑 S K 01 2層(ℓ 2) | 木炭 | AAA | -25.61 ± 0.56 | 1240 ± 30 | 85.70 ± 0.27 |
| IAAA-130057 | ST-MO-B-12 | 10号土坑 S K 10 1層(ℓ 1) | 木炭 | AAA | -25.66 ± 0.46 | 1280 ± 30 | 85.31 ± 0.27 |
| IAAA-130058 | ST-MO-B-14 | 10号土坑 S K 10 3層(ℓ 3) | 木炭 | AAA | -25.74 ± 0.41 | 1230 ± 30 | 85.82 ± 0.27 |

[#5778]

表4 暴年較正年代

| 測定番号 | $\delta^{13}\text{C}$ 补正なし | | 暴年較正用 (yrBP) | 1 σ 暴年年代範囲 | 2 σ 暴年年代範囲 | |
|-------------|----------------------------|--------------|-----------------|---|--|-----------------------------|
| | Age(yrBP) | pMC(%) | | | 663calAD - 694calAD (45.2%) | 658calAD - 723calAD (67.9%) |
| IAAA-130049 | 1,360 ± 20 | 84.38 ± 0.25 | 1,309 ± 24 | 703calAD - 706calAD (2.9%) 748calAD - 765calAD (20.1%) | 740calAD - 771calAD (27.5%) | |
| IAAA-130050 | 1,220 ± 20 | 85.95 ± 0.25 | 1,225 ± 24 | 722calAD - 741calAD (11.9%) 770calAD - 828calAD (40.0%) 839calAD - 865calAD (16.2%) | 693calAD - 748calAD (22.8%) 765calAD - 883calAD (72.6%) | |
| IAAA-130051 | 1,350 ± 20 | 84.55 ± 0.25 | 1,298 ± 25 | 670calAD - 709calAD (45.6%) 747calAD - 766calAD (22.6%) | 662calAD - 773calAD (95.4%) | |
| IAAA-130052 | 1,290 ± 20 | 85.19 ± 0.26 | 1,258 ± 25 | 690calAD - 751calAD (56.7%) 762calAD - 775calAD (11.5%) | 672calAD - 818calAD (93.4%) 843calAD - 859calAD (2.0%) | |
| IAAA-130053 | 1,240 ± 20 | 85.67 ± 0.25 | 1,234 ± 24 | 709calAD - 747calAD (27.4%) 766calAD - 819calAD (32.4%) 842calAD - 860calAD (8.4%) | 690calAD - 751calAD (36.9%) 762calAD - 875calAD (58.5%) | |
| IAAA-130054 | 1,330 ± 20 | 84.71 ± 0.26 | 1,318 ± 25 | 660calAD - 691calAD (54.6%) 750calAD - 782calAD (13.6%) | 654calAD - 721calAD (72.9%) 741calAD - 770calAD (22.5%) | |
| IAAA-130055 | 1,230 ± 20 | 84.69 ± 0.25 | 1,305 ± 24 | 665calAD - 708calAD (47.3%) 747calAD - 766calAD (20.9%) | 660calAD - 724calAD (65.5%) 739calAD - 771calAD (29.9%) | |
| IAAA-130056 | 1,250 ± 20 | 85.6 ± 0.25 | 1,239 ± 25 | 692calAD - 749calAD (41.9%) 764calAD - 783calAD (14.1%) 790calAD - 810calAD (12.3%) | 687calAD - 871calAD (95.4%) | |
| IAAA-130057 | 1,290 ± 20 | 85.19 ± 0.26 | 1,276 ± 25 | 685calAD - 722calAD (37.8%) 741calAD - 770calAD (30.4%) | 670calAD - 777calAD (95.4%) | |
| IAAA-130058 | 1,240 ± 20 | 85.69 ± 0.26 | 1,228 ± 25 | 718calAD - 743calAD (16.7%) 769calAD - 826calAD (38.1%) 840calAD - 863calAD (13.3%) | 692calAD - 750calAD (27.6%) 763calAD - 881calAD (67.8%) | |

[参考値]

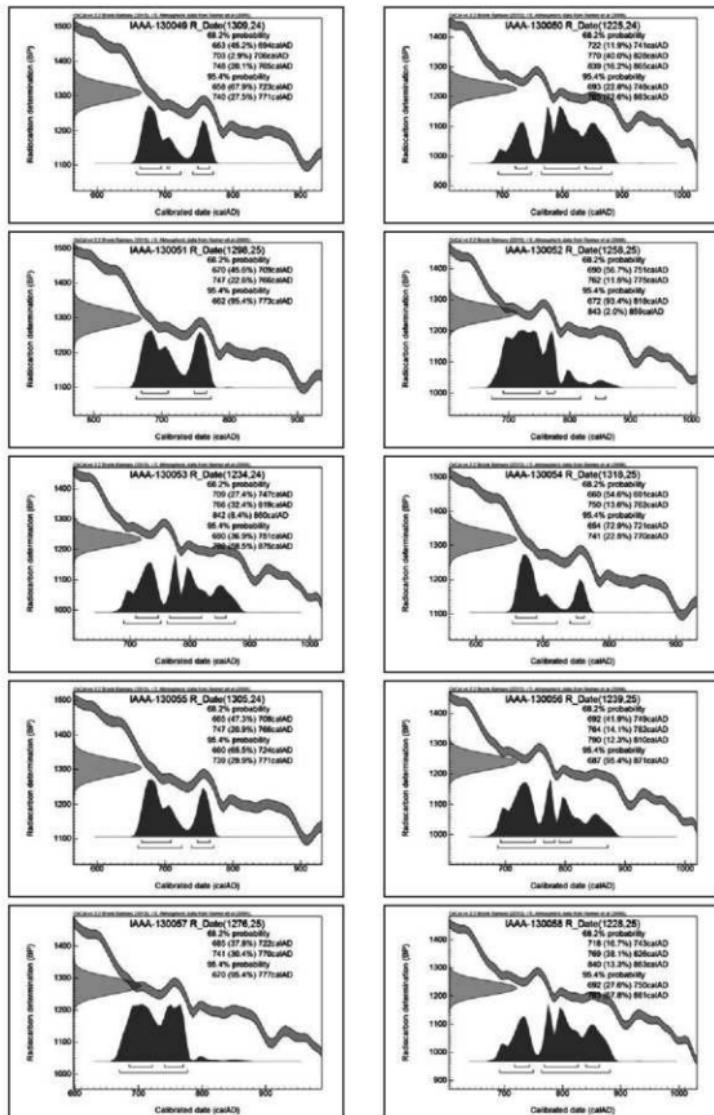


図4 暦年較正年代グラフ（参考）

写 真 図 版

第 1 編 南狼沢遺跡

みなみおいざわ



1 遺跡遠景（南東から）



2 遺跡遠景（北西から）

第1編 南猿沢遺跡



3 遺跡遠景（南から）



4 遺跡遠景（北から）



5 調査区全景（上空東から）



6 南区全景（上空南から）

第1編 南猿沢遺跡



7 北区全景（上空南から）



8 基本土層

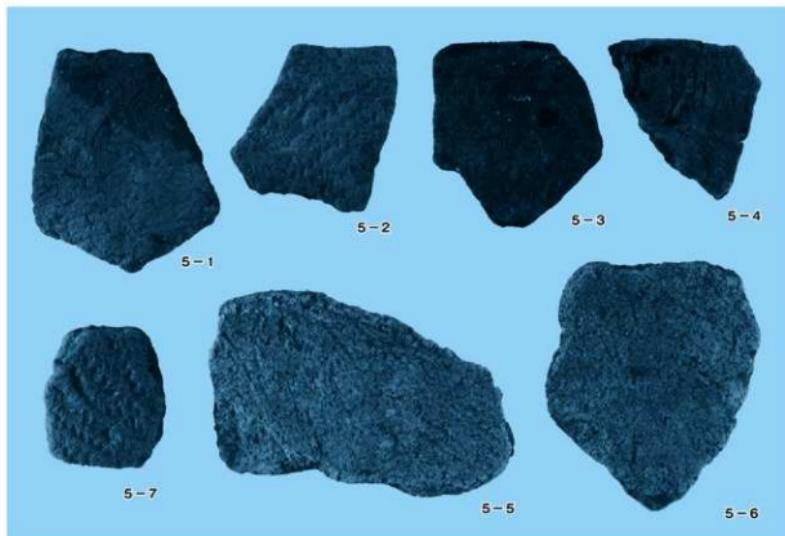
a 南区基本土層（東から）
b 北区基本土層（東から）



9 南区全景（東から）



10 北区全景（東から）



11 遺構外出土遺物（1）



12 遺構外出土遺物（2）

写 真 図 版

第2編 南狼沢A遺跡（1次調査）



1 調査区遠景（北東から）



2 調査区遠景（南西から）

第2編 南猿沢A遺跡(一次調査)



3 調査区遠景（北から）



4 調査区遠景（南から）



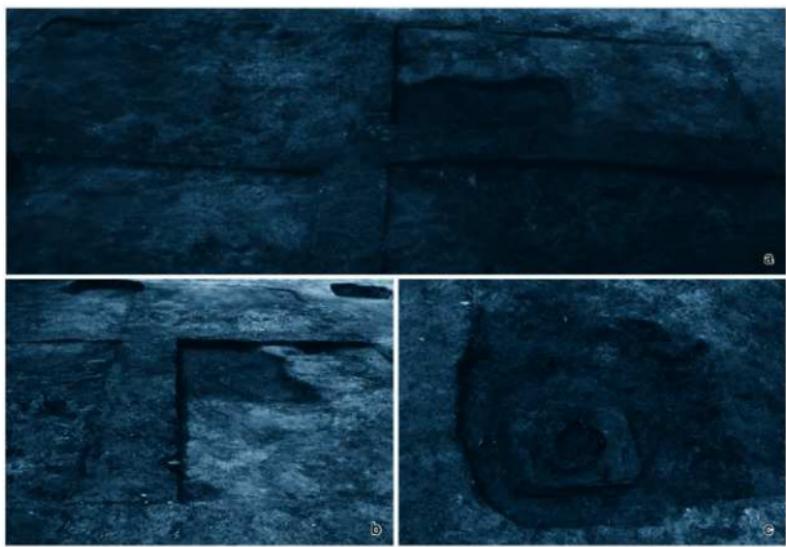
5 調査区全景（上空東から）



6 調査区全景（北西から）



7 1号竪穴住居跡全景（西から）

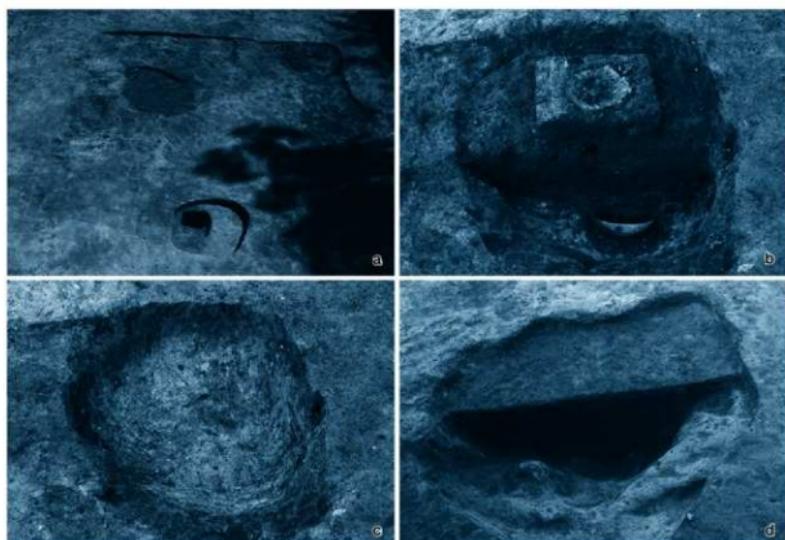


8 1号竪穴住居跡細部（1）

a 東西土層断面（南から）

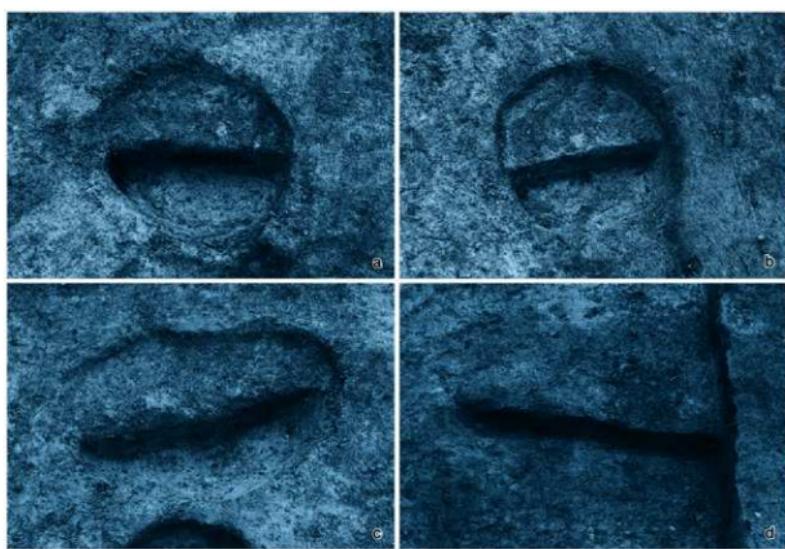
b 南北土層断面（東から）

c P1炭化物出土状況（東から）



9 1号竪穴住居跡細部（2）

a 床面確認状況（西から）
b P1 土層断面（西から）
c P1 全景（西から）
d P2 土層断面（南から）



10 1号竪穴住居跡細部（3）

a P5 土層断面（東から）
b P7 土層断面（東から）
c P9 土層断面（東から）
d カマド底面土層（南から）

第2編 南猿沢A遺跡(一次調査)

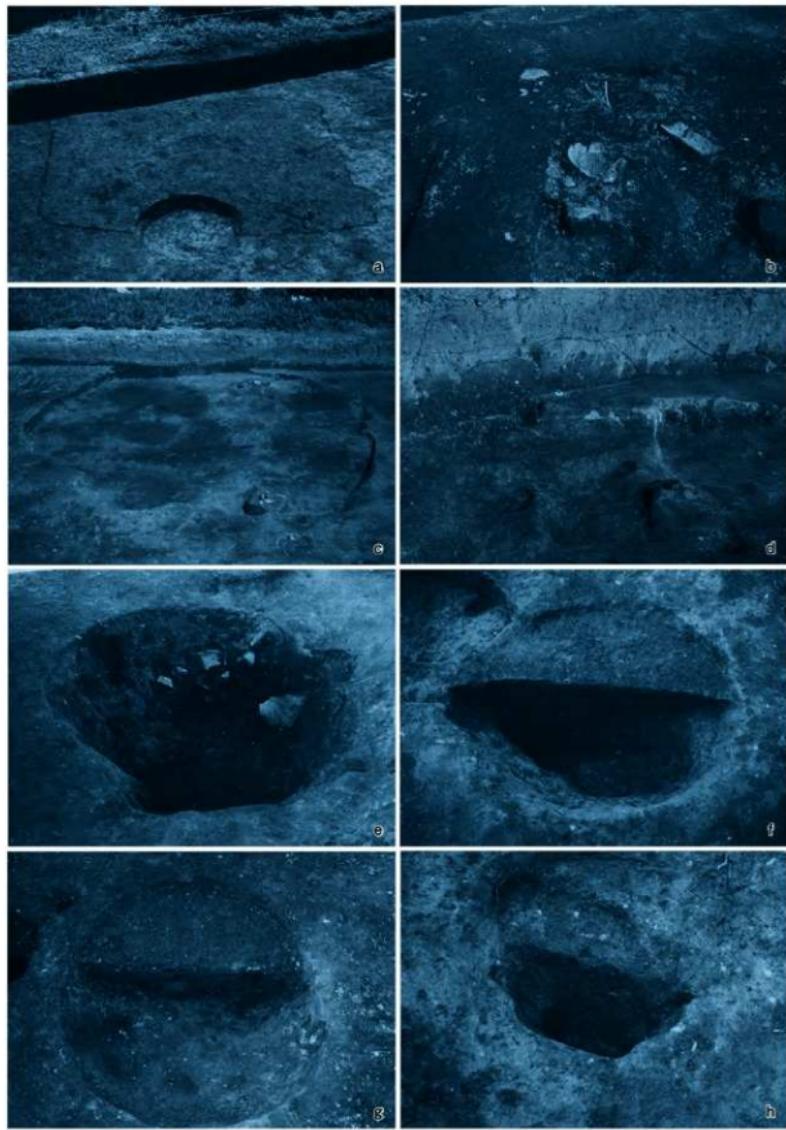


11 2号竪穴住居跡全景（西から）



12 2号竪穴住居跡細部（1）

a 東西土層断面（南から）
b 南北土層断面（西から）



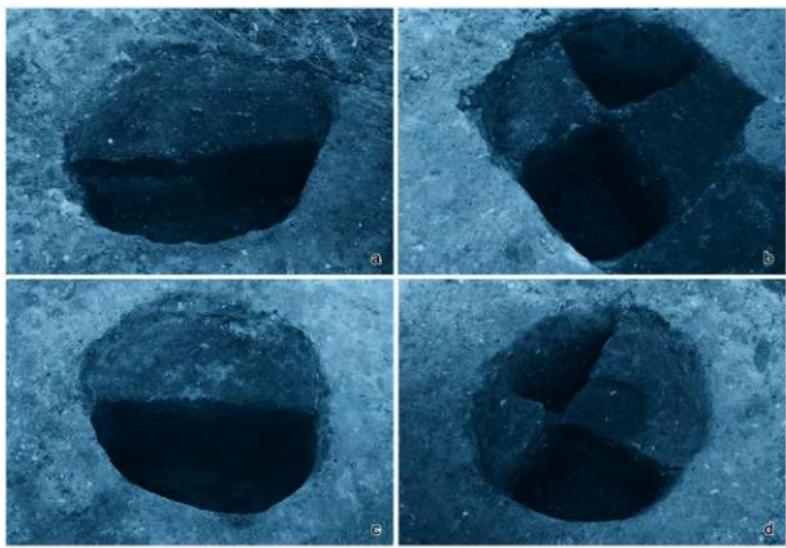
13 2号竖穴住居跡細部（2）

- a 挖出（西から）
- b 造物出土状況（南から）
- c 床面確認状況（西から）
- d フラッド全景（西から）
- e P 1 造物出土状況（南から）
- f P 6 土層断面（東から）
- g P 2 土層断面（東から）
- h P 7 土層断面（東から）

第2編 南猿沢A遺跡(一次調査)



14 1号掘立柱建物跡全景（上空東から）



15 1号掘立柱建物跡細部

a P 1 土層断面（南から）
b P 2 A 土層断面（南西から）
c P 3 土層断面（東から）
d P 5 土層断面（南東から）



16 2号掘立柱建物跡検出（北から）



17 2・3号掘立柱建物跡全景（上空北から）

第2編 南猿沢A遺跡(一次調査)



18 2号掘立柱建物跡細部（1）

a 全景（東から） b P 1 土層断面（東から）
c P 2 土層断面（南から）

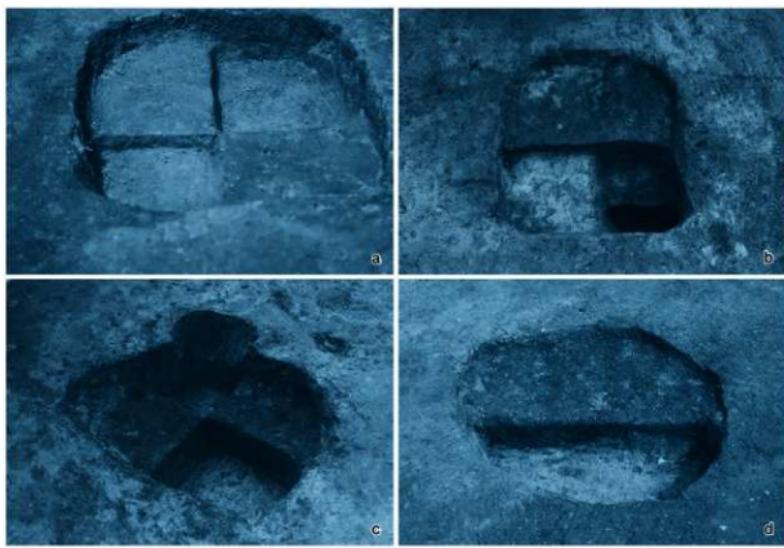


19 2号掘立柱建物跡細部（2）

a P 5 土層断面（南から） b P 7 土層断面（南から）
c P 8 土層断面（南東から） d 作業風景（北東から）



20 3号掘立柱建物跡全景（北から）



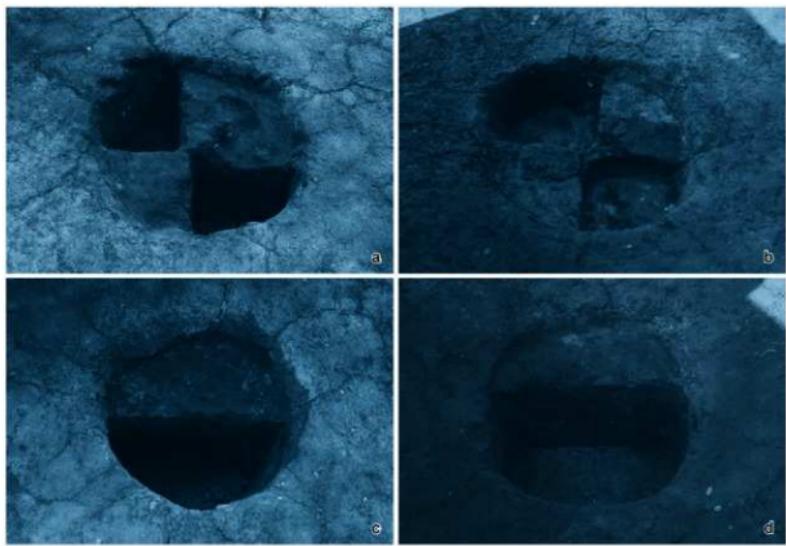
21 3号掘立柱建物跡細部

a P 1 土壌断面（東から）
b P 2 土壌断面（東から）
c P 7 土壌断面（南から）
d P 8 土壌断面（南から）

第2編 南猿沢A遺跡(一次調査)

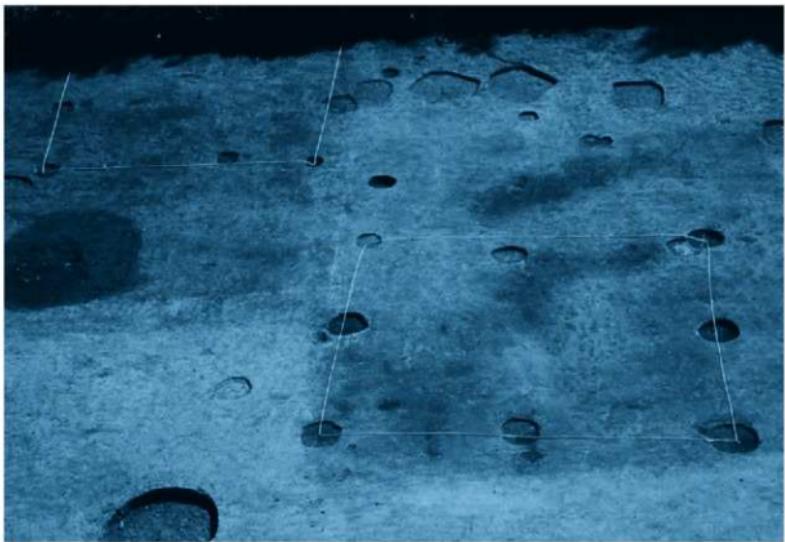


22 4号掘立柱建物跡全景（北から）

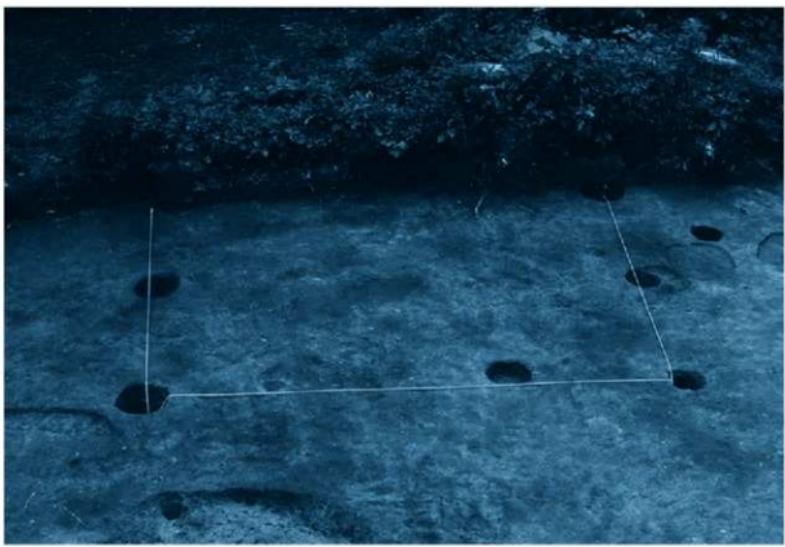


23 4号掘立柱建物跡細部

a P 1 土層断面 (東から)
b P 3 土層断面 (南から)
c P 6 土層断面 (東から)
d P 8 土層断面 (南から)



24 4・5号掘立柱建物跡検出（北から）



25 5号掘立柱建物跡全景（北から）

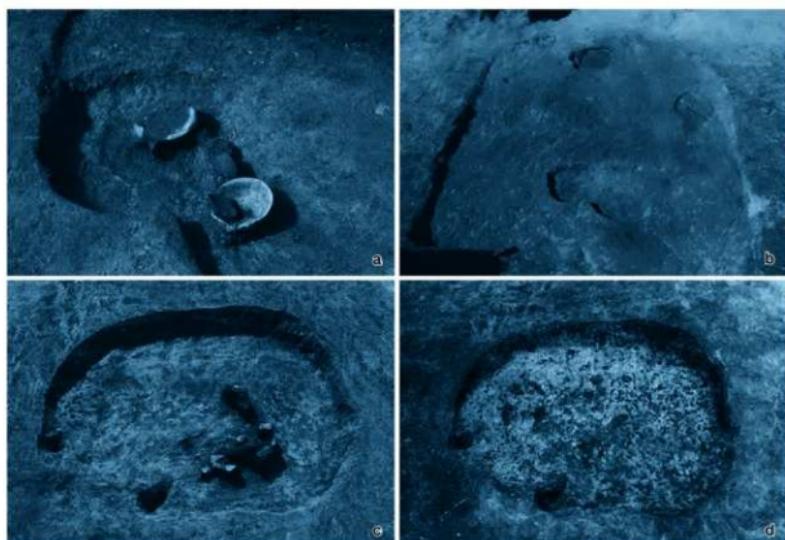
第2編 南猿沢A遺跡(一次調査)



26 6号掘立柱建物跡全景（上空西から）

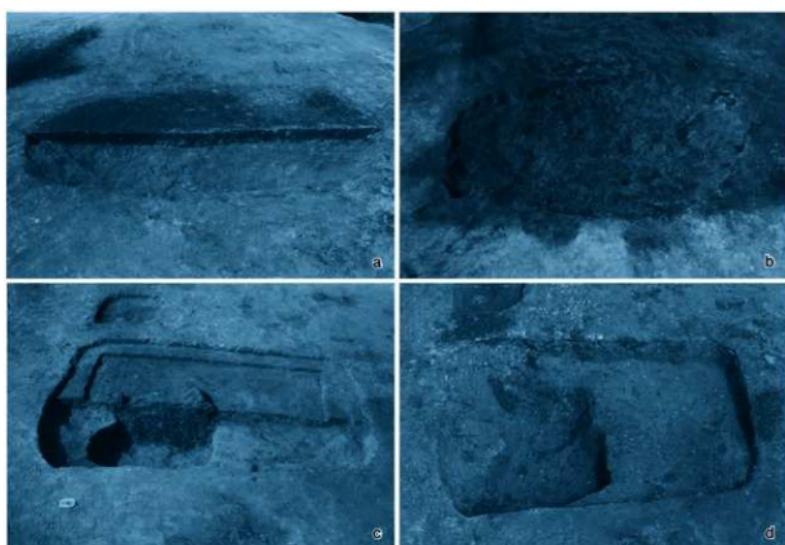


27 6号掘立柱建物跡全景（南から）



28 1・2号土坑

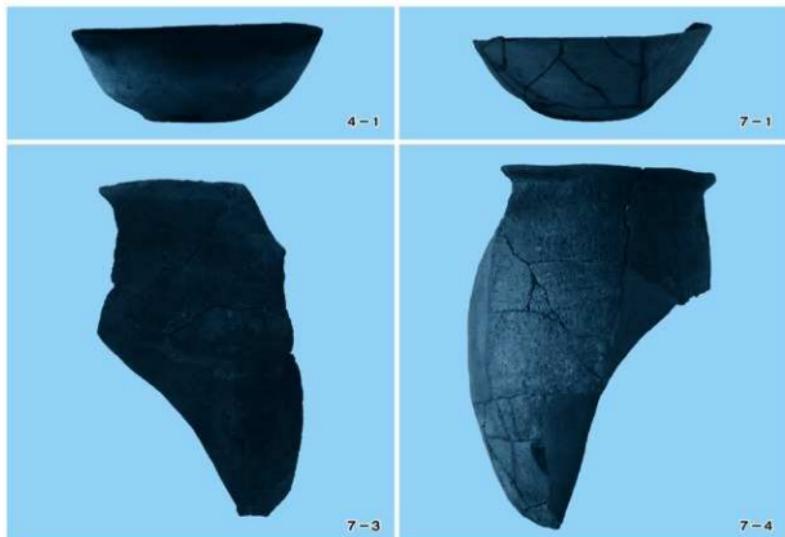
a 1号土坑遺物出土状況（南から）
b 1号土坑全貌（南から）
c 2号土坑遺物出土状況（東から）
d 2号土坑全貌（東から）



29 4・5号土坑

a 4号土坑断面（南から）
b 4号土坑全貌（南から）
c 5号土坑断面（南から）
d 5号土坑全貌（南から）

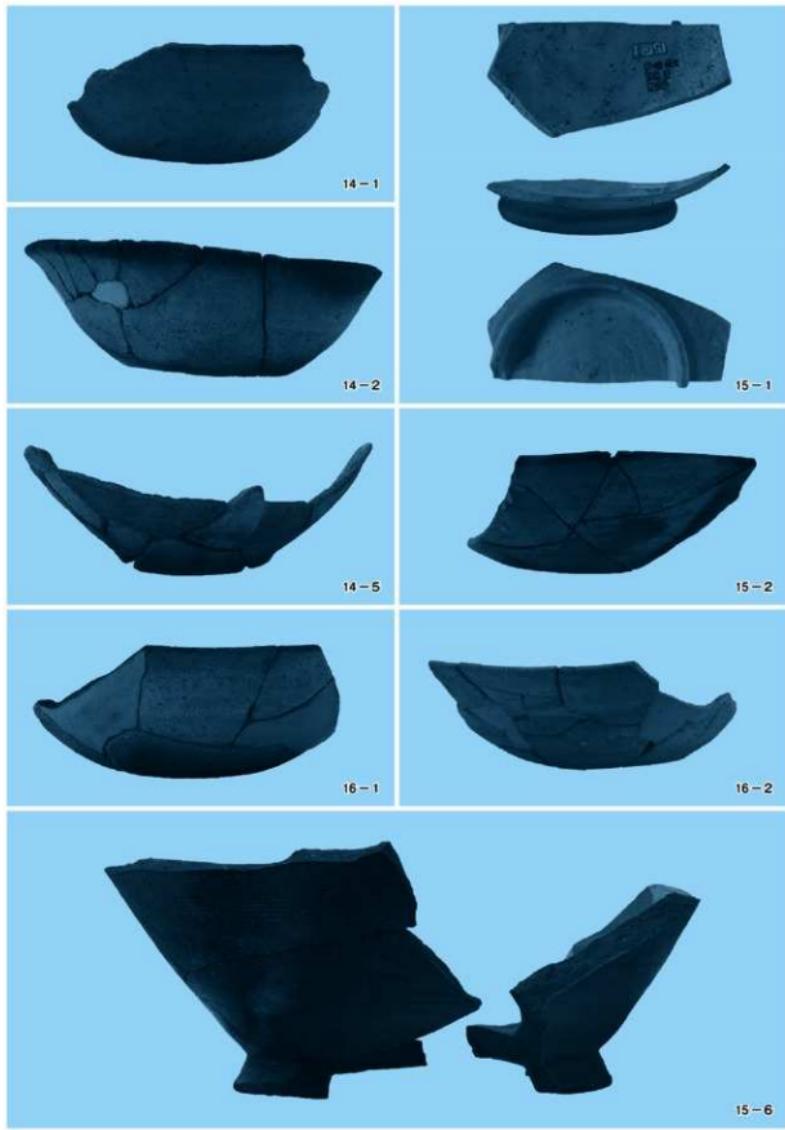
第2編 南猿沢A遺跡(一次調査)



30 1・2号竪穴住居跡出土遺物（1）

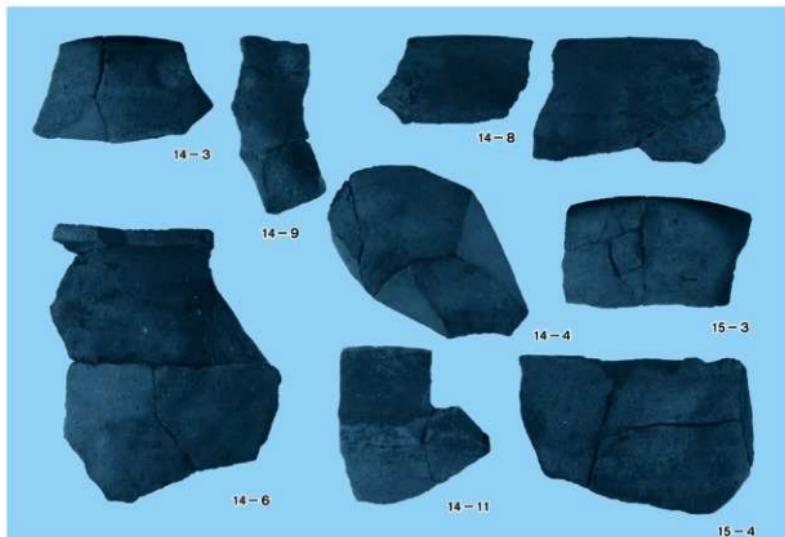


31 1・2号竪穴住居跡出土遺物（2）

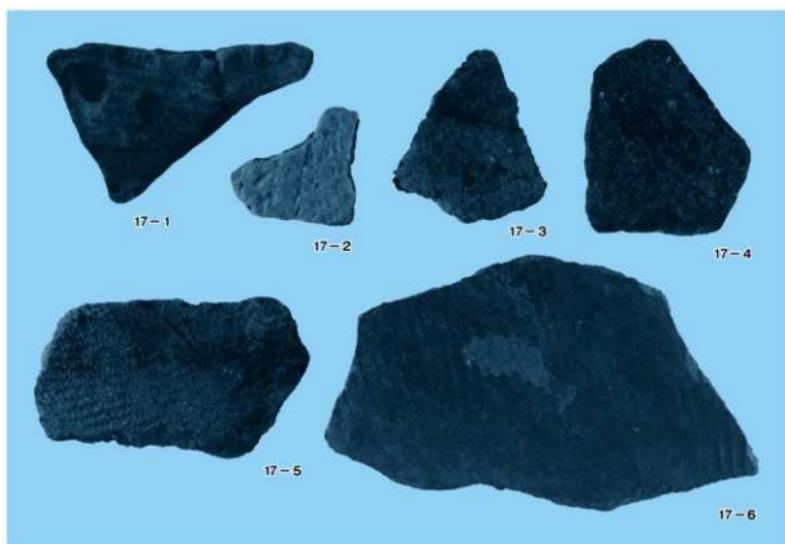


32 土坑出土遗物（1）

第2編 南猿沢A遺跡(一次調査)



33 土坑出土遺物（2）



34 遺構外出土遺物

写 真 図 版

第3編 南狼沢B遺跡



1 遺跡の位置（南から）



2 遺跡遠景（1）（上空西から）

第3編 南猿沢B遺跡



3 遺跡遠景（2）（南から）



4 遺跡全景（上空西から）



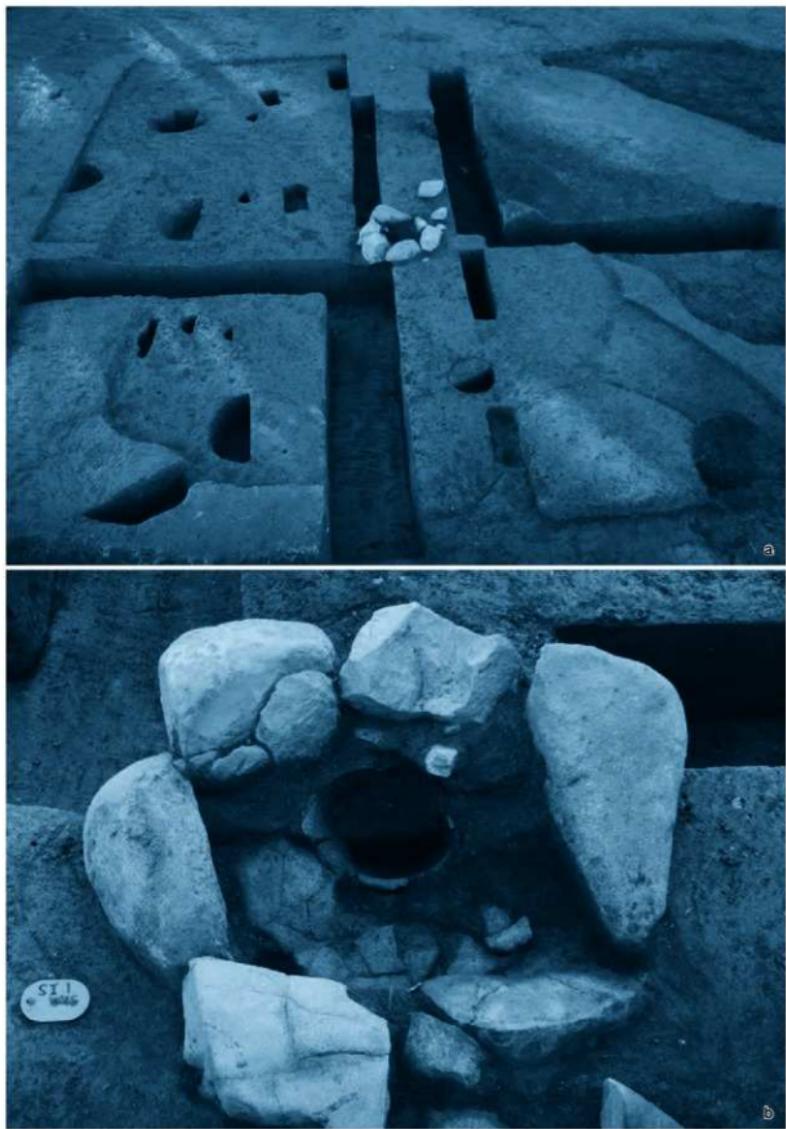
5 北区全景（上空南から）



6 基本土層

a 南区土層（1）（南東から）
b 南区土層（2）（東から）
c 北区土層（東から）
d 中区土層（南から）

第3編 南猿沢B遺跡



7 1号住居跡（1）

a 全景（東から）
b 炉全景（北から）



8 1号住居跡（2）

a 東西断面（南東から）
b 仰耕削（1）（南東から） c 仰耕削（2）（北西から）



9 1号木炭窯跡（1）全景（東から）

第3編 南猿沢B遺跡



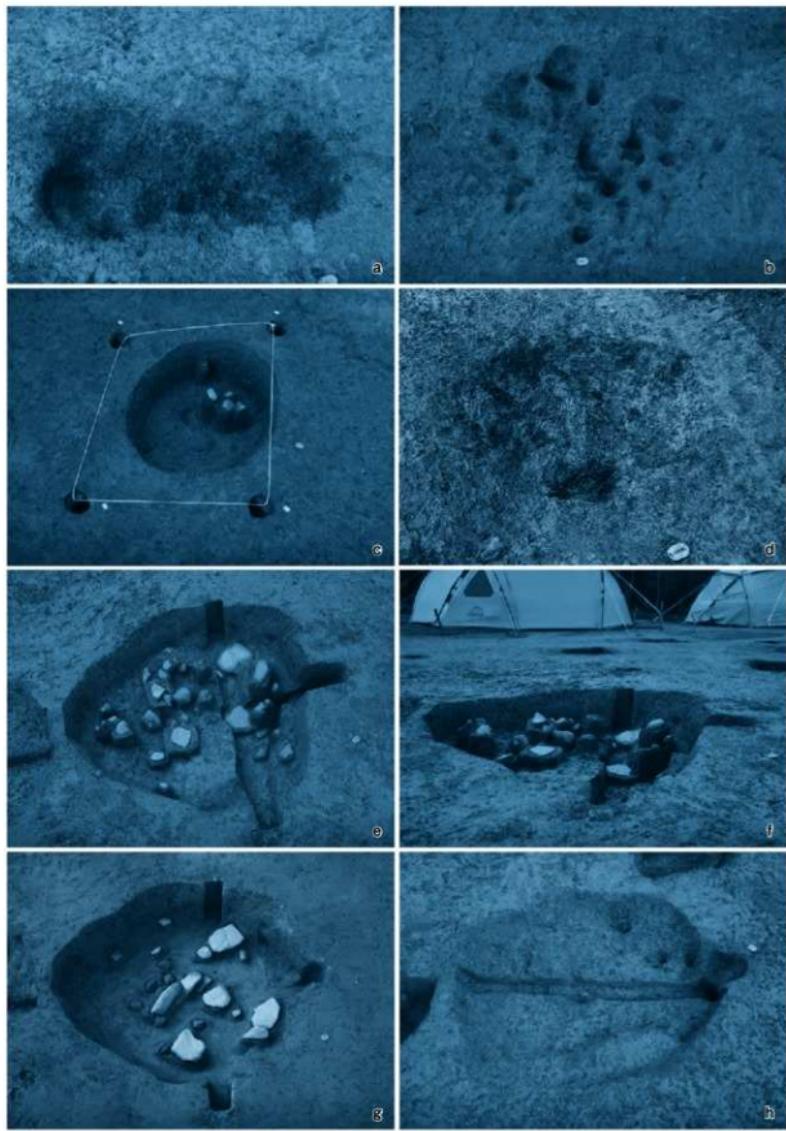
10 1号木炭窯跡 (2)

a 檜山 (東から)
b 上部土壙 (南から)
c 下部土壙 (南から)
d 中央部土壙 (西から)
e 热帯部全景 (南東から)
f 墓道全景 (南から)
g 作業場断面 (東から)
h 通路部断面 (北東から)



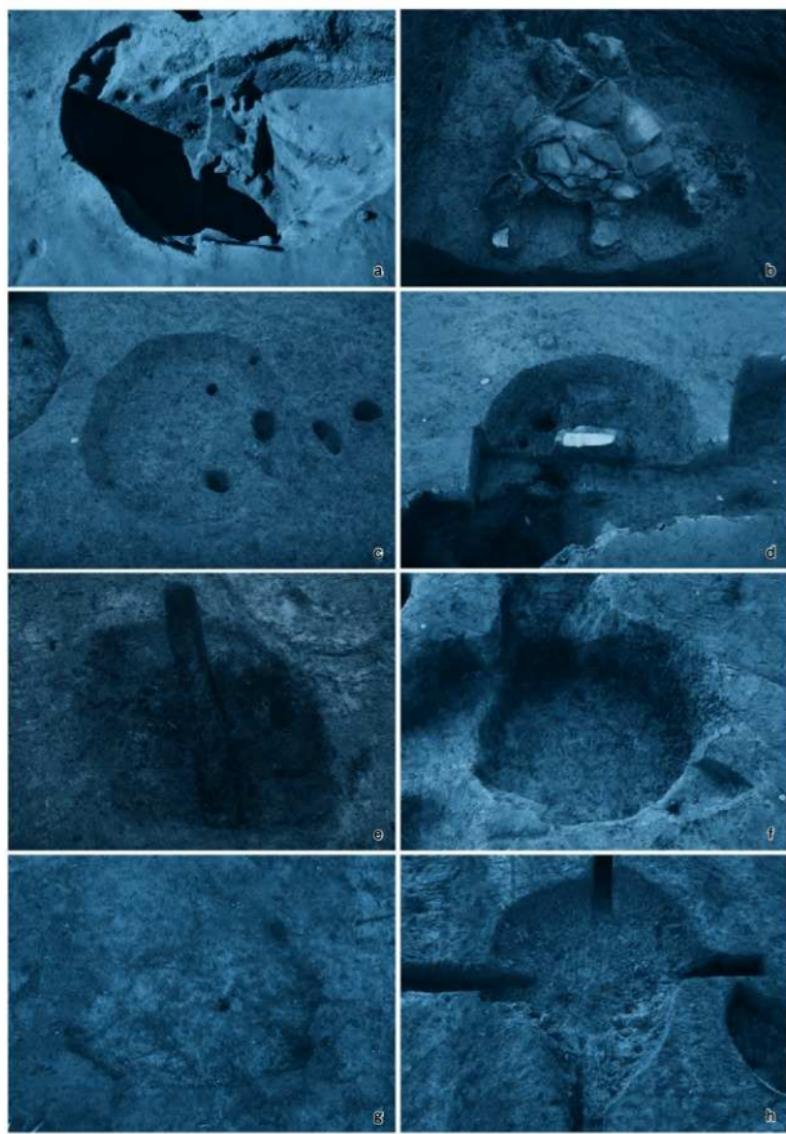
11 2号木炭窯跡

a 全景(1)(北から)
b 全景(2)(西から)
c 土壁(東から)
d 重複部土壁(東から)
e 北壁土壁(南から)



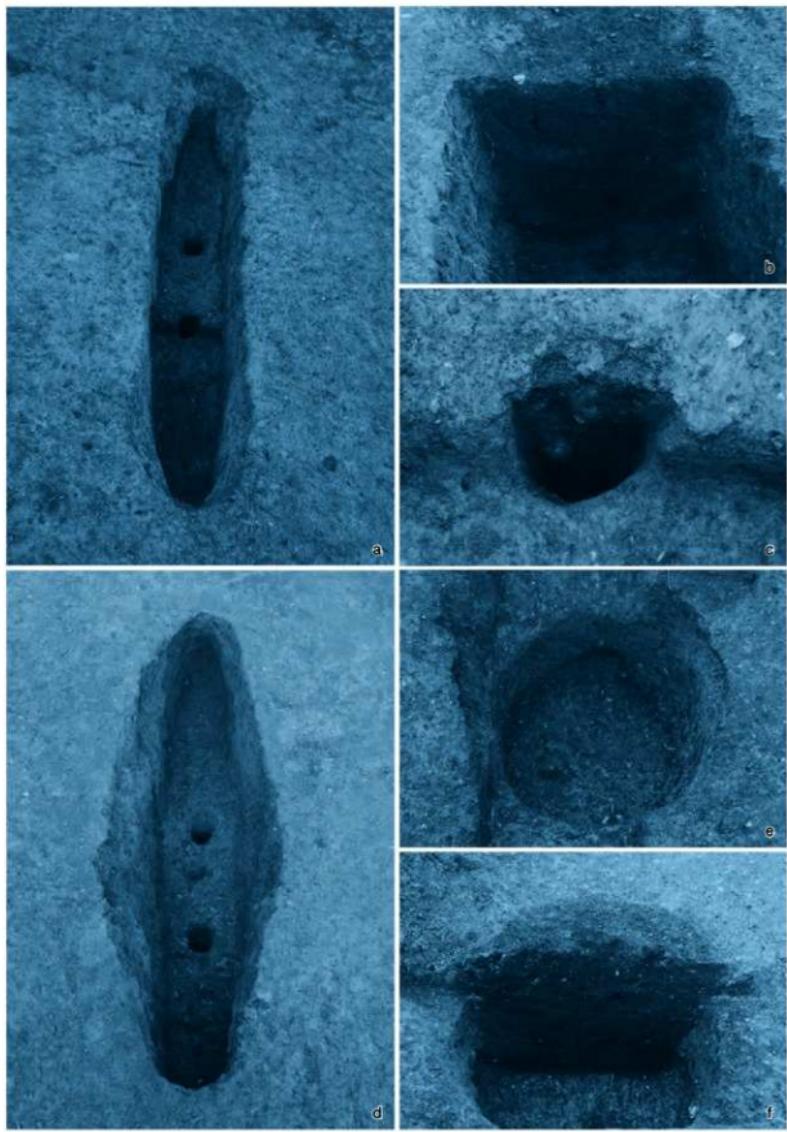
12 土坑（1）

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| a 1号土坑全貌 (東から) | b 2号土坑全貌 (南から) |
| c 3号土坑全貌 (東から) | d 4号土坑全貌 (北から) |
| e 5号土坑上層 (東から) | f 5号土坑遺物出土状況 (東から) |
| g 5号土坑全貌 (東から) | h 6号土坑全貌 (西から) |



13 土坑（2）

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| a 7号土坑全貌（東から） | b 7号土坑遺物（16-2）出土状況（西から） |
| c 8号土坑全貌（西から） | d 9号土坑全貌（東から） |
| e 10号土坑全貌（南西から） | f 11号土坑全貌（東から） |
| g 12号土坑全貌（南から） | h 13号土坑全貌（東から） |



14 土坑（3）

a 14号土坑全貌（南から）
b 14号土坑土層（南から）
c 14号土坑P1土層（南から）
d 15号土坑全貌（南から）
e 16号土坑全貌（東から）
f 16号土坑土層（南から）



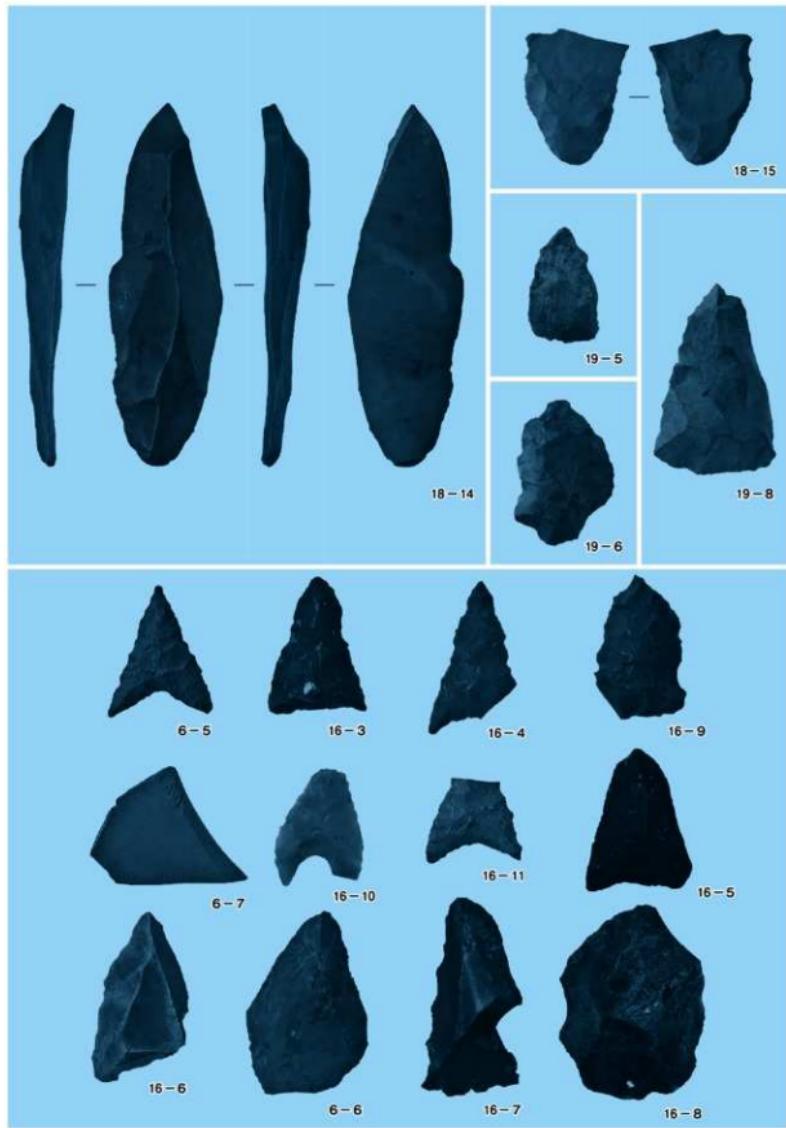
15 1号探査坑・1号焼土遺構

- | | |
|------------------------|------------------------|
| a 1号探査坑全貌（1）（上空西から） | b 1号探査坑全貌（2）（北から） |
| c 1号探査坑全貌（3）（南から） | d 1号探査坑南西延長部（北東から） |
| e 1号探査坑A-A'土層（東から） | f 1号探査坑B-B'土層（北東から） |
| g 1号焼土遺構全貌（東から） | h 1号焼土遺構断面（南から） |

第3編 南猿沢B遺跡

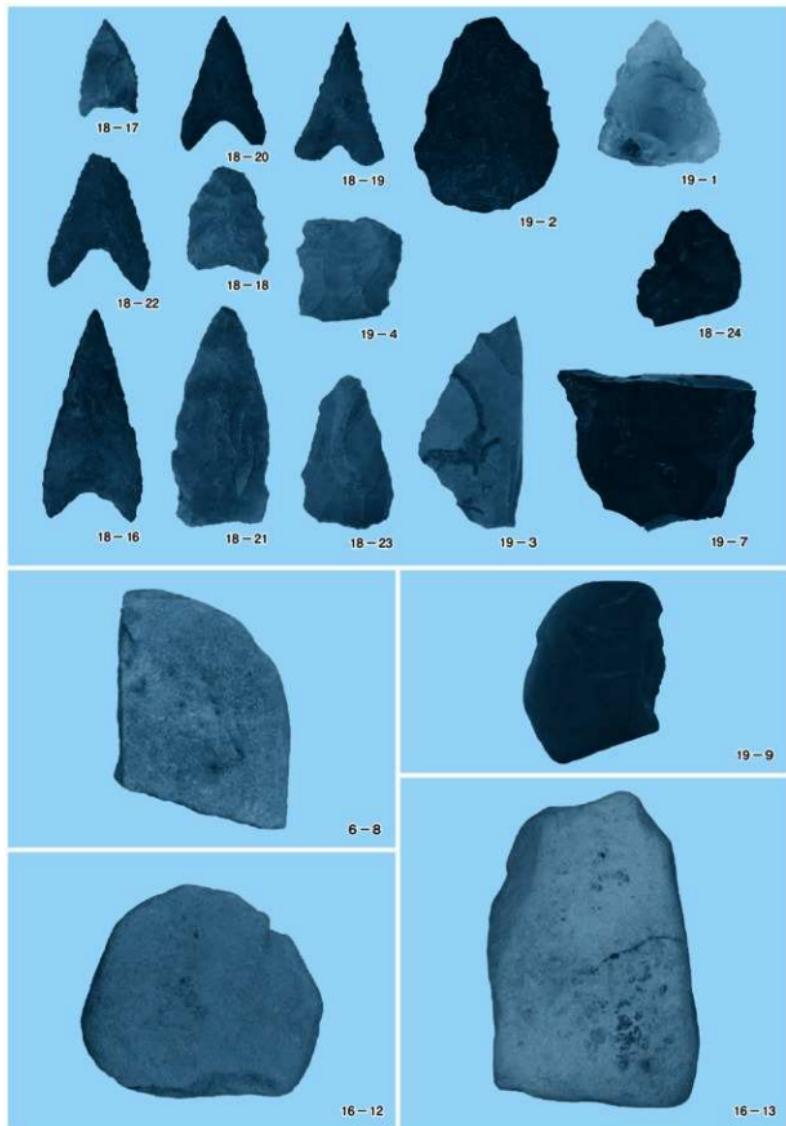


16 出土遺物（1）



17 出土遺物（2）

第3編 南猿沢B遺跡



18 出土遺物（3）

報告書抄録

| ふりがな | じょうばんじどうしやどういせきちょうさはうこく69 | | | | | |
|----------------|---|-----------------------|---|---------------------------------------|--|---------------------|
| 書名 | 常磐自動車道遺跡調査報告書 | | | | | |
| シリーズ名 | 福島県文化財調査報告書 | | | | | |
| シリーズ番号 | 第492集 | | | | | |
| 編著者名 | 吉田秀享・五十嵐敏裕・佐藤悦夫・佐藤啓・萩野美香・福田秀生・山井文菜 | | | | | |
| 編集機関 | 財團法人福島県文化振興財团遺跡調査部 | | | | | |
| | 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733 | | | | | |
| 発行機関 | 福島県教育委員会 | | | | | |
| | 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111 | | | | | |
| 発行年月日 | 2014年3月25日 | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 |
| | 市町村・遺跡番号 | | ° ° ° | ° ° ° | | |
| 南狼沢 | 福島県相馬郡 新地町谷地小屋 字南狼沢 | 561 | 00116 | 37° 52' 06" | 140° 52' 57" 2012年7月5日 ~ 2012年10月3日 | 2300m ² |
| 南狼沢A (1次調査) | 福島県相馬郡 新地町谷地小屋 字南狼沢 | 561 | 00154 | 37° 52' 20" | 140° 52' 56" 2012年6月11日 ~ 2012年10月3日 | 3200m ² |
| 南狼沢B | 福島県相馬郡 新地町谷地小屋 字南狼沢 | 561 | 00152 | 37° 52' 11" | 140° 52' 57" 2012年8月20日 ~ 2013年2月19日 | 9,400m ² |
| 所収遺跡名 | 種類 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 南狼沢 | 散布地 | 縄文時代 | 土 坑(1) | 縄文土器 石 器 | 縄文時代前期および晩期の集落端部の調査。 | |
| 南狼沢A (1次調査) | 集落跡 | 縄文時代 平安時代 | 堅穴住居跡(2) 掘立柱建物跡(6) 土 坑(5) | 縄文土器 石 器 土 鍋 器 須 悪 器 灰釉陶器 | 平安時代初頭の集落跡の調査。 | |
| 南狼沢B | 集落跡 狩場跡 炭坑跡 | 旧石器時代 縄文時代 平安時代 | 堅穴住居跡(1) 木 炭 窯 跡(2) 土 坑(16) 採 掘 坑(1) | 縄文土器 石 器 土 鍋 器 | 縄文時代中期末葉の堅穴住居跡および 早、中期の落し穴の調査。平安時代の木 炭窯跡の調査。彫器なども出土してい る。 | |
| 要約 | <p>・南狼沢遺跡は丘陵上に立地する遺跡で、調査範囲は小規模な谷を挟む北区・南区からなる。南区からは縄文時代の土坑1基、北区では縄文時代の遺物包含層を確認した。</p> <p>・南狼沢A遺跡は段丘上の平坦面に立地する遺跡で、平安時代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑を確認した。堅穴住居跡は小型で工房跡かと思われる。掘立柱建物跡は大型建物跡と小型建物跡に大別でき、計画的に配置されていた。建物跡近隣の土坑は廃棄坑とされていた。</p> <p>・南狼沢B遺跡は丘陵上に立地する遺跡である。縄文時代では、中期末葉に位置づけられる土器埋設石置場がを有する堅穴住居跡のほか、貯蔵窯、墓坑、落し穴などを確認した。平安時代では木炭窯跡2基を確認した。調査区外には鉄道跡の散在が認められ、製鉄道路の一部を構成すると考えられる。その他に旧石器時代の彫器も出土している。</p> | | | | | |

福島県文化財調査報告書第492集

常磐自動車道遺跡調査報告69

みなみおいざわ
南狼沢遺跡

みなみおいざわ
南狼沢A遺跡（1次調査）

みなみおいざわ
南狼沢B遺跡

平成26年3月25日発行

| | | |
|-----|------------------------|----------------------------|
| 編 集 | 財団法人福島県文化振興財団 | 遺跡調査部 |
| 発 行 | 福島県教育委員会 | (〒960-8688) 福島市杉妻町2-16 |
| | 財団法人福島県文化振興財団 | (〒960-8116) 福島市春日町5-54 |
| 印 刷 | 東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所 | (〒976-0042) 相馬市中村字塚ノ町65-16 |
| | 八幡印刷株式会社 | (〒970-8026) いわき市平字田町82-13 |